恒川遺跡群

（田中倉垣外・恒川A・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍）

— 遺物編その１（古代・中世） —

2005年３月

長野県飯田市教育委員会

恒川遺跡群

（田中倉垣外・恒川A・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍）

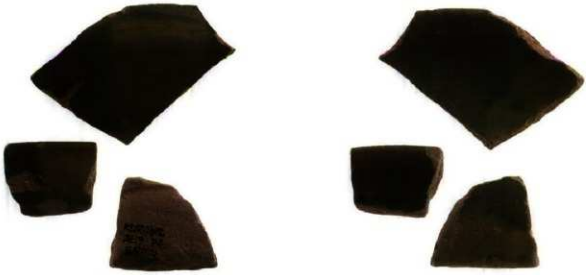
— 遺物編その1（古代・中世） —

2005年3月

長野県飯田市教育委員会

「厨」墨書灰釉陶器椀（藁師垣外SD10）

緑釉緑彩花文椀（田中倉垣外SB02）



三彩陶片（田中倉垣外遺構外）

緑釉椀・皿（田中倉垣外SB56）

緑釉陶片（田中倉垣外遺構外）

緑釉花文輪花椀・花文椀（田中倉垣外SB15）

緑釉皿（田中倉垣外SB83）

緑釉輪花皿（田中倉垣外遺構外）

緑釉陶片（薬師垣外遺構外）

灰釉陶器花文皿（田中倉垣外SB56）

朱墨パレット（田中倉垣外SB92）

漆容器（灰釉陶器短頸壺・恒川B遺構外）

上：**重圏文軒丸瓦**（薬師垣外SD10）

右：**瓦当**（薬師垣外SB45）

左　：墨書土師器杯（薬師垣外遺構外）
左下：畿内系縄文土器（恒川BSB03）
右下：畿内系縄文土器（田中倉垣外SB76）

例　言

1．本書は、国・県の補助を受け、恒川遺跡群内において昭和57年度から平成13年度までに実施した古代伊那郡衙址の内容解明とその保護を進めるための範囲確認調査及び個人住宅建設等のための発掘調査ならびに試掘調査における出土遺物についての報告書である。

2．飯田市教育委員会の直営事業である。

3．本書では、恒川遺跡群出土遺物のうち、古代（奈良・平安時代）・中世の土器・陶器を対象としている。

4．本書は、恒川遺跡群出土遺物についての基本資料の提示を目的とするものであり、郡衙関連遺物の様相および恒川遺跡群の郡衙としての位置づけ等については、今後刊行予定の『恒川遺跡群一総括編一（仮題）』によるものとする。

5．本書に掲載した遺物は未報告のものを対象としており、緊急発掘報告書として刊行されているものについては掲載していない。既刊報告書については、飯田市教育委員会　2003　『恒川遺跡群（新屋敷・薬師垣外・阿弥陀垣外地籍）一遺構編一』、飯田市教育委員会　2004　『恒川遺跡群（田中倉垣外・恒川A・恒川B地籍）一遺構編　その2一』（以下、『遺構編』）によるものとする。なお、本文中の「第Ⅱ章　古代の土器」の記述にあたっては、変遷等の検討をするために、恒川遺跡群の出土遺物全般を対象としているが、既刊報告書に掲載されている遺物の実測図は代表的なものについてのみ再度掲載している。

6．本書の作成にあたっては、田中倉垣外地籍はTAN・KUR（KUR）、恒川A地籍はGOA、恒川B地籍はGOB、阿弥陀垣外地籍はAMD、新屋敷地籍はARY、薬師垣外地籍はYKSの略号に地番を付して整理を行い、遺構番号は各地籍ごとの通し番号となっている。なお、本書掲載の遺物が出土した遺構については『遺構編』に掲載している。

7．本書の内容は、本文として古代の土器について記述し、実測図は田中倉垣外地籍、恒川B地籍、阿弥陀垣外地籍、新屋敷地籍、薬師垣外地籍の順で、各地籍ごとに遺構順に掲載し、写真は巻頭と巻末にそれぞれ掲載した。

8．本書の実測図について、土器断面の□は土師器、■は須恵器、▒は灰釉陶器を示している。また、土師器内面の▒は黒色処理を示す。土器以外については、▒は瓦、▒は鉄、▒は漆痕跡を示す。

9．本書に関わる図面整理・実測図作成は整理作業員の協力により、全調査員の総意のもと伊藤尚志・佐々木嘉和・澁谷恵美子が行った。写真撮影は、西大寺フォト　杉本和樹氏に依頼した。

10．本書は、「第Ⅱ章　古代の土器」については伊藤が執筆し、図版作成・編集は澁谷が担当した。また全体の総括は小林正春・吉川豊が行った。

11．本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

12．古代の土器編年作成にあたっては、次の方々にご指導・ご協力をいただいた。（五十音順・敬称略）
石上周蔵　　岡田正彦　　上沼由彦　　小平和夫　　宮沢恒之

目　次

本文目次

巻頭図版
例言
第Ⅰ章　経過 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1
第Ⅱ章　古代の土器 …… 2
　第1節　古代土器の分類 …… 2
　第2節　古代土器の段階設定 …… 6
　第3節　食器の変遷 …… 14
　第4節　煮沸具・貯蔵具の変遷 …… 26
　第5節　実年代の比定と段階の大別 …… 28
報告書抄録 …… 136

挿図目次

挿図1　古代土器の器種分類
挿図2　遺構別須恵器杯A法量
挿図3　遺構別須恵器杯A法量及び外傾指数
挿図4　遺構別黒色土器杯A法量
挿図5　遺構別土師器杯A法量
挿図6　遺構別土師器杯A・黒色土器杯A外傾指数
挿図7　時期別須恵器杯B法量
挿図8　須恵器杯B口径・器高比率
挿図9　時期別食器の構成
挿図10　古代各期の食器（1）
挿図11　古代各期の食器（2）
挿図12　古代の土器編年表（1）
挿図13　古代の土器編年表（2）
挿図14　古代の土器編年表（3）
挿図15　古代の土器編年表（4）
挿図16　古代の土器編年表（5）
挿図17　古代の土器編年表（6）
挿図18　古代の土器編年表（7）
挿図19　古代の土器編年表（8）

遺物図版目次

第1図　田中倉垣外　SB02
第2図　田中倉垣外　SB03
第3図　田中倉垣外　SB10
第4図　田中倉垣外　SB10
第5図　田中倉垣外　SB10
第6図　田中倉垣外　SB10
第7図　田中倉垣外　SB10
第8図　田中倉垣外　SB15
第9図　田中倉垣外　SB15
第10図　田中倉垣外　SB24
第11図　田中倉垣外　SB25・29・34
第12図　田中倉垣外　SB36
第13図　田中倉垣外　SB38
第14図　田中倉垣外　SB39
第15図　田中倉垣外　SB40
第16図　田中倉垣外　SB41・43
第17図　田中倉垣外　SB44
第18図　田中倉垣外　SB44
第19図　田中倉垣外　SB51
第20図　田中倉垣外　SB51・48
第21図　田中倉垣外　SB54
第22図　田中倉垣外　SB55
第23図　田中倉垣外　SB56
第24図　田中倉垣外　SB56・64
第25図　田中倉垣外　SB60
第26図　田中倉垣外　SB65
第27図　田中倉垣外　SB65
第28図　田中倉垣外　SB71・72
第29図　田中倉垣外　SB76
第30図　田中倉垣外　SB76
第31図　田中倉垣外　SB76
第32図　田中倉垣外　SB83
第33図　田中倉垣外　SB86
第34図　田中倉垣外　SB86・87

第35図　田中倉垣外　ＳＢ92・100
第36図　田中倉垣外　ＳＢ152・155・156・157
第37図　田中倉垣外　ＳＢ159・164・168
第38図　田中倉垣外　ＳＢ176・177・179・186
第39図　田中倉垣外　ＳＢ178
第40図　田中倉垣外　ＳＢ264・265・267
第41図　田中倉垣外　ＳＢ268・269・301
第42図　田中倉垣外　ＳＴ07・09・10・
ＳＫ02・06・09・10
第43図　田中倉垣外　ＳＫ12・13・21・22・
ＳＩ05・17・31・32・
小竪穴01・03・火葬墓01
第44図　田中倉垣外　道路址01
第45図　田中倉垣外　道路址01
第46図　田中倉垣外　祭祀址02・工房址01
第47図　田中倉垣外　遺構外
第48図　恒川Ｂ　ＳＢ03
第49図　恒川Ｂ　ＳＢ11・31
第50図　恒川Ｂ　ＳＢ39・75
第51図　恒川Ｂ　ＳＢ75・77・89
第52図　恒川Ｂ　ＳＢ92・93・94
第53図　恒川Ｂ　ＳＴ15・16・18・32・
ＳＫ13・小竪穴03
第54図　阿弥陀垣外　ＳＢ05・24・ＳＴ05
第55図　阿弥陀垣外　ＳＤ03・04
第56図　恒川Ｂ・阿弥陀垣外　遺構外
第57図　新屋敷　ＳＢ40・遺構外
第58図　薬師垣外　ＳＢ04・12・15
第59図　薬師垣外　ＳＢ22・24・36・45・57・
58・ＳＴ13・ＳＫ04・40・
44・集石土坑
第60図　薬師垣外　ＳＤ10
第61図　薬師垣外　ＳＤ10
第62図　薬師垣外　ＳＤ10
第63図　薬師垣外　ＳＤ11・12・33・34・36・40
第64図　薬師垣外　ＳＤ16
第65図　薬師垣外　ＳＤ16
第66図　薬師垣外　ＳＤ16
第67図　薬師垣外　遺構外

遺物写真図版目次

図版１　田中倉垣外　ＳＢ02・03・24・25
図版２　田中倉垣外　ＳＢ10
図版３　田中倉垣外　ＳＢ38・43・51・54
図版４　田中倉垣外　ＳＢ44
図版５　田中倉垣外　ＳＢ55・60・65・71
図版６　田中倉垣外　ＳＢ56
図版７　田中倉垣外　ＳＢ76
図版８　田中倉垣外　ＳＢ83・86・92・100
図版９　田中倉垣外　ＳＢ159・168・176
図版10　田中倉垣外　ＳＢ178
図版11　田中倉垣外　ＳＢ179・264・268・269
図版12　田中倉垣外　ＳＢ10
図版13　田中倉垣外　ＳＢ76・02・03・04
図版14　恒川Ｂ　ＳＢ03・39・75・77
図版15　恒川Ｂ　ＳＢ94・03・ＳＫ13・遺構外
図版16　阿弥陀垣外　ＳＢ05・24・遺構外
図版17　新屋敷　ＳＢ13・遺構外
図版18　薬師垣外　ＳＢ04・15・遺構外
図版19　薬師垣外　ＳＤ10・34・遺構外
図版20　薬師垣外　ＳＤ16
図版21　薬師垣外　ＳＢ45・ＳＤ16
図版22　薬師垣外　ＳＤ16
図版23　薬師垣外　ＳＤ16
図版24　薬師垣外　ＳＤ10・遺構外
図版25　薬師垣外　ＳＤ10・遺構外

第Ⅰ章　経　過

第1節　調査の経過

恒川遺跡群における田中倉垣外地籍（KUR）・恒川A地籍（GOA）・恒川B地籍（GOB）・阿弥陀垣外地籍（AMD）・新屋敷地籍（ARY）・薬師垣外地籍（YKS）の調査位置及び経過は、飯田市教育委員会　2003　『恒川遺跡群（新屋敷・薬師垣外・阿弥陀垣外地籍）－遺構編－』ならびに飯田市教育委員会　2004　『恒川遺跡群（田中倉垣外・恒川A・恒川B地籍）－遺構編　その2－』に記載している。

第2節　調査組織

1．主管課

飯田市教育委員会　社会教育課文化係（昭和57年度～平成8年6月）
博物館課埋蔵文化財係（平成8年7月～平成12年度）
生涯学習課文化財保護係（平成13年度～）

2．調査主体者（平成16年度　報告書刊行時）

飯田市教育委員会　教育長　冨田拳啓（～平成17年3月）　伊澤宏爾（平成17年3月～）
総　括　吉川　豊
調査員　伊藤尚志　佐々木嘉和　馬場保之　澁谷恵美子　下平博行　坂井勇雄
作業員　金井照子　小平まなみ　竹本常子　橋千賀子　樋本宣子　松本恭子
宮内真理子　森藤美知子　吉川悦子

3．指　導

文化庁
独立行政法人文化財研究所　奈良文化財研究所
長野県教育委員会　文化財・生涯学習課

4．事務局（平成16年度　報告書刊行時）

飯田市教育委員会　教育次長　尾曽幹夫
生涯学習課長　小林正春
生涯学習課文化財保護係長　吉川　豊
生涯学習課文化財保護係　馬場保之　澁谷恵美子　佐々木行博
下平博行　坂井勇雄

第Ⅱ章　古代の土器

第1節　古代土器の分類

恒川遺跡群より出土した古代の土器を整理するにあたって、土器の種類と器種を次のように分類し検討した。分類については、小平和夫氏（財長野県埋蔵文化財センター　1990）を参考にしている。

1．種　類

素材と製作技法から次のように種類を分類した。

土　師　器 … 酸化焔焼成による、軟質の赤色土器。ロクロ調整のものと非ロクロ調整のものがある。

黒色土器 … ロクロ調整土師器の一種であるが、土器の内面あるいは内外面ともに黒色処理を施したもの。

須　恵　器 … 還元焼成による、硬質の青灰色土器。ロクロ調整で、窯で焼いた土器。

軟質須恵器 … 須恵器の一種であるが、灰白色で軟質なもの。

灰釉陶器 … 灰釉を施した硬質の陶器。

山　茶　碗 … 灰釉陶器と同じ焼成であるが、釉を施さないもの。

緑釉陶器 … 鉛釉を施した硬質または軟質の陶器。

2．用途による大別

古代土器はその用途により、次のように大別できる。

食　　器 … 飲食に使用される容器。杯・椀・皿・盤・高杯などがある。また、鉢などの非加熱の調理用具も一部含む。容器の種類・形態は多岐にわたり、時期による器形の変化も著しい。

煮　沸　具 … 食料を加熱するための容器。甕・甑などがあり、そのほとんどは土師器であるが、まれに須恵器の甑がある。

貯　蔵　具 … 食料などを貯蔵するための容器。甕・壺・瓶類があり、須恵器・灰釉陶器などの硬質な土器・陶器が用いられる。

3．器　種（挿図1）

器形と製作技法から次表のように器種を分類した。

食　器

種類	器種名	器　種　説　明
土師器	杯A	直線的に開く体部を持ち、高台を有しない土器。底部切り離し技法は回転糸切りが主であるが、時期によっては回転ヘラ切りのもの、静止糸切りのものもみられる。須恵器杯Aと同形態。ロクロ調整。
	杯D	古墳時代後期から続く丸底の土器。体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削り、口縁部にはヨコナデを施す。内面あるいは内外面にヘラ磨きをし、黒色処理を施す。非ロクロ調整。
	椀	高台を有し、体部が直線的にのびる土器。ロクロ調整。
	鉢A	杯Aと同じ形の大型の土器。ロクロ調整。
	鉢B	小さめの底部から体部は直線的に開く大型の土器。須恵器鉢Bと同形態。ロクロ調整。
	皿A	高台を有しない扁平な土器。ロクロ調整。
	皿B	高台を有する扁平な土器。灰釉陶器皿と同形態。ロクロ調整。
	耳皿	口縁端部を折り曲げた皿。ロクロ調整。
	盤B	体部は浅く直線的で、高台が付く。ロクロ調整。
	高杯	浅めの杯部に、高い脚台をつけたもの。非ロクロ調整。
黒色土器	杯A	直線的に開く体部を持ち、高台を有しない土器。底部切り離し技法は回転糸切りのみである。須恵器杯Aと同形態。
	椀	明確な稜を持たず、高台を有する土器。底部内面から体部にかけて丸みを帯びて、緩やかに立ち上がる。灰釉陶器椀と同形態。
	皿B	高台を有する扁平な土器。灰釉陶器皿と同形態。
	耳皿	口縁端部を折り曲げた皿。
	鉢A	杯Aと同じ形の大型の土器。
	盤B	体部は浅く直線的で、口径の小さい土器。脚の高い高台が付く。
	盤C	脚の高い高台が付く大型の土器。
須恵器	杯A	直線的に開く体部を持つ、高台を有しない土器。底部切り離し技法は回転ヘラ切りから静止糸切り、回転糸切りへと変化をする。
	杯B	箱形の体部に高台を付けたもの。体部の立ち上がりに明確な稜を持つ土器。
	杯C	体部の立ち上がりは杯Bと同じであるが、口縁部が僅かにくびれる薄形の土器。蓋Bと対応すると思われるが、明確ではない。
	杯D	ロクロ調整で口縁部内面に立ち上がりをもつ丸底の土器。古墳時代後期から続く杯。
	椀	灰釉陶器に似た器形で、底部内面から体部にかけて丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。高台を有する土器。
	鉢B	丸底または尖底で、体部は直線的に開き口縁部で内湾する土器。
	鉢C	小さめの底部から体部は直線的に開き、頸部で一度緩く締まって口縁部で外反する。
	皿A	高台を有しない扁平な土器。
	皿B	扁平で直線的に開く体部に高台が付く。
	盤A	体部は浅く直線的で、口縁部が折り返したように立ち上がる。

須恵器	盤B	口径は小さく、体部は浅く直線的で、脚の高い高台が付く。
	高杯	浅めの杯部に、高い脚台をつけたもの。
	蓋A	内面に返りが付き、天井部に扁平な宝珠形のつまみが付く。
	蓋B	口縁端部を折り曲げ、天井部に扁平なつまみが付く。
	蓋C	杯Dに対応する蓋で、つまみが付かない。
軟質須恵器	杯A	直線的に開く体部を持つ、高台を有しない土器。底部切り離し技法は回転糸切りである。須恵器杯Aの系譜で捉えられるが、体部の立ち上がり部分に指による押さえがなく、底部内面から体部にかけて緩やかに立ち上がる。
	耳皿	口縁端部を折り曲げた皿。
灰釉陶器	椀	体部は深く直線的で、体部の立ち上がりは丸みを帯びて緩やかに立ち上がる、明確な稜を持たない陶器。高台を有す。
	皿	高台を有し、明確な稜を持たない扁平な土器。
	段皿	内面に明瞭な段が付けられる皿。
	耳皿	口縁端部を折り曲げた皿。

煮沸具

種類	器種名	器種説明
土師器	甕A	輪積み成形の後、内外面をナデ調整する長胴甕。
	甕B	器面をハケ目で調整する長胴甕。
	小型甕A	器面ナデ調整の小型甕。
	小型甕B	器面ハケ調整の小型甕。
	小型甕C	体部外面を削り調整する小型甕。
	小型甕D	ロクロ調整の小型甕で、体部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す。底部には糸切り痕を残す。
	甑	恒川遺跡群では形態のわかる資料がない。
	羽釜	恒川遺跡群では形態のわかる資料がない。
須恵器	甑	恒川遺跡群では形態のわかる資料がない。

貯蔵具

種類	器種名	器種説明
須恵器	長頸壺A	体部から細い頸部が直立気味にのびるもので、体部は球形を呈す。口縁部で折り返し口縁帯をつくる。
	長頸壺B	体部は胴の部分で屈曲し、口縁部がラッパ状に開く。
	甕A	卵形の体部に外反する口頸部を付けたもの。
	甕B	卵形の体部に強く外反する短い口頸部を付けたもの。
	甕C	平底の甕で肩部に凸帯を回し、耳状の突起を付けたもの。
	短頸壺	体部がやや長い形態で頸部を直立に立てる。底部は回転糸切りのものが多い。

須恵器	横瓶	横に長い俵型の体部の横腹に短い頸部を付けたもの。
	平瓶	扁平な体部に、口頸部を天井の一方に付けたもの。
灰釉陶器	長頸壺	一般的呼称に従う。
	短頸壺	一般的呼称に従う。
	浄瓶	一般的呼称に従う。

挿図1　古代土器の器種分類

第２節　古代土器の段階設定

これから述べる検証は恒川遺跡群全体の状況を把握するために、本報告書に掲載されていない資料が含まれている。未掲載のものについては、後述する「５．時期別の食器の様相」に各期の代表的な住居址出土資料を掲載した。

１．杯Ａの変遷による段階の設定

杯Ａは出土量が豊富で、須恵器・黒色土器・土師器と種類は変化をしているものの、古代を通して普遍的に存在する。そのため型式変化が追いやすく、古代の時期区分を行う上で大きな判断材料となるものである。松本平ではこの杯Ａの変遷を基にした時期区分が既に完成されているが、それはこの下伊那地域でも大きく変わらないと考えられる。そこで恒川遺跡群においても杯Ａの出土が多かった住居址を選び出し、これを検証することで恒川遺跡群における土器の消長を追う基準とすることとした。

（１）須恵器杯Ａ（挿図２・３）

ロクロを使用する青灰色硬質の土器で、底部の切り離し技法は回転ヘラ切りから回転糸切りへと変化し、体部が徐々に外傾を強めることが明らかとなっている。

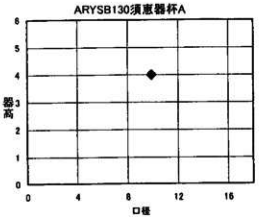
ＡＲＹ－ＳＢ130では１点が検証できた。底部は回転ヘラ切り未調整であるが、切り離し時の歪みが激しく平らでない。法量は口径9.9cm、器高4.0cmで、外傾指数は39を示す。この杯Ａには内面に返りを持つ蓋Ａとセットになると考えられる。当住居址では杯Ａは１点しか確認できなかったが、蓋Ａは４点確認できた。口径は外縁まで含め10.2～10.9cmを測る。１点は返りの部分が僅かな盛り上がり程度にしか確認できないが、残る３点は返りが蓋の外縁より若干突き出す。

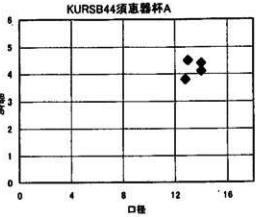
ＫＵＲ－ＳＢ44では３点が検証できた。底部は、２点が回転ヘラ切りの後ヘラ削り、１点が回転ヘラ切り未調整である。法量は口径12.8～14.0cm、器高3.8～4.4cmで、外傾指数は45～83を示す。この住居址では内面に返りを持つ蓋Ａは認められない。

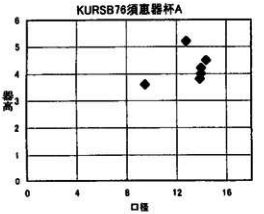
ＫＵＲ－ＳＢ76では８点が検証できた。この住居址では底部回転ヘラ切りの他に、静止糸切り・回転糸切りのものも確認できる。点数の比は回転ヘラ切り６点、静止糸切り１点、回転糸切り１点である。底部回転ヘラ切りのものの内、４点は回転ヘラ切りの後ヘラ削り、１点は回転ヘラ切りの後叩き調整、残る１点は回転ヘラ削り未調整である。法量は口径12.8～14.4cm、器高3.8～5.2cm、外傾指数57～76のものが主体となっているが、口径9.5cm、器高3.6cm、外傾指数40の小型のものも見られる。静止糸切りのものは口径11.0cm、器高4.0cm、外傾指数76で、回転糸切りのものは口径13.0cm、器高4.5cm、外傾指数73である。

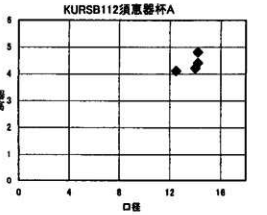
ＫＵＲ－ＳＢ112では４点が検証できた。法量は口径12.5～14.2cm、器高4.1～4.5cmで、外傾指数は61～90を示す。底部切り離し技法はＫＵＲ－ＳＢ76と同様に回転ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りが混在する。点数は、回転ヘラ切り後ヘラ削りのものが２点、静止糸切りのもの・回転糸切りのものが１点ずつである。

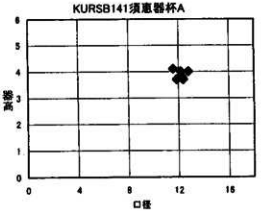
ＫＵＲ－ＳＢ141では６点が検証できた。底部は全て回転糸切り技法で、切り離し後ヘラ等で調整は行われていない。法量は口径11.6～12.8cm、器高3.7～4.1cmで、外傾指数は73～88を示す。

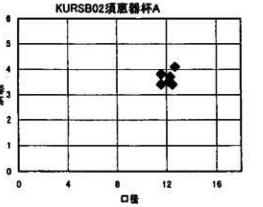




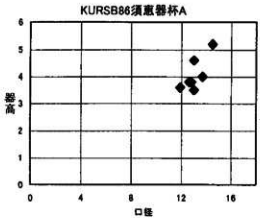


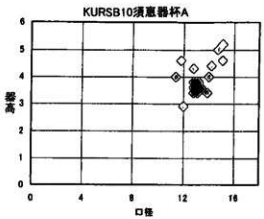


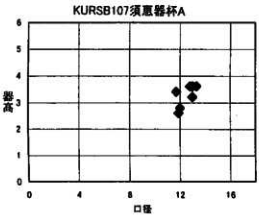


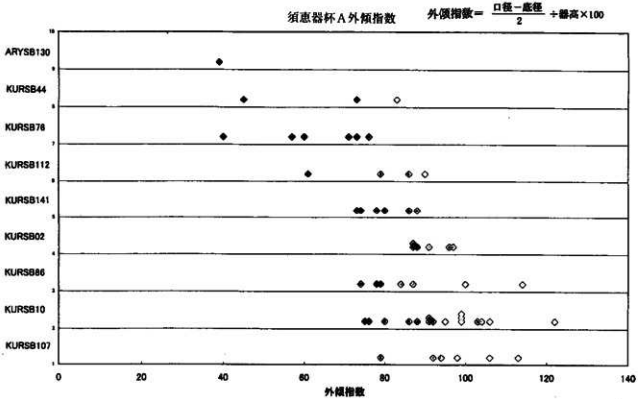


挿図２　遺構別須恵器杯Ａ法量









挿図３　遺構別須恵器杯Ａ法量・外傾指数

ＫＵＲ－ＳＢ02では６点が検証できた。法量は口径11.6～12.7cm、器高3.4～4.1cmで、外傾指数は87～90を示す。底部は１点不明確なものがあるが、他は全て回転糸切り未調整である。

ＫＵＲ－ＳＢ86では７点が検証できた。底部は全て回転糸切り未調整であるが、この住居址ではこれまでに見られた青灰色で硬質の須恵器の他に灰白色で軟質の須恵器が見られる。軟質須恵器の中には一見、土師器と見分けのつかないほど焼きの悪いものも見られる。構成比は硬質須恵器１点、軟質須恵器６点である。法量は口径11.9～14.5cm、器高3.5～5.2cmで、外傾指数は74～114を示す。また、これまで段階的に体部の外傾を強めてきた杯Ａはここに至って、全体的にはその傾向を弱める。また、体部内面の立ち上がりにも大きな変化が見られる。これまで体部内面の立ち上がり部分は強く押さえられ、底部と体部には明確な境を認めることができたが、この住居址のものは底部から体部にかけて撫で上げたように緩やかになり、半球状を呈す。

ＫＵＲ－ＳＢ10では16点が検証できた。この住居址で検証できたものは全てが底部回転糸切り未調整で、灰白色の軟質須恵器である。法量は口径11.4～15.1cm、器高2.9～5.2cmで、外傾指数は75～122を示す。

ＫＵＲ－ＳＢ107では７点が検証できた。この住居址のものも全て軟質須恵器であったが、底部調整は回転糸切り未調整のものと回転ヘラ切り未調整のものが見られた。回転糸切りのものは５点あり、口径11.7～13.3cm、器高2.6～3.6cm、外傾指数92～113を示す。一方、回転ヘラ切りのものは２点で、口径11.7～13.0cm、器高3.4～3.6cm、外傾指数79～106を示す。

（２）黒色土器杯Ａ（挿図４・６）

ロクロ調整土師器の一種であるが、器面に人為的に炭素を吸着させた無高台の杯のことをいう。出現時には丁寧なヘラ磨きが施され黒色処理されるが、時代が下るごとにヘラ磨きは簡素化されていく。そして、須恵器と同時期に姿を消す。

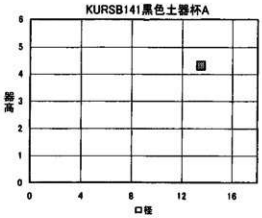
ＫＵＲ－ＳＢ141では１点が検証できた。口径13.5cm、器高4.3cm、外傾指数79を示す。底部は回転糸切り未調整である。内面下部は縦方向に丁寧なヘラ磨きが施され、内面上部は横方向にヘラ磨きが施される。

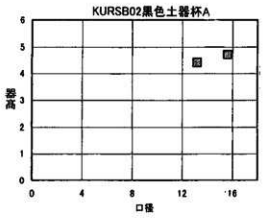
ＫＵＲ－ＳＢ02では２点が検証できた。口径13.2cm、器高4.4cmの小型のものと、口径15.6cm、器高4.7cmの大型のものがある。当住居址では検証できた点数が少なく明確な判断はできないが、他の住居址などの状況を見ても大小の２つの法量分化を認めることができる。内面の磨きは丁寧で、概ね縦方向に施されるが、口縁付近では横方向に施される。

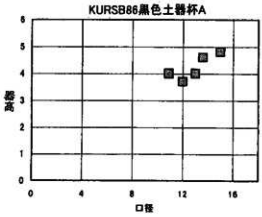
ＫＵＲ－ＳＢ86では５点が検証できた。口径10.9～13.0cm、器高3.7～4.0cmの小型ものと、口径13.6～15.0cm、器高4.6～4.8cmの大型のものが認められる。底部は全て回転糸切りである。

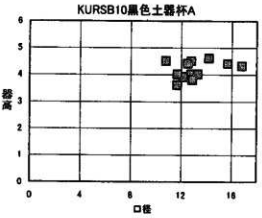
ＫＵＲ－ＳＢ10では14点が検証できた。口径10.1～13.3cm、器高3.9～4.5cmの小型のものと、口径14.2～16.8cm、器高4.3～4.6cmの大型のものが認められる。底部は全て回転糸切りである。内面の縦方向の磨きは間隔が広くなり、粗くなる。また、口縁部付近の横方向の磨きも簡単なものになる。

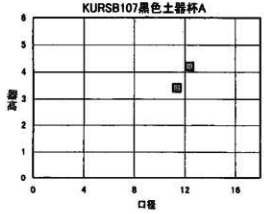
ＫＵＲ－ＳＢ107では２点が検証できた。１点は口径12.4cm、器高4.2cmの底部回転糸切りのもので、もう１点は口径11.4cm、器高3.4cmの底部回転ヘラ切りのものである。



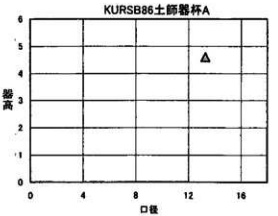


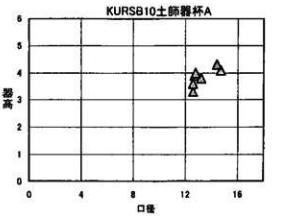


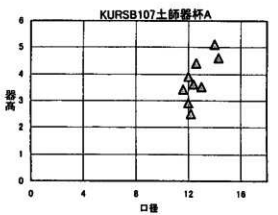


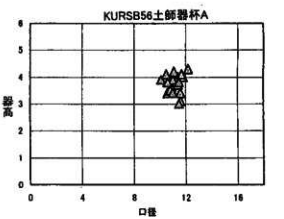


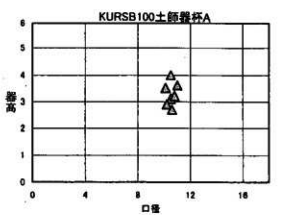
挿図4　遺構別黒色土器杯A法量

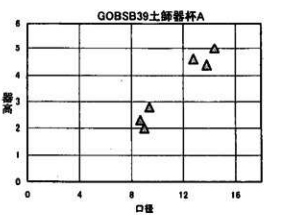


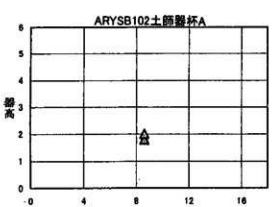




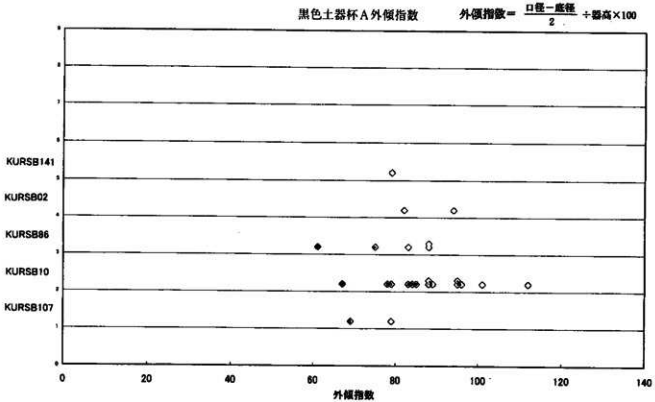


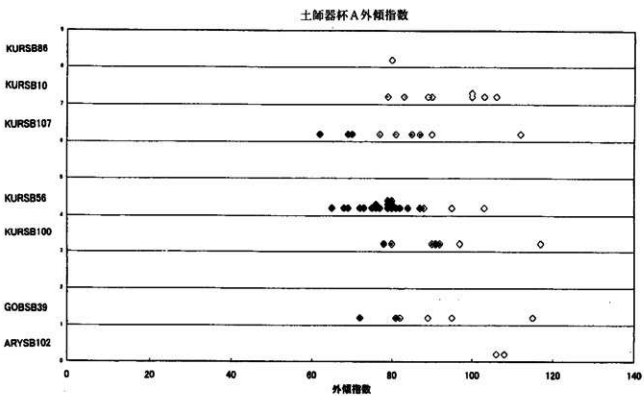






挿図５　遺構別土師器杯Ａ法量





挿図6　遺構別黒色土器杯A・土師器杯A外傾指数

（3）土師器杯A（挿図5・6）

ロクロ調整の土師器で、内面に黒色処理を施さない無高台の杯。土師器杯Aのうち、底部回転糸切り未調整のものはその出現以降全時期を通じて見ることができるが、その他にも回転ヘラ切りあるいは静止糸切りのものが一時期存在する。硬質の須恵器A消滅に代わって出現し、徐々に法量を減少させ、小型化していく。

KUR－SB86では1点が検証できた。口径13.3cm、器高4.6cm、外傾指数80で底部回転糸切り未調整である。この住居址では軟質須恵器と土師器の器面の状態が非常に似通っていて、両種の識別は容易でない。

KUR－SB10では8点が検証できた。口径は12.6～14.7cm、器高3.3～4.3cm、外傾指数79～106を示す。底部は全て回転糸切り未調整である。

KUR－SB107では9点が検証できた。この住居址では底部回転糸切りのものと回転ヘラ切りのものが確認できた。底部回転糸切りのものは2点で、口径11.6cm、器高3.4cm、外傾指数81の小型のものと口径14.0cm、器高5.1cm、外傾指数70の大型のものがある。底部回転ヘラ切りのものは7点で、口径11.6～12.6cm、器高2.5～3.9cm、外傾指数69～112の小型のものと口径14.3cm、器高4.6cm、外傾指数77の大型のものが見られる。

KUR－SB56では22点が検証できた。この住居址では底部回転糸切りのものと底部静止糸切りのものが確認できる。底部回転糸切りのものは7点で、口径10.6～11.4cm、器高3.4～4.0cm、外傾指数68～88を示す。静止糸切りのものは15点で、口径10.1～11.8cm、器高3.1～4.1cm、外傾指数65～103を示す。

KUR－SB100では7点が検証できた。底部は6点が判断できたが、全て回転糸切り未調整である。口径は10.1～11.0cm、器高は2.7～4.0cm、外傾指数は78～117を示し、全てが小型のグループに属するものである。

GOB－SB39では6点が検証できた。底部は全て回転糸切り未調整である。この住居址の段階では杯Aの中で大型のもの、小型のものの法量差が非常に顕著である。小型のものは口径8.7～9.4cm、器高2.0～2.8cm、外傾指数89～115で扁平化が一段と進む。大型のものは口径12.8～14.4cm、器高4.4～5.0cm、外傾指数72～82を示す。

ARY－SB102では2点が検証できた。底部は共に回転糸切り未調整であり、口径は8.6cm、器高は1.8cmおよび2.0cm、外傾指数は106と108を示す。

2．段階の設定（挿図9・10）

恒川遺跡群の各住居址出土杯Aの検証結果は、これまでのとおりである。この検証をもとに、松本平で設定されている古代の15期にわたる時期区分（小平　1990）に該当する住居址を挙げ、恒川遺跡群におけるその他の古代土器の変遷を明らかにする基準としたい。

1期：ARY－SB130	2期：KUR－SB44	3期：KUR－SB76	4期：KUR－SB112	
5期：KUR－SB141	6期：KUR－SB02	7期：KUR－SB86	8期：KUR－SB10	
9期：KUR－SB107	10期：該当なし	11期：KUR－SB56	12期：KUR－SB100	
13期：該当なし	14期：GOB－SB39	15期：ARY－SB102		

第3節　食器の変遷

1．非ロクロ調整土師器の消長

古墳時代から引続き使用される赤色の軟質土器である。古代の恒川遺跡群では、概ね1期から3期まで確認できる。ただし、恒川遺跡群では古代1期は出土量が多いが、それ以後は出土量が少なく、時期ごとに器形の変遷を追うことは難しい。

(1) 杯D

丸底の杯で、外面は底部から体部にかけて手持ちヘラ削りを施し、口縁部周辺をヨコナデする。1期から3期まで確認できる。内面は、1期の基準資料としたＡＲＹ－ＳＢ130では非黒色処理であるが、他の同時期の住居址では横方向のヘラ磨きの後、黒色処理をしたものが多い。1期では比較的どの住居址でも確認できるが、2期以降はあまり良好な資料が少ない。2期ではＫＵＲ－ＳＢ44で口縁部の破片が1点しか確認できず、3期でもＫＵＲ－ＳＢ76でしか確認できない。器形がある程度判断できる1期のものと3期のものを比較しても、明確な変化は認められない。

(2) 高杯

深めの椀状の体部に、裾が大きく広がる脚部が付く。体部外面および脚部外面にはヘラ磨きが施され、体部内面は横方向にヘラ磨きされた後に黒色処理がなされる。明確に存在が確認できるのは1期のみであるが、詳細な時期は確定できないものの2期以後と判断できる住居址でも出土が確認されていることから杯Dと同様に3期頃まで使用されていたと推測される。器形は古墳時代のものに比べると脚部上部の絞りが強くなく、杯部との接合部分が広い。

2．ロクロ調整土師器の消長

須恵器食器に代わって8期以降食器の主体となる、黒色処理を施さない素焼きの土器。色調は非ロクロ調整土師器や黒色処理の土器（黒色土器）に比べると黄色が強く、黄褐色を呈す。

(1) 椀

深めの体部が底部から丸みを持って口縁部まで立ち上がり、底部端部には高台が付く。8期に出現し、15期まで続く。8期では基準としたＫＵＲ－ＳＢ10では確認できないが、同時期のＫＵＲ－ＳＢ71・ＫＵＲ－ＳＢ216で確認できた。しかし、いずれも底部の一部のみで、全体的な形状はよくわからない。9期の椀の高台は断面が二等辺三角形に近く、外側に向かい僅かに広がる。体部は、腰の辺りでは丸みを持っているが、口縁部に向かい直線的に伸びる。11期の椀は底部が狭く、高台は若干高くなる。また、口縁部に向かっての立ち上がりは緩やかになる。12期の椀は、底部は更に小さくなり体部の作りは雑になる。13・14期では該当する資料が無く、状況は不明である。15期の椀は底部から体部の一部しかなく全体像は分からないが、底部は小さく、8期から12期までに確認できた底部の小型化が一段と進んだことが伺える。また、高台の作りは雑で、貼り付け高台ではなく、底部を異常に厚く作ることで高台の代わりにしたことが観察できる。

（2）皿B

浅い体部が底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、底部端部には高台が付く。7期で見られる。高台は断面が二等辺三角形に近く、幅が狭い。全時期を通してＫＵＲ－ＳＢ139で１点しか確認できないので、どのような変遷をたどったか不明であるが、この時期のみのものとも考えられる。

（3）耳皿

無高台皿の端部を折り返したもの。7・8期に見られる。何れも断片資料で、全体像や変遷はよく分からない。胎土・焼成は軟質須恵器と非常に似ており、判断が難しい。

（4）盤B

浅い体部が底部端から直線的に立ち上がる。やや脚の高い高台が付く。須恵器・黒色土器では7期に確認できるが、土師器では14期のみしか確認できない。須恵器・黒色土器の盤Bの流れを継ぐものとすれば、徐々に口径の小型化が進んできたものと考えられる。そして、最末期のものは高台も簡略化され、土師器椀と同様に異常に厚い底部が高台の役目を果たすものが現れる。

3．黒色土器の消長

ロクロ調整土師器の一種であるが、土器の内面あるいは内外面ともにヘラ磨きをし、黒色処理を施したものについて、特にこの呼称を用いる。まず、5期に杯Aとして出現するが、やがて皿や椀としても用いられる。ただし、恒川遺跡群ではこれまでに外面を黒色処理したものは確認されていない。

（1）椀

深い体部で、底部から明確な稜を持たず緩やかに立ち上がる土器。底部に高台が付く。恒川遺跡群では7期に出現し、9期まで変遷をたどることができる。7期の椀は体部の立ち上がりが急で、体部内面は底部からから口縁付近まで丁寧なヘラ磨きが施される。少し脚の長い高台が付くものもあるが、断面三角形の小さな高台がつくものが多い。8期の椀は体部の立ち上がりがやや緩やかになり、高台は灰釉陶器と同様に断面三日月形を呈す。9期の椀は体部内面の立ち上がり部分の押さえが甘く、底部との境が不明瞭になる。10期以降の住居址でも資料が断片的に確認できるが、形状は不明で変遷を追えるには至らない。

（2）皿B

直線的に伸びる浅い体部に高台をつけたもので、内面をヘラ磨きし黒色処理が施される。6期から8期に見られる。灰釉陶器の皿を模倣したものと考えられるが、灰釉陶器の量産化に伴い黒色土器の皿は減少し、灰釉陶器皿・段皿に姿を変えていく。6期のものは、高台の接合部から脚部にかけて丁寧にナデが施され、接合の痕跡が消されるとともに幅細に仕上げられている。7期のものは6期のものに比べると体部は厚く、重量感が感じられる。高台は断面四角形で須恵器杯B・盤の高台を思わせる。8期のものは完形資料が無く全体像は不明であるが、体部は僅かに深くなり、体部の立ち上がり部分に僅かではあるが押さえが認められる。高台は欠落しているが、おそらく灰釉陶器の皿と同じような変遷をたどり、断面三日月形に近い高台を持っていたと思われる。

（3）耳皿

口縁端部を折り曲げた皿。8期のＫＵＲ－ＳＢ10で、底部の破片が1点確認できたのみである。黒色処理は行われているものの剥落が激しく、僅かに痕跡をとどめるのみである。底部は回転糸切り未調整である。

（4）鉢Ａ

杯Ａと形状は同じだが、大型のものを鉢Ａとした。口径は18.0cm～25.0cm、器高は8cm前後を測る。5期に出現し8期まで確認できる。底部を確認できるものは少ないが、確認できた範囲では何れも回転糸切りである。形状を観察できた中では時期を追って大きな変化は認められない。

（5）盤Ｂ

脚高の高台を持ち、体部は直線的に開く。資料は少ないが7期のＫＵＲ－ＳＢ139で1点確認された。完形ではないが、高台の脚は高く体部は広めの底部から僅かに角度を変え緩やかに立ち上がる。内面は丁寧なヘラ磨きがされ、黒色処理が施される。この時期のみのものと考えられる。

（6）盤Ｃ

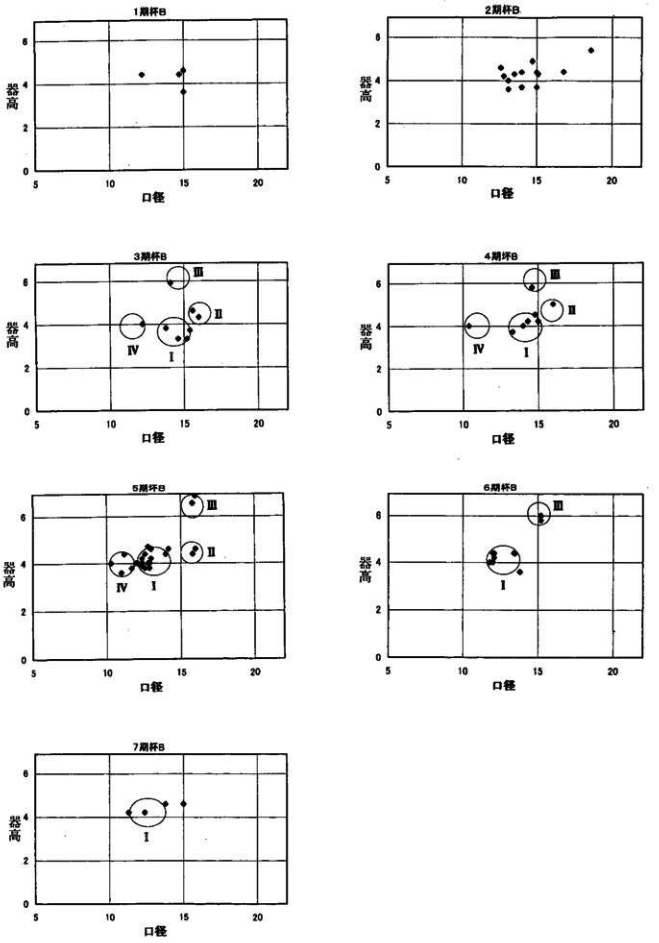
脚高の高台を持つ大型の土器。恒川遺跡群では完形品が無く、全体像は不明である。9期のＫＵＲ－ＳＢ107で2点確認できた。底部から高台までしかなく、体部・口縁部の様子は不明である。高台は大きく外側に開く。体部内面はヘラ磨きがされ、黒色処理が施される。

4．須恵器の消長

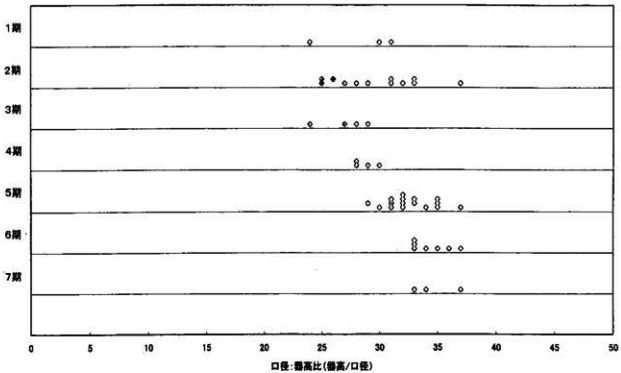
（1）杯Ｂ（挿図7・8）

箱形の体部に高台を付けたもので、体部の立ち上がりに明確な稜を持つ土器である。1期から7期まで確認できる。時期ごとに大きな器形の変化は認められないが、全体的な傾向として時期が降るに従い口径に対する器高の比は大きくなり、断面が正方形に近くなっていく。

1期のものは底部中央が特に厚く、高台よりも更に下に突き出た形のものが多い。また、高台は小さく、底部の最も外側に付く。この杯に対応する蓋Ｂは、端部が小さく内側に折れ曲がる。2期になると杯Ｂの量は増加する。口径12.5～15.0cm、器高3.5～5.0cmの間に多く分布するが、明確な法量分化は認められない。3期になりようやく法量の分化が認められるようになる。器高6cm前後の深い器形のもの（杯ＢⅢ）が現れるとともに、これまで大きな一つの分布域としてしか把握できなかったものが、3つの分布塊として識別することができるようになる。主体となるのは口径13.8～15.4cmで器高4cm以下のもの（杯ＢⅠ）であるが、口径15.6～16.0cmで器高4.0～5.0cmのもの（杯ＢⅡ）、口径12.2cmで器高4.0cmの断面が正方形に近い小型のもの（杯ＢⅣ）に分けることができる。この段階でも蓋Ｂの端部は断面三角形で小さく折り曲げられたものが多い。4期になると主体となる杯ＢⅠは器高が高くなり、口径は若干小さくなる。杯ＢⅣは特に口径に対する器高の比は大きく、40%を超える。蓋Ｂは、杯Ｂ口縁部と接する部分が平らに作られ、端部を「く」の字状に強く内側に折り曲げられるようになる。5期になると、杯ＢⅠは口径12.0～13.0cm、器高3.8～4.8cmと口径14.0cm、器高4.5cm付近の狭い範囲に集中し、一層の



挿図7　時期別須恵器杯B法量



挿図8　須恵器杯B口径・器高比率

規格化が図られたことが伺える。6期では口径に対する器高の比が更に大きくなり、多くは口径12.0cm、器高4.0～4.5cmと口径13.5cm、器高4.4cmの範囲に納まる。杯BⅠの小型化が進み器形が直方体に近づいてきたためか、この段階で杯BⅣは確認できなくなる。7期になると杯Bの資料は少なくなり状況を分析できない。しかし、確認できる範囲では特に新しい要素は認められず、前段階のものがそのまま使用されたものと考えられる。

(2) 杯C

底部から口縁近くまでは杯Bと同じであるが、口縁部が僅かにくびれてからまっすぐ立ち上がる。金属器を模倣した薄手の須恵器である。2・3期で確認できる。2期のものは口縁のくびれ部の稜が明瞭なのに対し、3期のものは全体的に丸みを帯び口縁くびれ部の稜が不明瞭である。この杯Cに対応する蓋は、同一住居址等で共伴する蓋には特別なものが見られないことから、杯Bと同様に蓋Bが対応すると考えられるが、いまのところこの杯Cの出土する住居址が少ないため確証は無い。

(3) 杯D

古墳時代後期から続く、口縁部内面に立ち上がりを持つ丸底の須恵器である。恒川遺跡群では1期のみに確認できる。この杯に対応する蓋はこれまでのところ確認できないが、古墳時代後期と同様に、摘みのない丸い杯をひっくり返したような蓋Dが対応すると考えられる。

（4）椀

灰釉陶器の椀に似た形で体部は深く、底部から丸みをもって口縁まで立ち上がる。5期から8期まで確認できる。5期はＫＵＲ－ＳＢ143で確認できる。大型で、高台が若干高い。6期のものはＫＵＲ－ＳＢ02で確認できるが型は小さく、体部の立ち上がりは一旦強く押さえられて明瞭な稜を持つ。8期のものは底部の破片が確認されただけなので全体はよくわからないが、焼成状態から軟質須恵器に分類されるものである。

（5）鉢B

鉄鉢を模倣した体部の薄い鉢。底部は丸底または尖り底で、体部は上部に向かって徐々に広がり、口縁部付近で内湾する。4期のＫＵＲ－ＳＢ112で見られる。

（6）鉢C

底部は小さく、体部は緩やかに広がり、口縁部は一旦くびれてから強く外反する。3期のＫＵＲ－ＳＢ114で見られる。

（7）皿A

高台を有しない扁平な大型の皿。9期のＫＵＲ－ＳＢ107で見られるが、この時期の軟質の須恵器に比べ焼成は比較的良好であり、土器そのものは5期あるいは6期のものと考えられる。

（8）皿B

高台を有する皿。土師器・黒色土器皿Ｂと同じであるが、土師器・黒色土器のそれに比べ、器形は厚く直線的で、高台は断面四角形でしっかりとしており様相はどちらかというと盤Ａに似ている。しかし、口縁部の折り返しが無く、体部は底部から口縁端部まで一直線に伸びる。恒川遺跡群ではこれまでのところ7期でしか確認できないが、おそらくは猿投窯で灰釉陶器の生産がはじまる、恒川でいう6期～7期の一時期に灰釉陶器の皿を模倣して作られたものと考えられる。

（9）盤A

皿に似た扁平な土器。2期に出現し、6期まで見られる。2期のものは底部が広く平らで、体部は高台接合部付近から緩やかに立ち上がる。そして、口縁部付近で上方向に大きく折り上げられるが、端部の折り返しは見られない。3期になると底部は外側が僅かに上方向に傾斜し、高台は底部端より内側に付けられる。体部の立ち上がりはやや緩やかになり、口縁端部は小さく外側に折り返される。4期になると底部は小さくなり、その分体部が広くなる。体部の立ち上がりは緩やかになり、口縁端部は強く外側に折り返される。5期のものは体部の立ち上がりが更に緩やかになり、口縁端部の折り返しはやや弱くなる。6期では器形は薄くなり、これまでの傾向は更に強まる。底部と体部の境は不明瞭になり、体部の傾きはより緩やかになる。口縁端部の折り返しは、しっかり押さえた部分が無く弱いものとなる。

(10) 盤B

体部は浅く、口縁に向かい緩やかに立ち上がる。口径は小さく、脚の高い高台が付く。7期のＫＵ

R－SB60で見られる。この住居址で見られる盤は、体部が薄くて高台の脚が高いものと体部が厚くて高台は低いものの2つが見られるが両方とも盤Bとした。ただ、この違いが製作時期による違いなのか、製作意図の違いなのかは現段階では資料が少なく判断がつかない。

(11) 高杯

浅めの体部に、高い脚台を付けたもので、古墳時代から続くものである。恒川遺跡群では1期から3期まで確認できる。1期の高杯は杯部の底部が平らで、体部は底部端部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり口縁端部が若干開く。脚部は杯部に近いほうは細く、接地面に近い部分では強く外側に開く。脚部上部の細くなった部分には、口縁と平行に沈線が施される。2期ではいままでのところ高杯は確認できない。3期でも全体的な器形の判るものは確認できないが、脚部は若干低くなり、径は太くなっている。脚部にすかしは見られない。

5．時期別の食器の様相（挿図9～11）

これまで個別の食器について変遷を述べてきたが、ここでは杯Aを基準とした、恒川遺跡群における時期別の食器の様相と各期に対応する住居址の状況をまとめておきたい。

1期―食器は須恵器と非ロクロ調整土師器の2種で構成される。この時期は、須恵器に比べ非ロクロ調整土師器の割合が多い。非ロクロ調整土師器はほとんど杯Dと高杯の2つに限られるが、主となるのは杯Dである。須恵器は杯A・杯Bが多く、まれに杯Dが混ざる。この時期の杯Aは回転ヘラ切り技法が用いられ、内面に返りの付いた蓋Aを伴う。この杯Aと蓋Aのセットがこの時期を特徴づけるものとなっている。

2期―食器は相変わらず須恵器と非ロクロ調整土師器の2種で構成されるが、須恵器の割合が圧倒的に多くなる。確認できた非ロクロ調整土師器は杯Dのみである。須恵器では、杯Aの底部切り離しは1期と同様に回転ヘラ切りであるが、その他の食器構成の点では大きく変化が見られる。杯Aとセット関係にあった蓋Aや杯Dが姿を消し、杯A・杯Bのほか、新たに杯C・盤Bが加わる。

3期―この時期でも食器は須恵器と非ロクロ調整土師器で構成されるが、主体となるのは2期同様須恵器である。土師器は、杯Dのほかに杯の口径の大きなもの（無高台盤とすべきか）が伴う住居址もある。須恵器の基本的な構成器種は2期と変わらないが、杯Aでは新たに底部回転糸切りのものが僅かではあるが見られようになり、杯Bでは法量の分化が認められる。

4期―この時期の食器は須恵器だけで構成されている。構成器種の主なものは杯A・杯B・盤Bである。杯Aの底部切り離し方法は、回転ヘラ切りと回転糸切りが同じくらいの割合で見られるが、その中に混じって静止糸切りのものも見られる。

5期―この時期に至って恒川遺跡群では住居址の数が大幅に増加する。食器の構成は須恵器が主であるが、この時期から内面を黒色処理したロクロ調整の土師器（黒色土器）が見られるようになる。須恵

器の主なものは杯A・杯B・盤Bそして杯Aの大型の器形をした鉢Aである。一方、黒色土器はまだ杯Aしか見られない。須恵器・黒色土器ともに、杯Aの底部切り離しは全て回転糸切りで行われている。

6期—まだ食器の主体となるのは須恵器であるが、杯Bは出土量が少なくなり種類も減る。この時期の盤Bは特徴的で底部内面に平坦な部分はなく、底部中心から口縁部まで緩やかで直線的に立ち上がる。黒色土器では、杯A・鉢Aのほかに、まだ割合は少ないが皿も見られるようになる。また、一部の住居址では当時生産が始められた灰釉陶器が見られる。これは猿投窯の黒笹14号窯期のものと考えられる。

7期—須恵器は依然使用されているものの食器に占める割合は少なくなり、黒色土器と同程度になる。須恵器は、杯Bがほとんど見られなくなる。また、杯Aはこれまでの青灰色硬質のものは少なくなり、灰白色軟質のものが多い。この軟質須恵器は土師器と識別するのが困難なほど焼成状態の悪いものを多く含んでいる。また、盤Bは姿を消し、代わってこの時期のみの器種であるが皿Bが見られる。黒色土器は器種が豊富になり、杯A・鉢A・皿Bのほかに椀も見られるようになる。また一部の住居址では皿B・耳皿といった皿類が土師器でも見られる。灰釉陶器は椀・皿があるが、猿投窯の黒笹14号窯期と黒笹90号窯期のものと考えられる。

8期—食器の中で杯Aが圧倒的に多く、須恵器・黒色土器・土師器の3種で同程度の比率で構成される。須恵器は灰白色軟質の杯Aがほとんどで、他の器種はあまり見られない。黒色土器は、杯Aのほか椀・皿Bで構成されるが、耳皿を伴うこともある。土師器は杯Aが主であるが、椀・耳皿が伴うことがある。灰釉陶器は椀・皿があるが、美濃窯の光が丘1号窯期のものが多い。

9期—この時期以降恒川遺跡群では住居址の数が減り、食器セットの判断も暫定的なものに近い。この時期でも杯Aは須恵器・黒色土器・土師器の3種で構成されるが、須恵器・黒色土器が減り、土師器の割合が大きくなる。須恵器は灰白色軟質の杯Aがほとんどを占めるが、黒色土器は杯A・椀・盤Cで、土師器は杯A・椀で構成される。杯Aについては、構成する3種のいずれにも底部回転糸切り技法のほかに、古代の4期で姿を消した回転ヘラ切り技法も用いられている。この回転ヘラ切りと回転糸切りの割合は、ほぼ同じである。灰釉陶器は椀・皿があるが、美濃窯の大原2号窯期のものと考えられる。KUR－SB107を9期とした点については、同じ食器の構成をした住居址が恒川遺跡群では他にない上に、松本平の編年ではこの時期に須恵器が消滅しているとされることなどから、更なる資料の増加が待たれるところである。

10期—恒川遺跡群ではこの時期の住居址は今のところ確認できないが、この時期には須恵器・黒色土器は完全に姿を消し、土師器主体の食器構成になっていると考えられる。

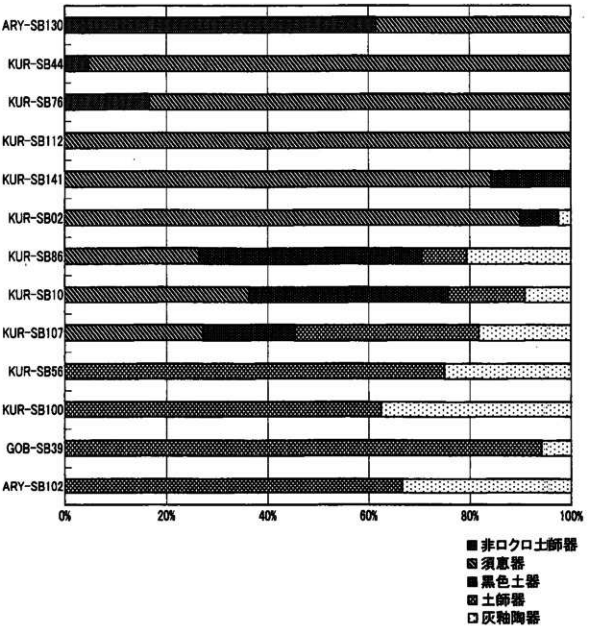
11期—食器の主体となるのは土師器と灰釉陶器の2種である。土師器は杯A・椀があり、灰釉陶器は椀・皿がある。杯Aは底部回転糸切りのものと静止糸切りのものが見られ、その割合はほぼ同じである。灰釉陶器は美濃窯の虎渓山1号窯期のものと考えられる。また住居址によっては緑釉陶器が伴うこともある。

12期—11期と食器の構成は同じであるが、土師器では、杯Aの小型化が進み、椀は腰部の張りが小さくなるなど食器類の法量の減少が見られる。この時期に伴う灰釉陶器は美濃窯の虎渓山1号窯期と丸石2号窯期のものと考えられる。

13期—恒川遺跡群ではこの時期に比定できる住居址はないが、食器の構成は12期と基本的に同じままで、土師器の法量減少が更に進むものと考えられる。

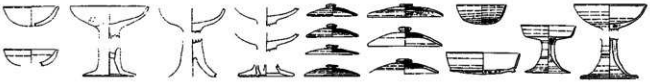
14期—恒川遺跡群では1軒しか確認できていない。土師器杯Aは大小の分化が顕著であり、小型のものは扁平化が進む。この住居址については、杯Aや盤Bに松本平の編年で15期とされるものが含まれていたり、恒川遺跡群の15期とした住居址と同じ段階と判断できる杯Aが含まれたりするなど、総合的には15期とした方がよいかもしれない。しかしその場合、恒川遺跡群では古代後半の資料が大きく欠けてしまうため、今回は14期のものとして資料の提示をし、15期に分類すべきものは15期のものとして整理し、恒川遺跡群における編年表を作成した。灰釉陶器は若干出土しているがいずれも小破片であり、どの段階のものかは判断がつかないが、時期的には美濃窯の丸石2号窯期・明和27号窯期のものが伴う。

15期—恒川遺跡群では3軒確認できるが出土資料はあまり多くない。土師器杯Aについては扁平化が一層進み、形状はほとんど小型の皿のようになってしまう。また、椀や盤Bの高台は簡略化され、底部を異常に厚く作ることでその代わりとしたものがある。灰釉陶器も伴うが、全体的な形のわかるものはない。

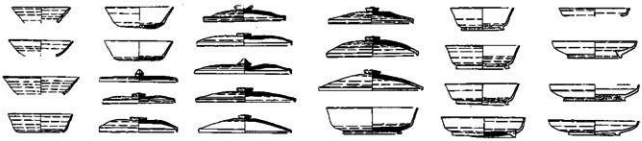


挿図9　時期別食器の構成

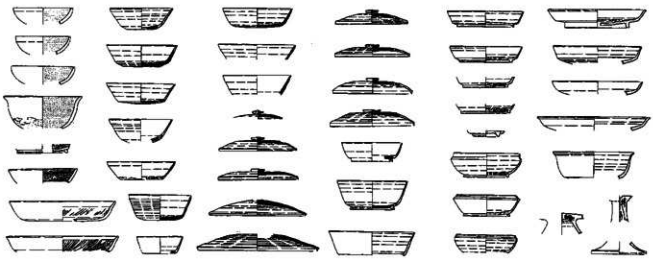
1期　ARY SB130



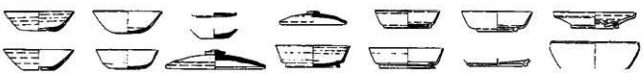
2期　KUR SB44



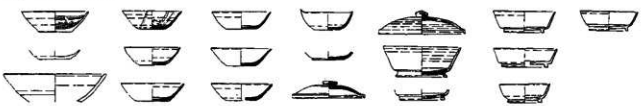
3期　KUR SB76



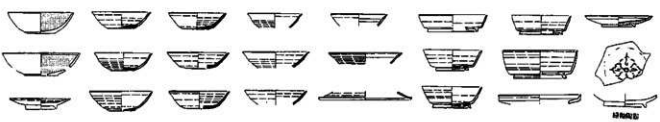
4期　KUR SB112



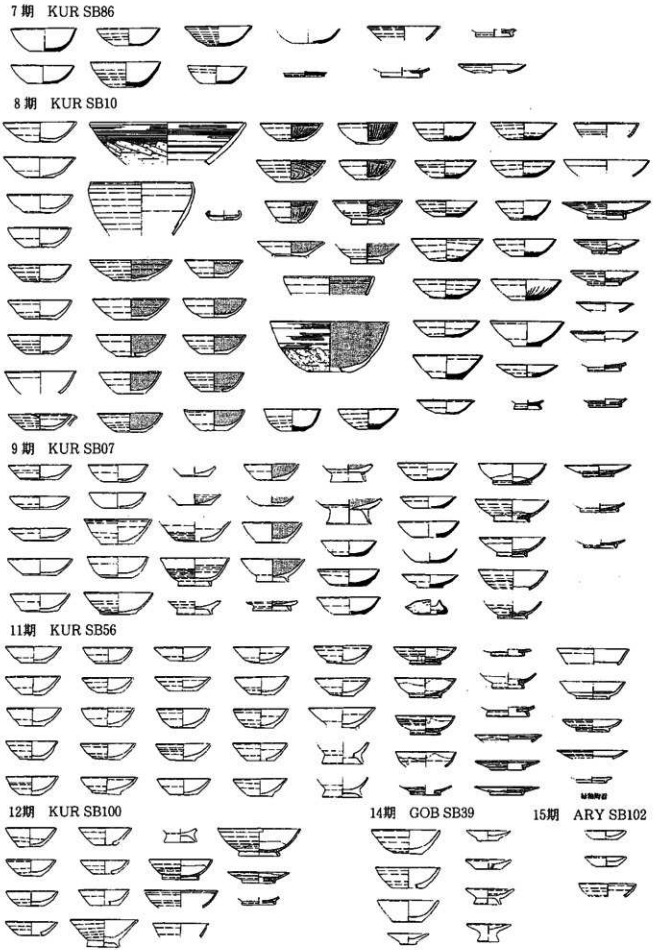
5期　KUR SB141



6期　KUR SB02



挿図10　古代各期の食器（1）　1：8



挿図11 古代各期の食器（2） 1：8

第4節　煮沸具・貯蔵具の変遷

1．煮沸具

（1）甕A

粘土紐を輪積み成型した後に、器面の内外をヘラなどの工具を用いてナデ調整した長胴甕である。1期と2期で確認できる。いずれも完形のものはなく、器高は不明である。1期はＫＵＲ－ＳＢ55のものが比較的残りがよいが、口径は20.6cmで、胴部の最大径は中央部よりやや上の部分にあたると思われる。底部はあまり狭まっておらず、比較的安定した感じがする。また、内面には粘土紐の輪積み痕を観察できるものが多い。2期のものはＫＵＲ－ＳＢ44で確認できるが、口径は21.6cmで、胴部の最大径は1期のものに比べると口縁部近くに上がる。そこから底部に向かい徐々に狭まっていき、小さめの底部が付く。

（2）甕B

粘土紐を輪積み成型した後に、体部の外面を縦方向に、口縁部を横方向にハケ目で調整した長胴甕である。1期から9期まで確認できる。1期ではＧＯＢ－ＳＢ51で確認できる。胴部に張りは見られず、スリムな感じを受ける。2期のものはＫＵＲ－ＳＢ44で確認できる。口縁部の僅か下部分に最大径がきて、底部に向かって徐々に胴部の径は縮まっていく。底部は小さく、内面は底部から胴部にかけて若干丸みを帯びる。3期ではＫＵＲ－ＳＢ117で確認できる。胴部の最大径は中央よりやや上にあり、内面は底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がり、かなり丸みを帯びる。4期では良好な資料がない。5期はＫＵＲ－ＳＢ143で確認できる。最大径は中央よりやや上にあり、大きく張った形をし、小さめの底部に続いていく。口縁部は強く外反する。ＫＵＲ－ＳＢ143のものはハケ目の一単位がまだ短かったが、ＫＵＲ－ＳＢ259のように一単位が長いものも見られる。6期になると縦方向のハケ目は長いものが多く、比較的そろったものになる。また、底部に近いところでは横方向のハケ目が見られる。また、胴部内面にもはっきりとしたハケ目が付いたものも多い。7期のものはＫＵＲ－ＳＢ306などで確認できるが、胴の径が若干大きくなり、どっしりした感じを受ける。ハケ目は6期と同様で、胴部全体は縦方向に、底部付近では横方向に施される。縦方向のハケ目は一単位が長く、比較的そろえて施されている。8期ではＫＵＲ－ＳＢ10で、9期ではＫＵＲ－ＳＢ107で確認できるが、いずれも口縁から胴部上部にかけてまでしかなく、全体的な形は分からない。

（3）小型甕A

甕Aと製作技法は同じで、粘土紐を積み上げた後、指やヘラによるナデで器面を整えた小型の甕である。1期と3期で確認できる。1期はＡＲＹ－ＳＢ130で確認できる。いくらか丸みを帯びた胴部をもち、口縁部は緩やかに外反する。3期ではＫＵＲ－ＳＢ25で確認できる。口縁部はほとんど外反せず、胴部はずん胴体形である。

（4）小型甕B

製作技法は甕Bと同じで、粘土紐を積み上げた後、体部にハケ目を施す。1期から8期まで確認できる。いずれの時期でも完形品がなく変遷を追うのは難しいが、甕Bと同じような変化をしていくものと考えられる。

（5）小型甕C

体部外面をヘラ削りする小型の甕である。恒川遺跡群では2期のＧＯＢ－ＳＢ03で2点確認できるだけである。

（6）小型甕D

ロクロ調整で、胴部にカキ目またはロクロ目を明瞭に残す小型の甕である。底部には回転糸切り痕を残す。5期から8期まで確認できる。しかし、5期のＫＵＲ－ＳＢ40では完形品が見られるものの、6期では資料がなく、7期のＫＵＲ－ＳＢ86や8期のＫＵＲ－ＳＢ10などでは口縁から胴部上部までしかなく、形式変化を追うまでには至らない。

2．貯蔵具

恒川遺跡群では貯蔵具に関する良好な資料が少なく、器種の分類や変遷を追うことができる状況にない。その中で僅かながら状況が分かるのものは次のとおりである。

（1）須恵器壺類

長頸壺については、3期のＫＵＲ－ＳＢ44で頸部が、7期のＫＵＲ－ＳＢ60で底部が確認できる。短頸壺については3期のＫＵＲ－ＳＢ76で口縁部が確認できる。

（2）須恵器甕類

甕Ａは5期のＫＵＲ－ＳＢ141で完形ではないが、一個体確認できる。甕Ｂは4期のＫＵＲ－ＳＢ112、7期のＫＵＲ－ＳＢ123で完形品が確認できる。

（3）灰釉陶器

7期以降確認できるようになる。実際には7期のＫＵＲ－ＳＢ51、8期のＫＵＲ－ＳＢ10でともに、頸部が確認できる。

第5節　実年代の比定と段階の大別

1．実年代の比定

恒川遺跡群における各時期の設定については前にも述べたとおり、松本平のものを参考とした。これまでの検証や、共伴する灰釉陶器と比較しても、松本平で確認されている土器の変化と大きく異なる部分は認められない。従って恒川遺跡群の各時期も松本平とは若干の誤差はあるにしても、同様の年代を与えることが可能であると考えられる。これによる恒川遺跡群の各年代は次のとおりである。

実年代	時期	恒川遺跡群住居址	共伴する灰釉陶器	中央道長野道報告書
700	1期	ARY-SB130		南栗SB129
	2期	KUR-SB44		三の宮SB25
	3期	KUR-SB76		南栗SB37
	4期	KUR-SB112		南栗SB184
800	5期	KUR-SB141		下神SB126
	6期	KUR-SB02	黒笹14号窯期	下神SB92
	7期	KUR-SB86	黒笹14号窯・黒笹90号窯期	三の宮SB122
900	8期	KUR-SB10	光が丘1号窯期	三の宮SB2
	9期	KUR-SB107	大原2号窯期	南栗SB616
	10期			南栗SB583
1000	11期	KUR-SB56	虎渓山1号窯期	南栗SB537
	12期	KUR-SB100	虎渓山1号窯・丸石2号窯期	南栗SB192
	13期			南栗SB117
1100	14期	GOB-SB39	丸石2号窯・明和27号窯期	南栗SB1
	15期	ARY-SB102		南栗SB136

2．古代における段階の大別

これまで古代を15期に分割した編年について検証してきたが、その中でも食器の構成が劇的に変化をする時期があり、それを基に1期～3期、4期～8期、9期～15期の3つの段階に大別することができる。

1期～3期は非ロクロ調整土師器が依然として使用されているなど、古墳時代の様相がまだ強く残る段階である。杯Aは、まだ須恵器だけで構成され、底部切り離しは回転ヘラ切り技法が用いられる。須恵器生産はまだ、全体的に規格化が進められている段階である。この段階では地域外から搬入された須恵器を見ることも珍しくない。

4期～8期は食器の生産がある程度統制できている時期である。4期は過渡期的な様相が大きいものの、この時期に古墳時代の食器構成の影響から完全に脱却するといえる。須恵器生産は在地でも盛んに

なり、搬入品はあまり見られない。食器類については法量の規格化と分化が一応の完成をみる。また、5期からは黒色土器の使用がはじまり、徐々に使用の割合が増していく。杯Aの底部切り離しは、4期では静止糸切り技法もみられるものの、総じて回転糸切り技法が用いられる。恒川遺跡群ではこの段階の住居址が多く、中心をなす時期である。

9期～15期は食器生産の統制が崩れていく時期である。9期では食器に須恵器・黒色土器がまだ残るものの、主に土師器・灰釉陶器により食器が構成される。杯Aについては、9期で回転ヘラ切り、11期では静止糸切り技法が用いられるなど、製作技法に統一性が見られない。この段階になると恒川遺跡群では住居址の数が極端に少なくなり、今回検証できた住居址がその時期の典型的な住居かは更なる類例の増加を待たなければならないが、いずれにしてもこれまで専門集団に委ねられていた食器生産が、その統制をなくしたといえるのではないだろうか。

この段階の大別については食器の構成を基本としているが、社会情勢でいうと1期～3期は中央の権力が徐々に地方に浸透していく時代であり、4期～8期は中央の権力が地方にまで及び統制が利いていた時代であり、9期以降は地方の独立性が強くなり中央の統制が利かなくなった時代である。このように見ると、古代における食器の構成の変化というのは単に技術的な要因だけでなく、当時の社会情勢も大きく影響を及ぼしていると考えることもできる。

参考文献

岡田正彦　1977　「平安時代土師器等の編年試論」『信濃』第29巻　第9号

各務原市教育委員会　1984　『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市資料調査報告書第4号

多治見市教育委員会　1984　『北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書』

㈶長野県史刊行会　1988　『長野県史　考古資料編』全一巻（四）　遺構・遺物

原明芳　1989　「吉田川西遺跡における食器の変容」㈶長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告3　吉田川西遺跡』

㈶愛知県埋蔵文化財センター　1994　『黒笹40・89号古窯跡・黒笹G2号古窯跡・立楠古窯跡』

各務原市埋蔵文化財センター　1998　『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』

小平和夫　1990　「第5節　古代の土器」㈶長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－　総論編』

下伊那誌編纂会　1991　『下伊那史』第一巻

斉藤孝正・後藤健一　1995　『須恵器集成図録』第3巻　東日本編Ⅰ

小平和夫　2003　「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻　第2号

伊藤尚志　2003　「恒川遺跡群における古代土器の変遷」『伊那』6月号

飯田市教育委員会　1986　『恒川遺跡群』

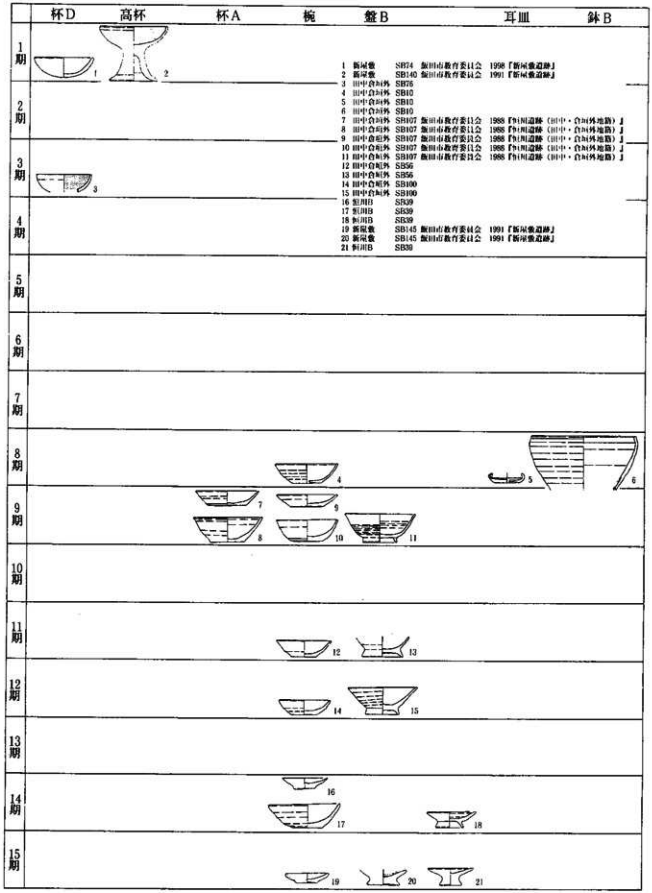
飯田市教育委員会　1988　『恒川遺跡群《田中・倉垣外地籍》』

飯田市教育委員会　1991　『恒川遺跡群　新屋敷遺跡』

飯田市教育委員会　1991　『恒川遺跡群　田中・倉垣外地籍』

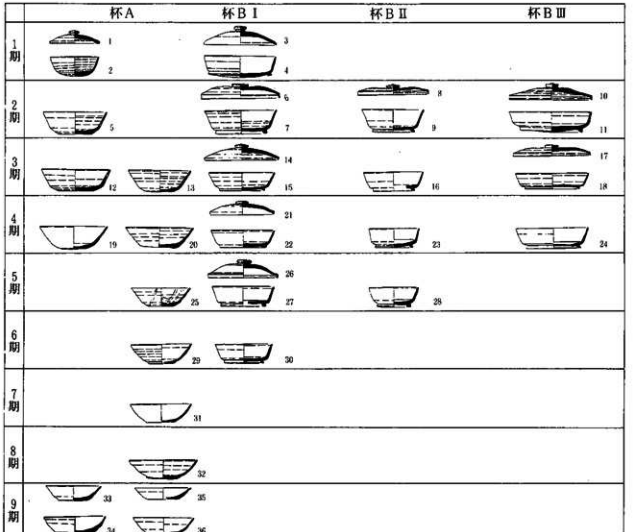
飯田市教育委員会　1993　『恒川遺跡群　新屋敷遺跡』

飯田市教育委員会　1998　『恒川遺跡群　新屋敷遺跡』



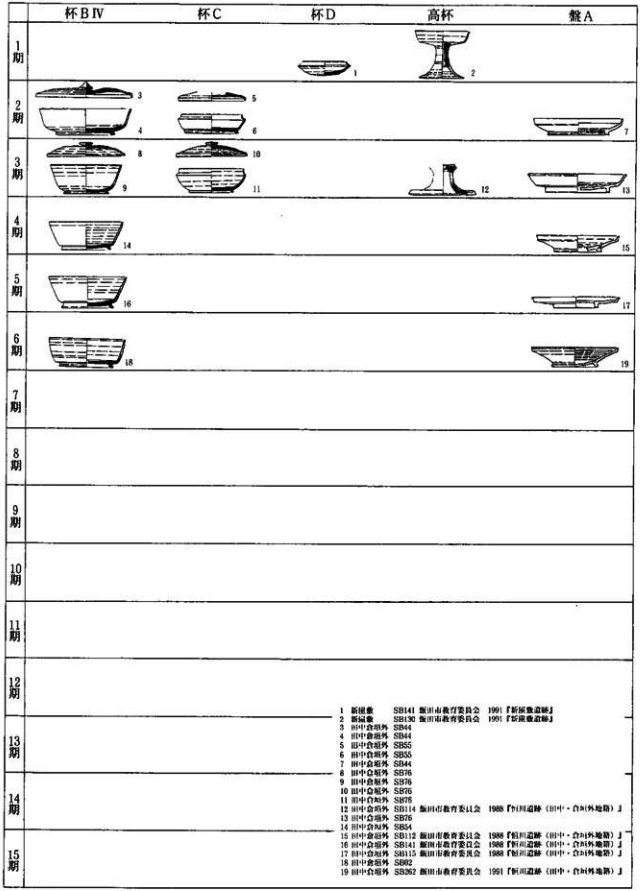
非ロクロ土師器　　ロクロ土師器

挿図12　古代の土器編年表（1）　1：8



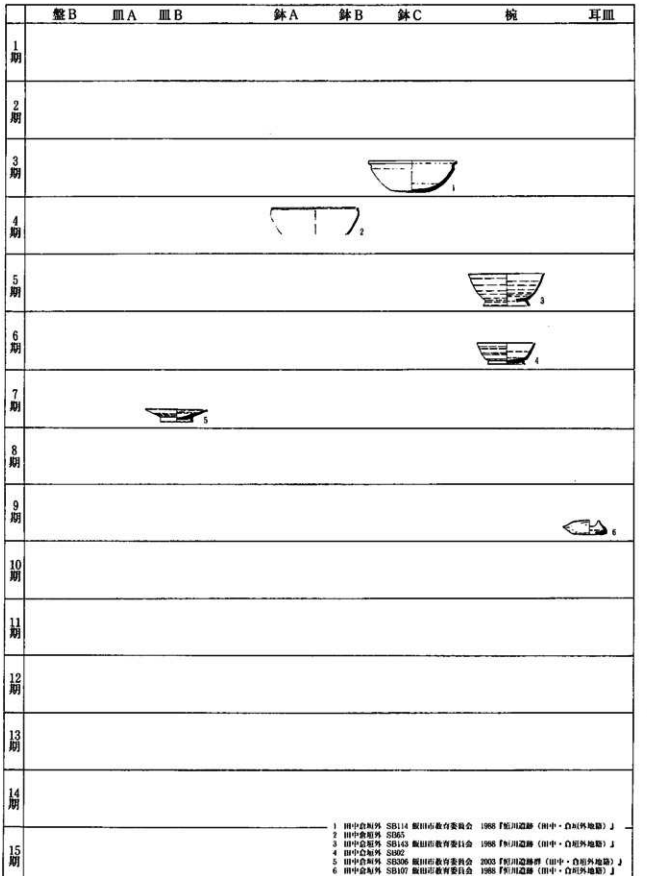
須恵器

挿図13　古代の土器編年表（2）　1：8



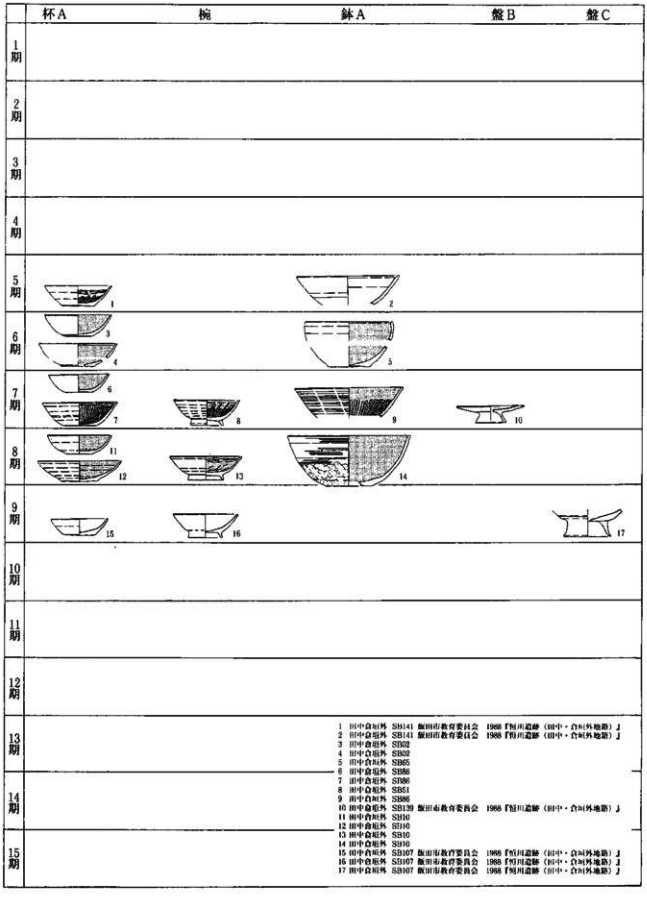
須恵器

挿図14　古代の土器編年表（3）　1：8



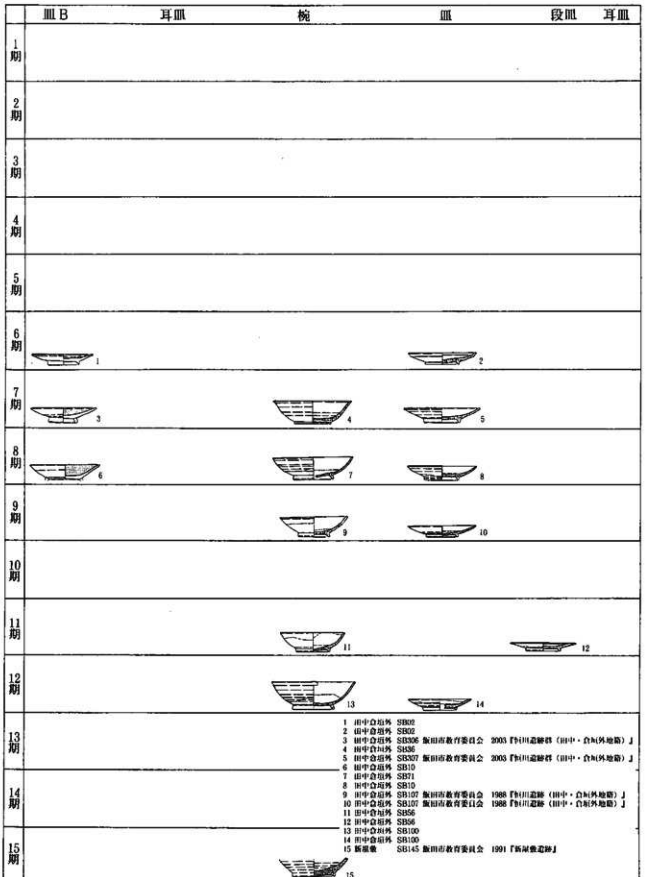
須恵器

挿図15　古代の土器編年表（4）　1：8

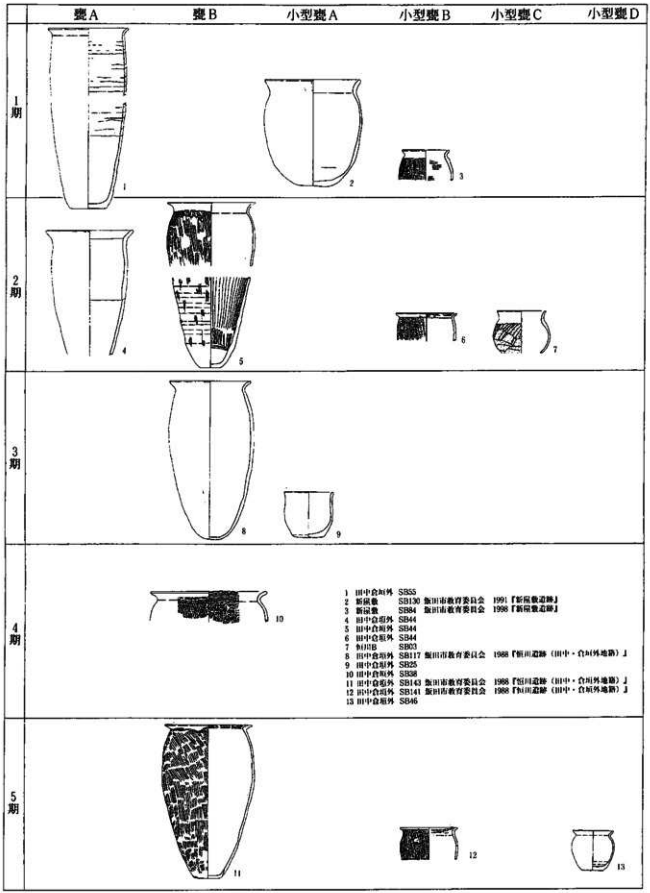


黒色土器

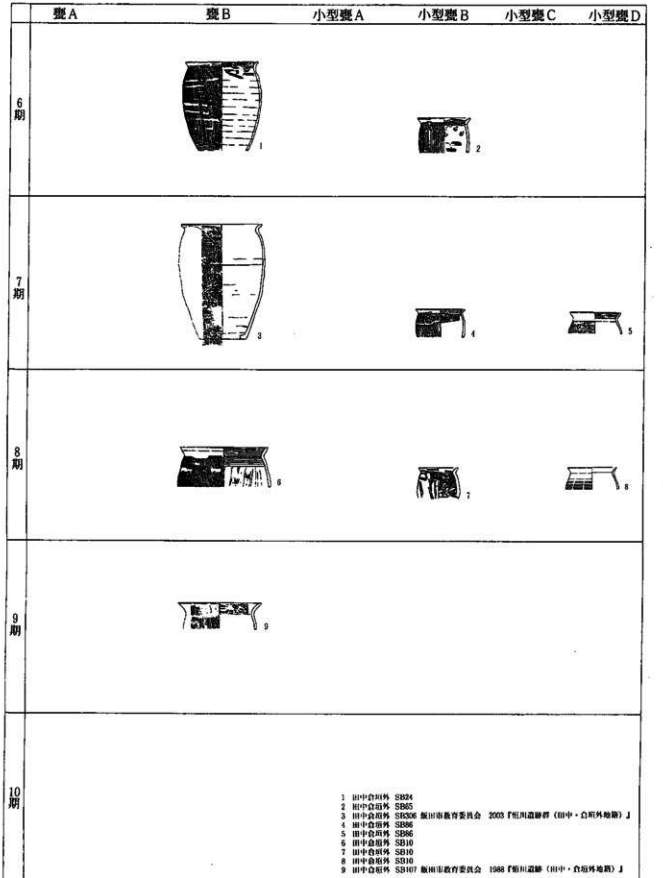
挿図16　古代の土器編年表（5）　1：8



挿図17　古代の土器編年表（6）　1：8

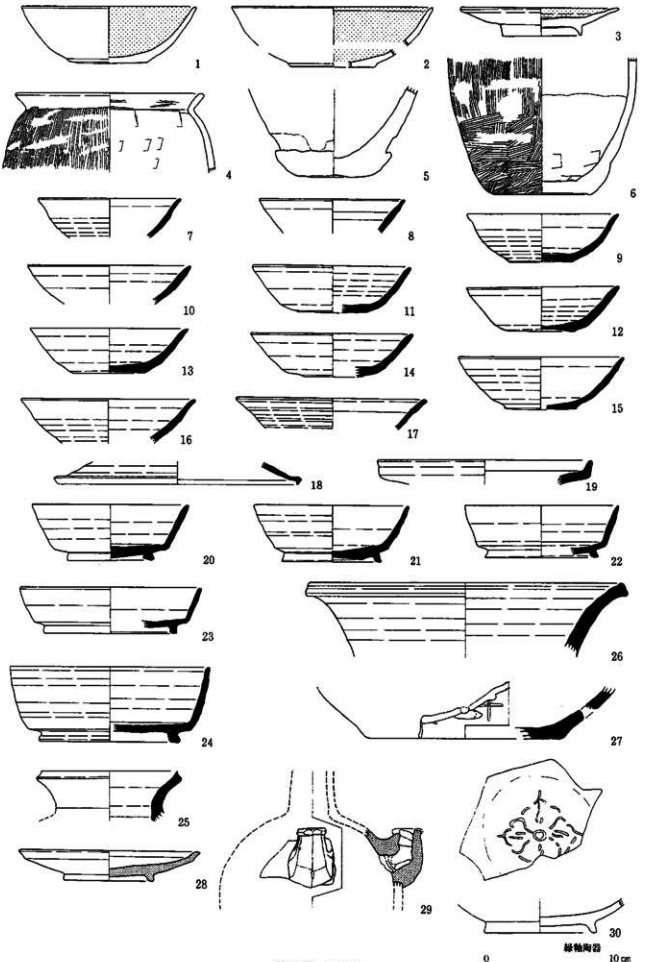


挿図18　古代の土器編年表（7）　1：10

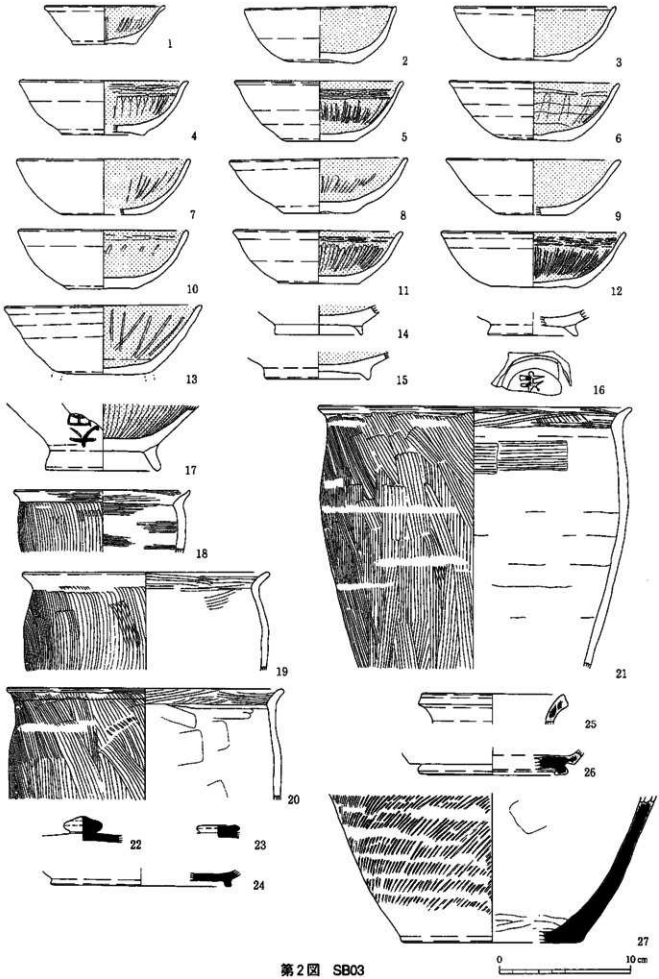


挿図19　古代の土器編年表（8）　1：10

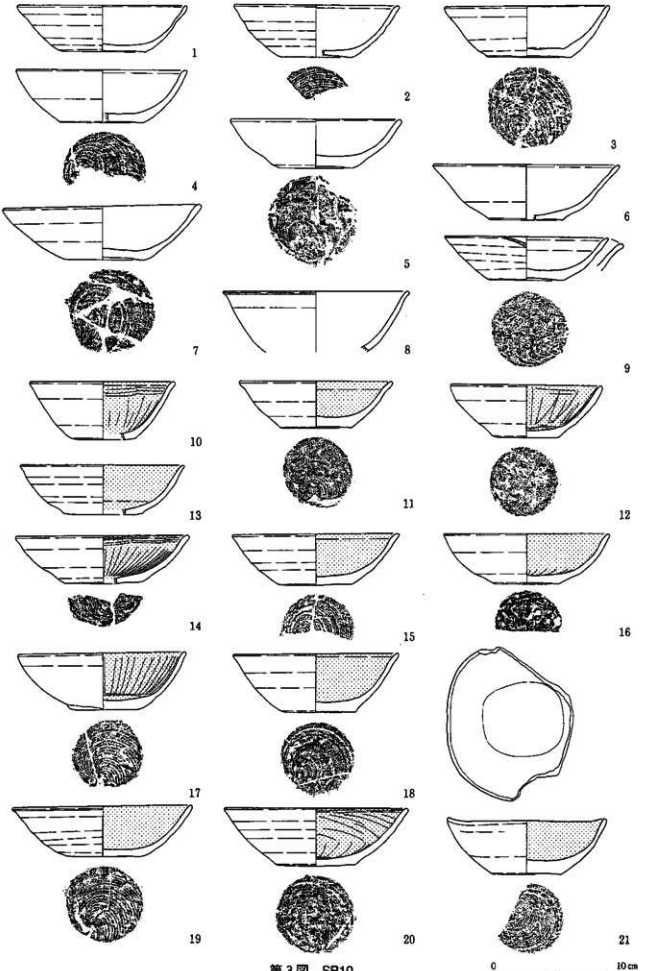
遺物図版


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
26
24
27
25
28
29
30
緑釉陶器
0
10 cm

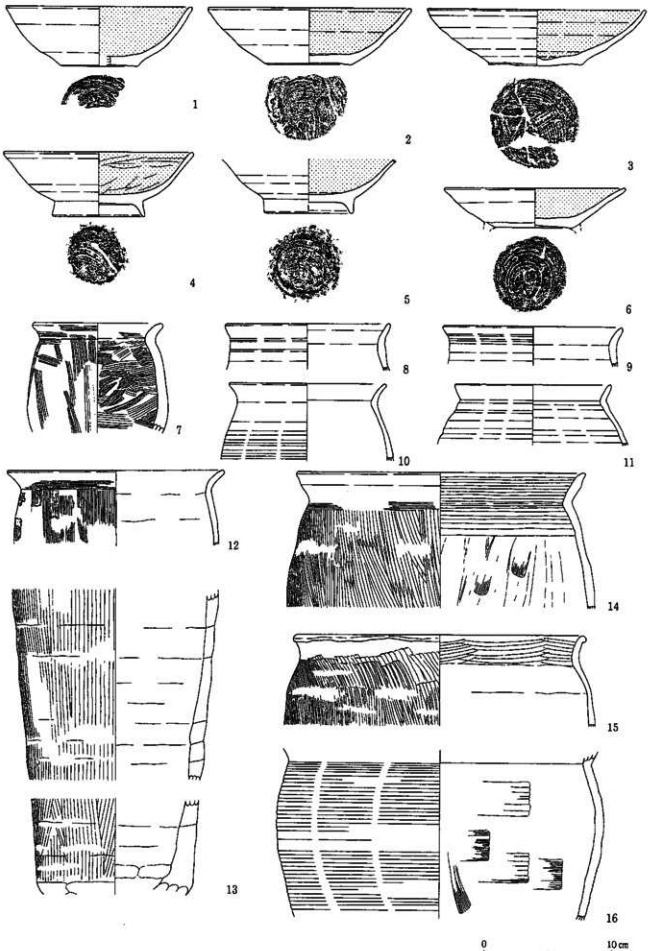
第1図　SB02


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
10cm

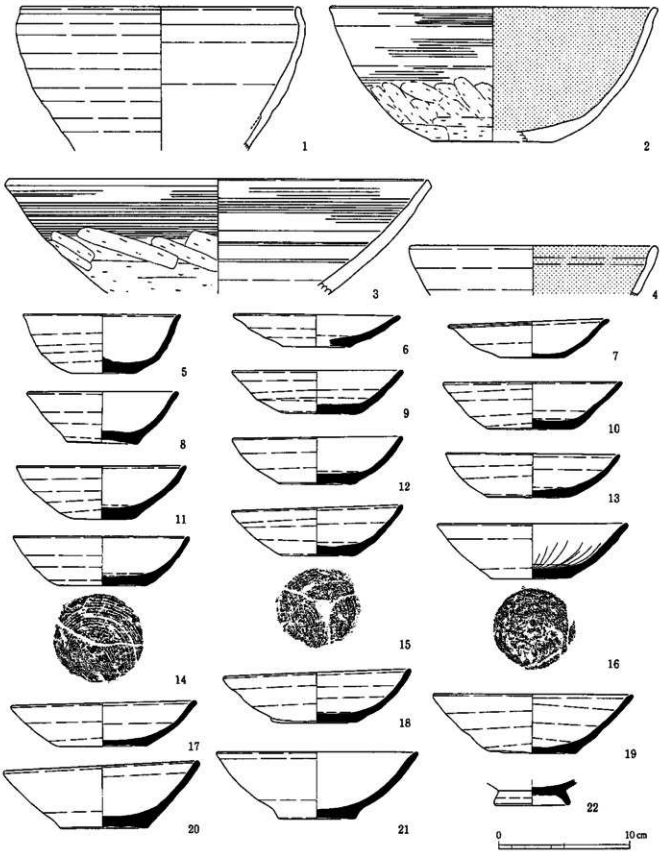
第2図　SB03



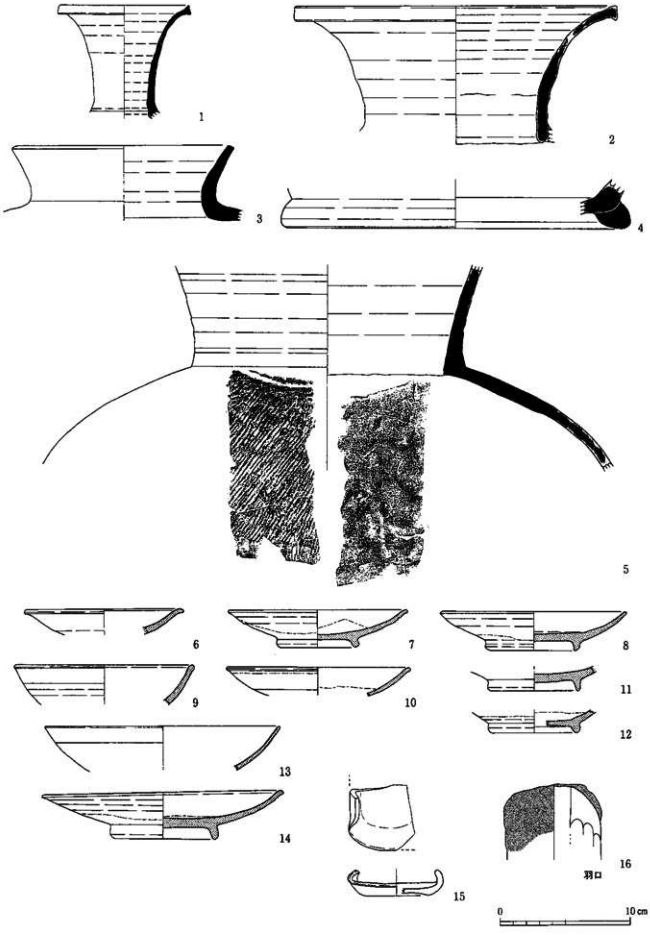
第3図　SB10



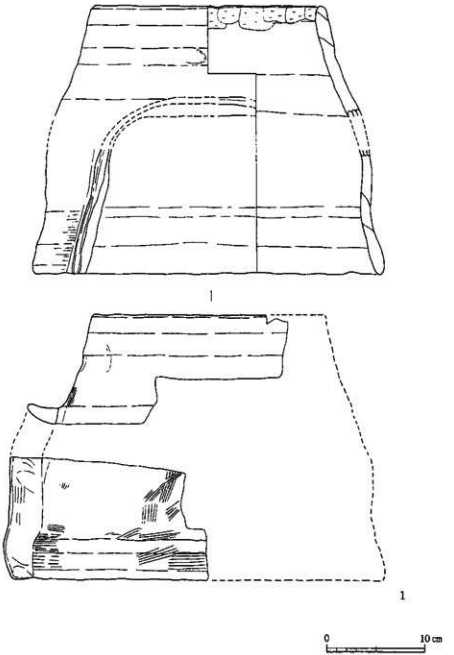
第4図　SB10



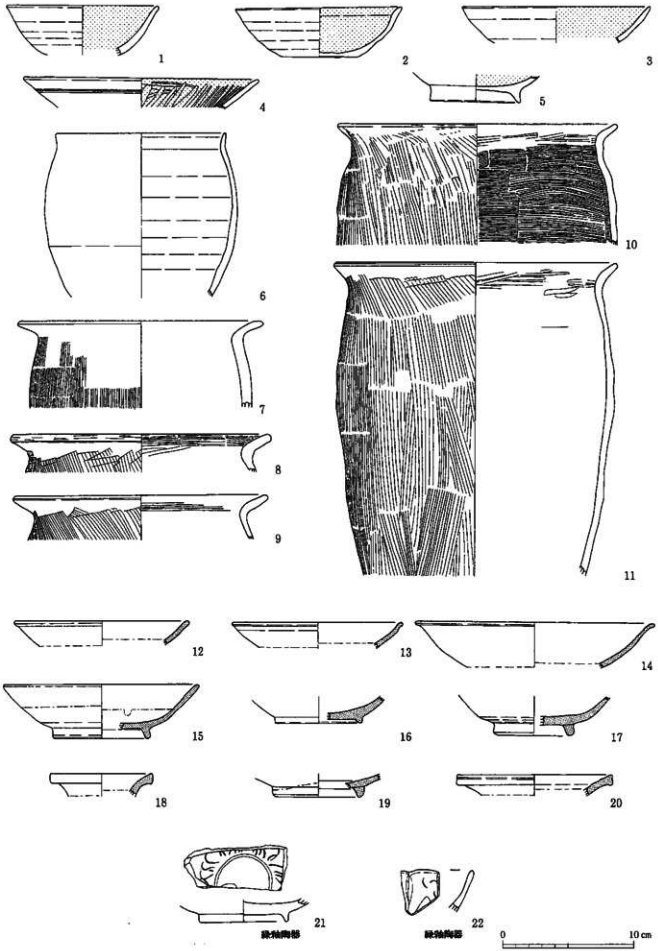
第5図　SB10



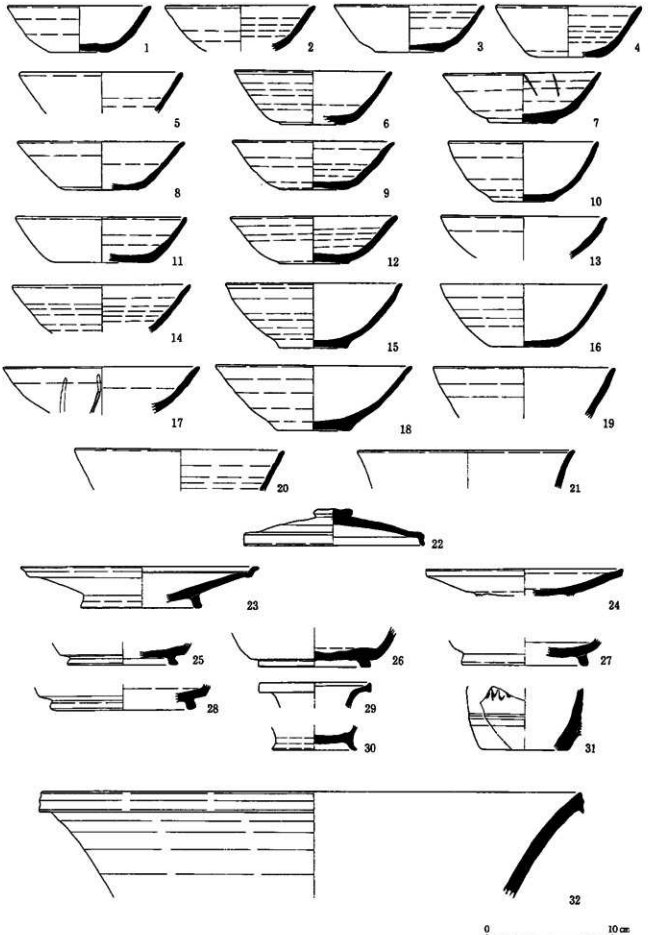
第6図　SB10



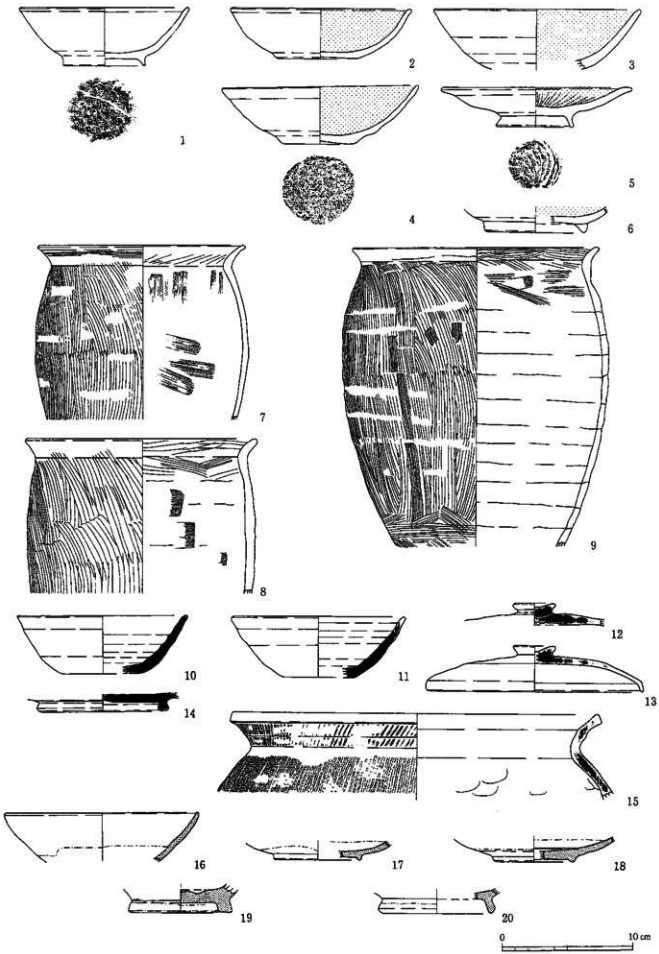
第7図　SB10



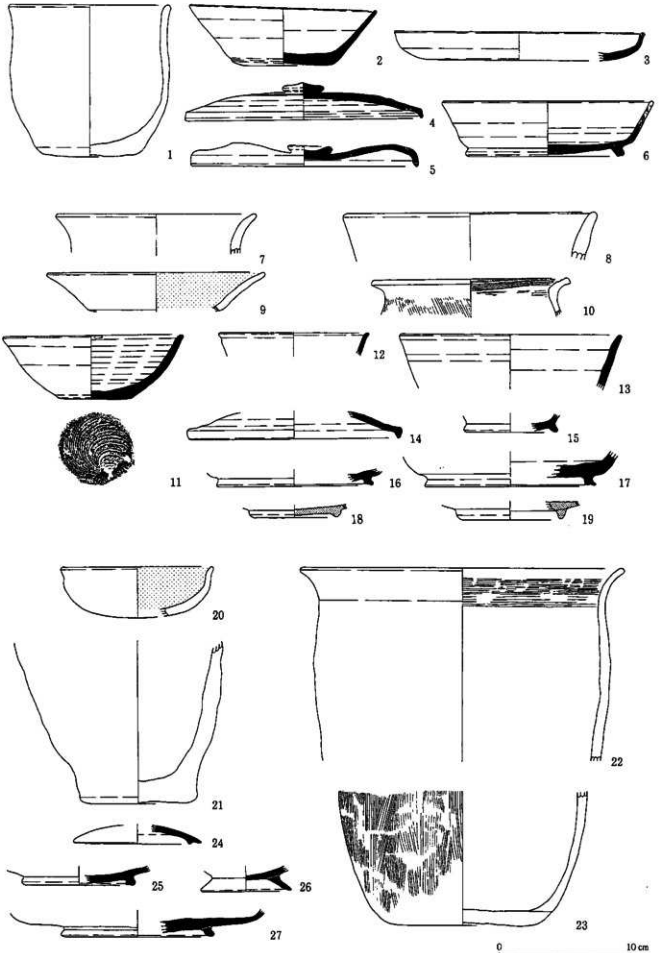
第8図　SB15


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
10 cm

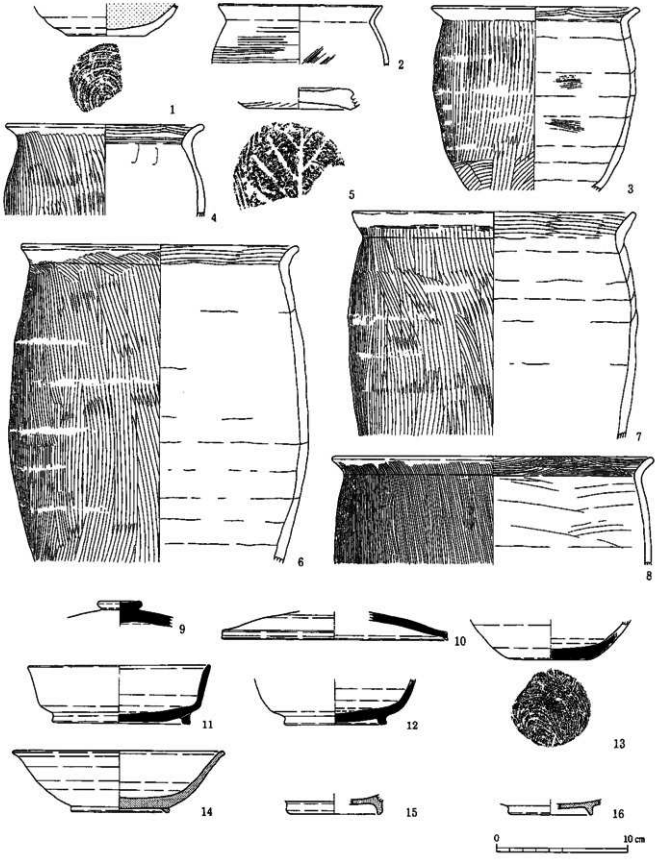
第9図　SB15



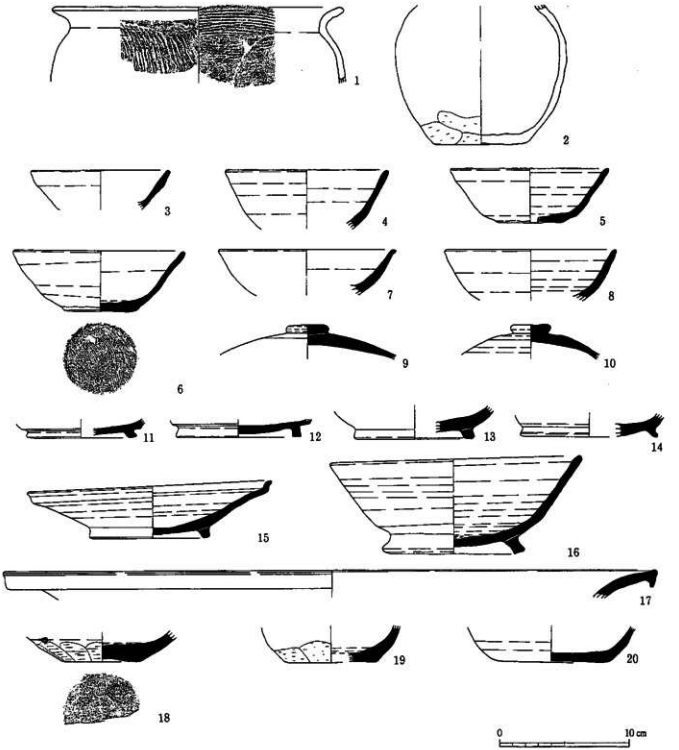
第10図　SB24



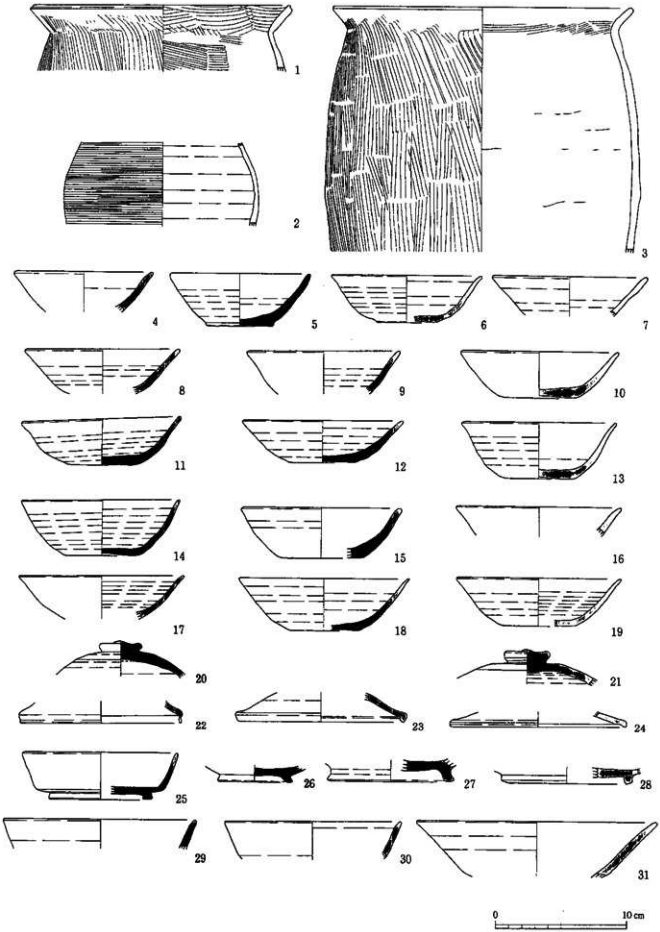
第11図　SB25（1～6）・SB29（7～19）・SB34（20～27）



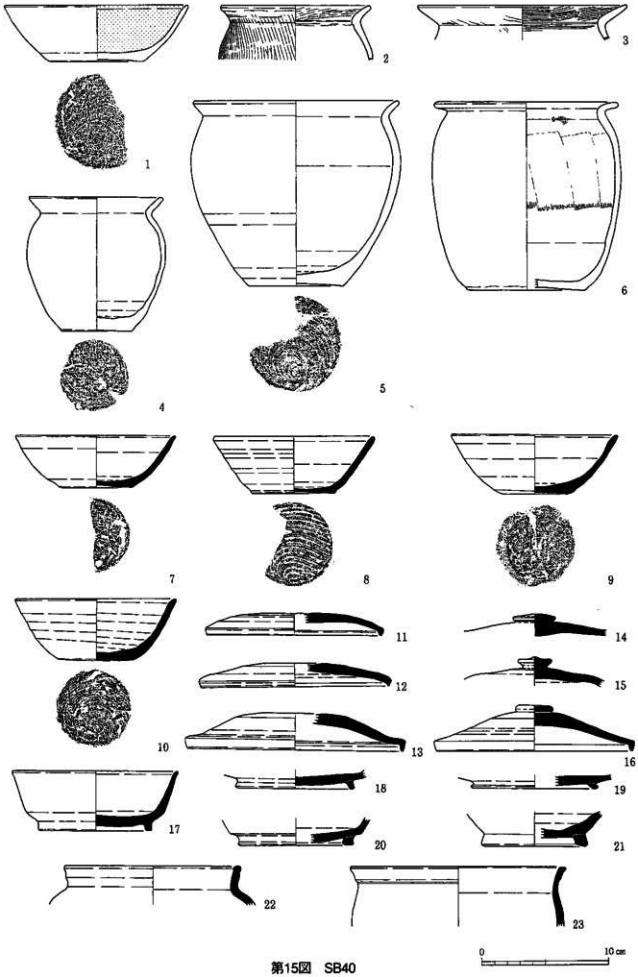
第12図　SB36



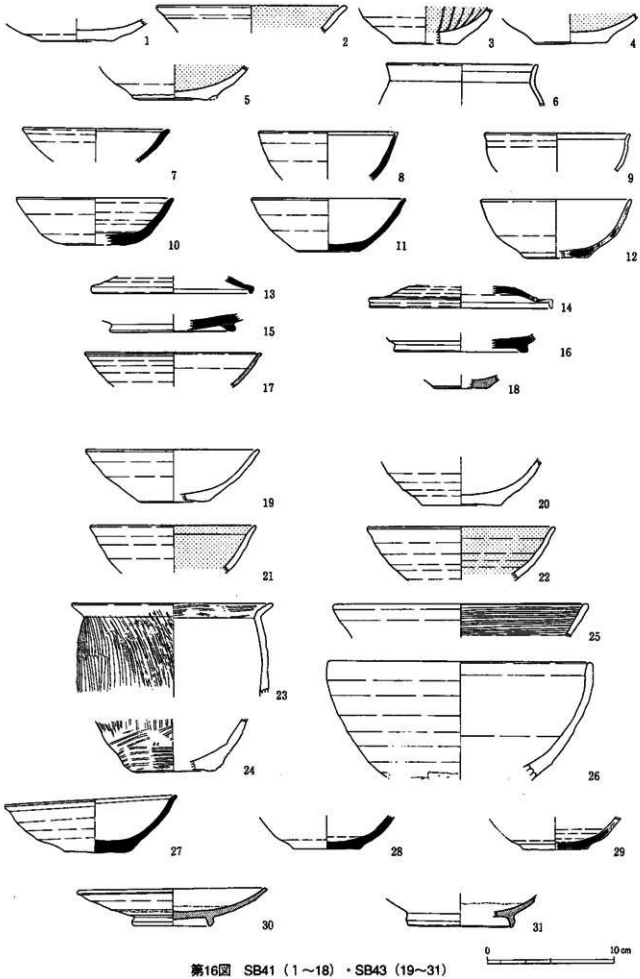
第13図　SB38


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

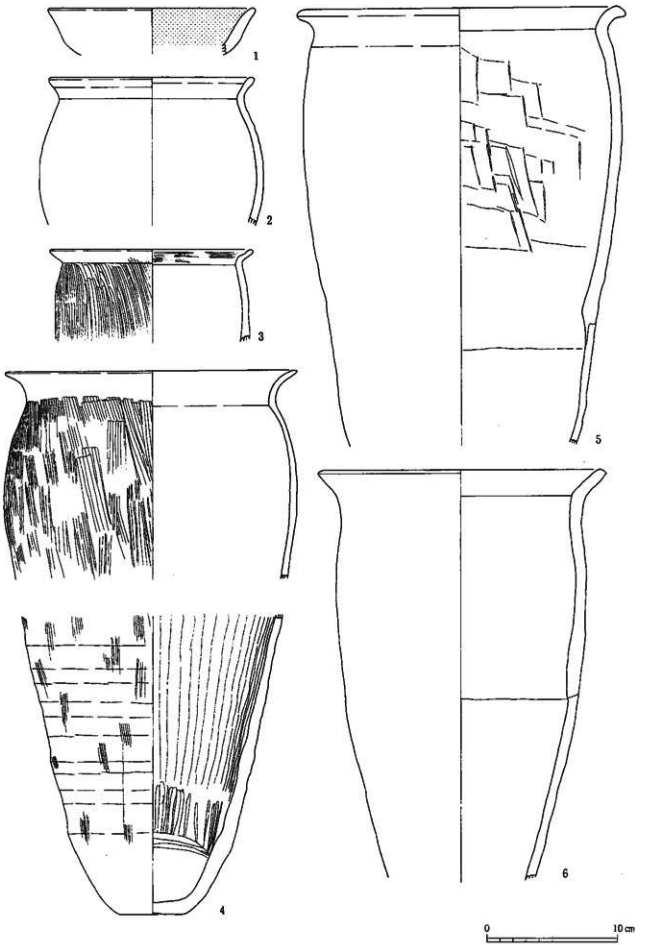
第14図　SB39



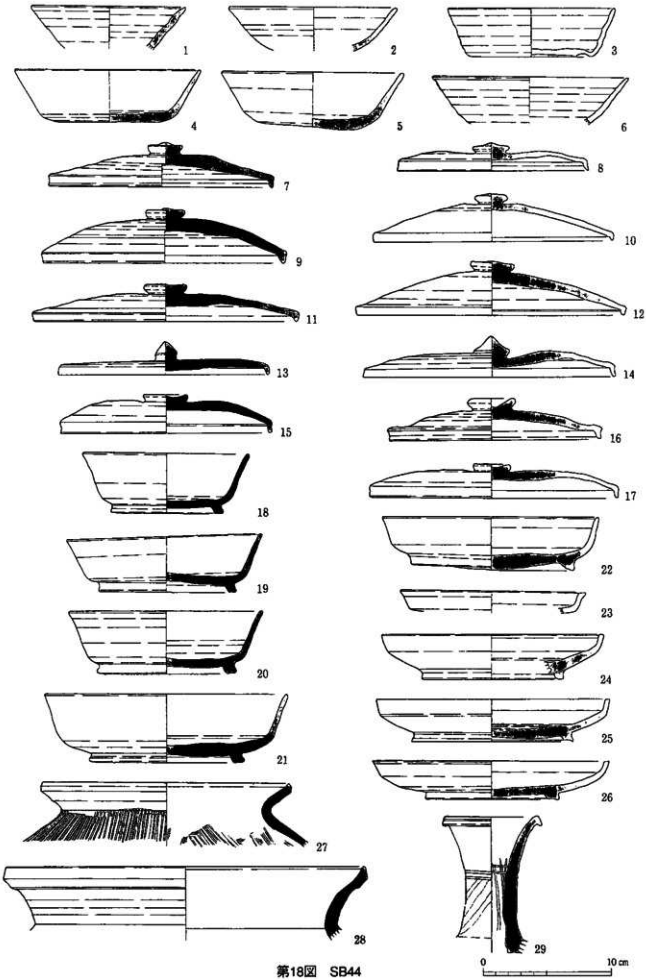
第15図　SB40



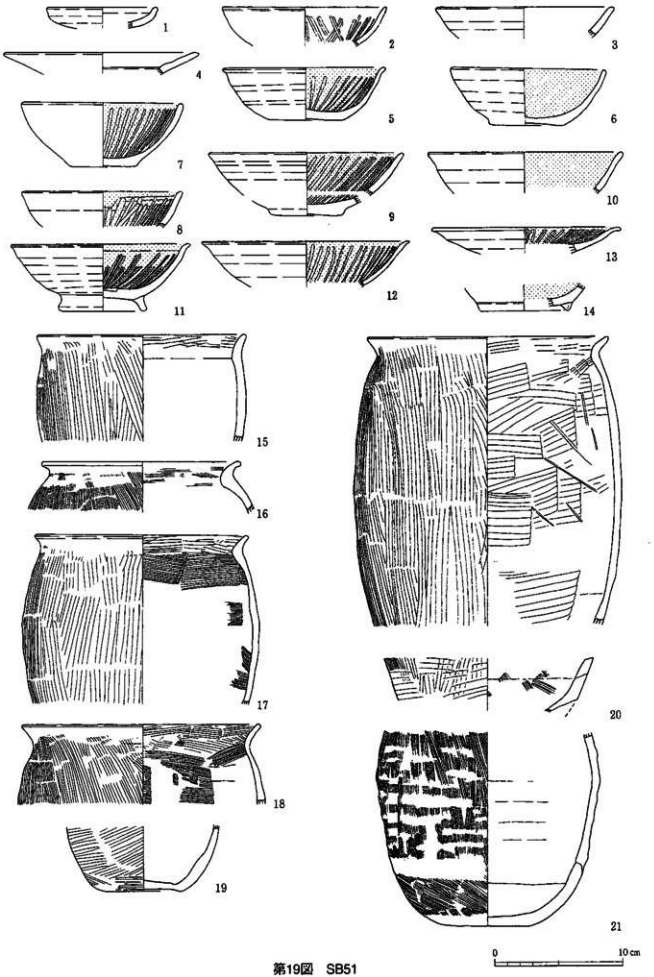
第16図　SB41（1～18）・SB43（19～31）



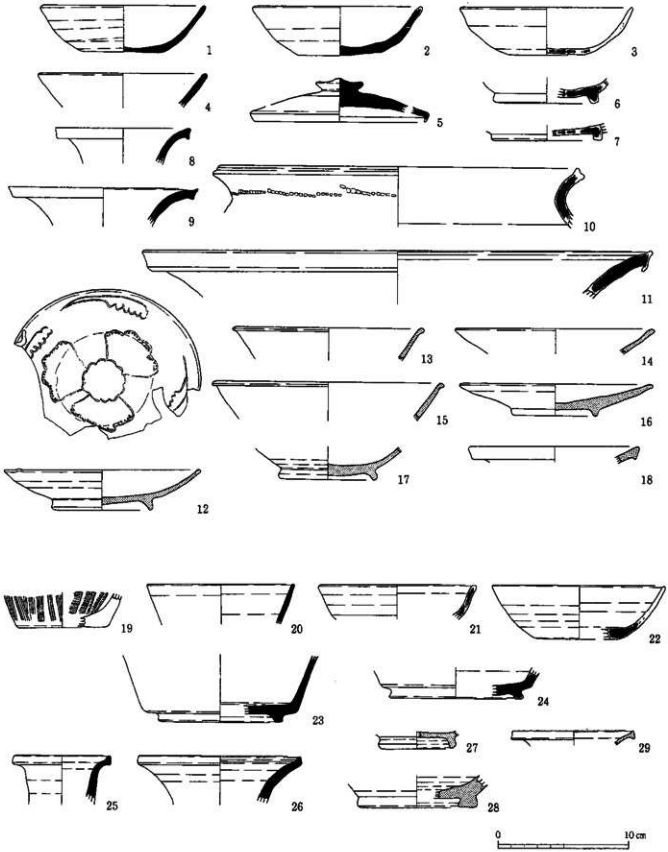
第17図　SB44


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10 cm

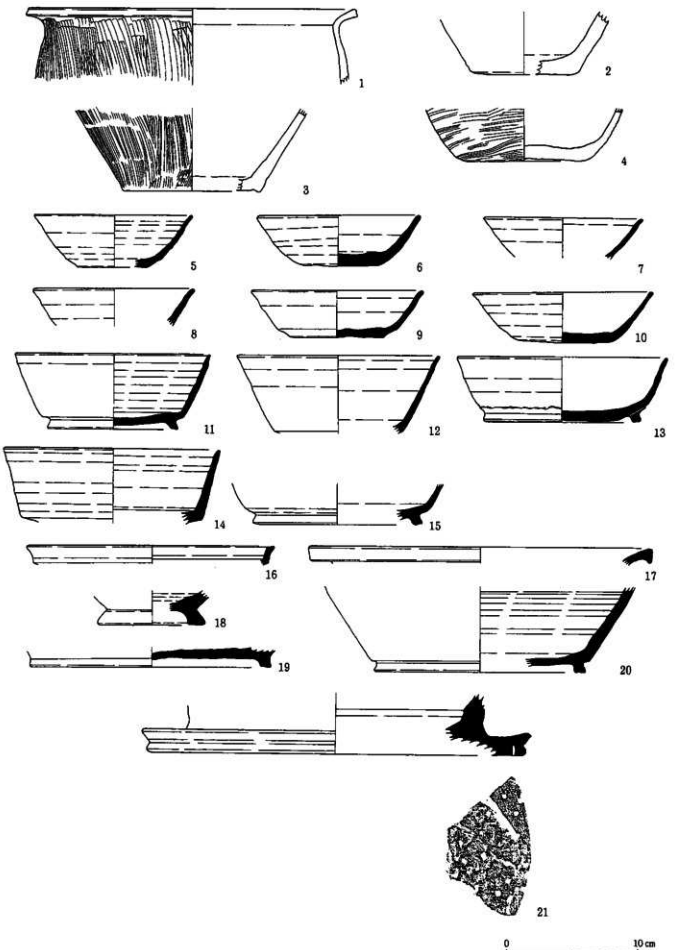
第18図　SB44



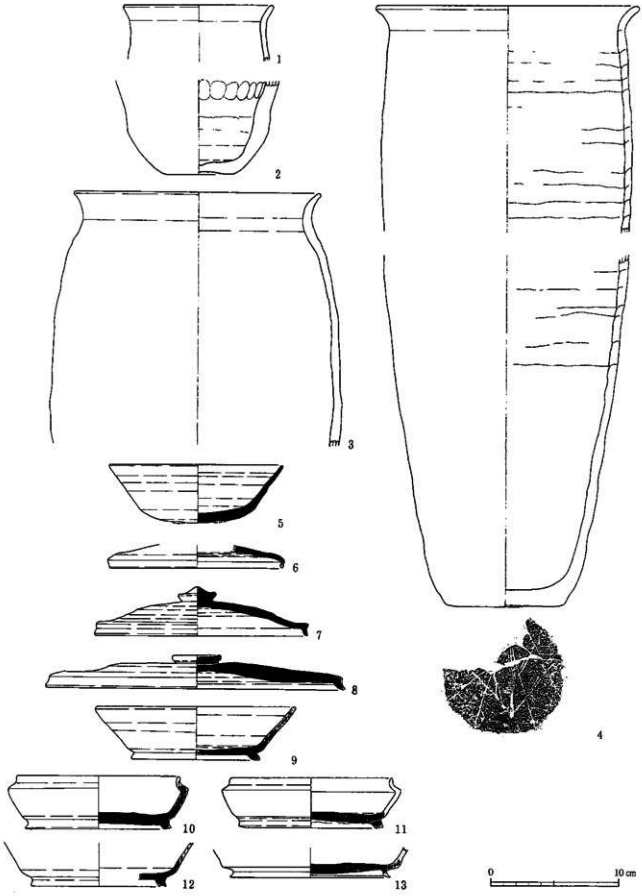
第19図　SB51



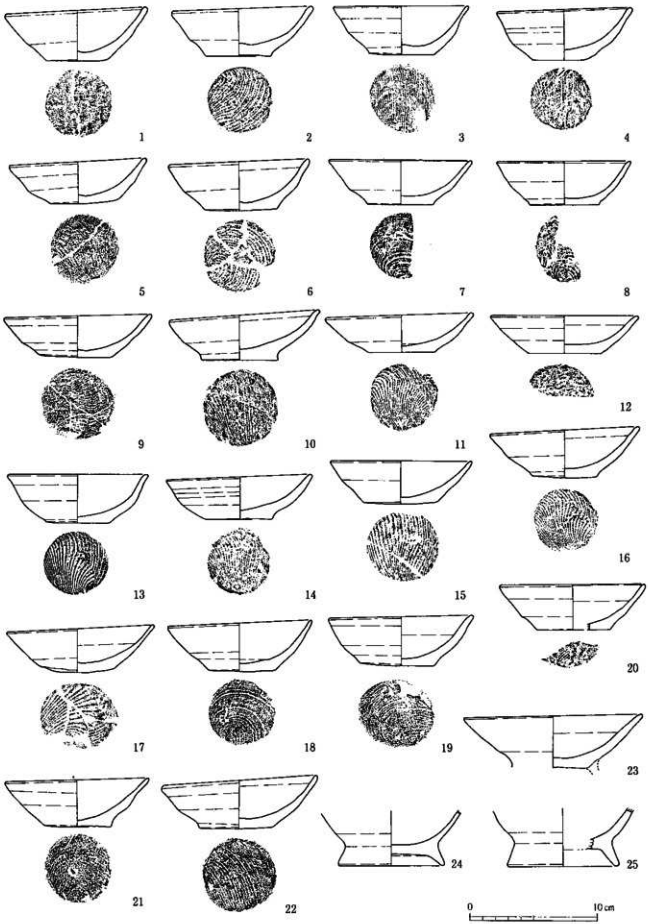
第20図　SB51（1～18）・SB48（19～29）



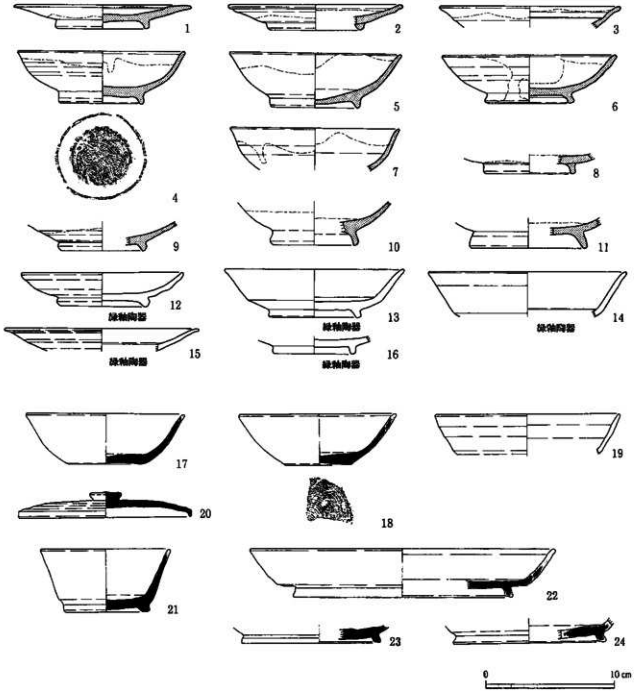
第21図　SB54



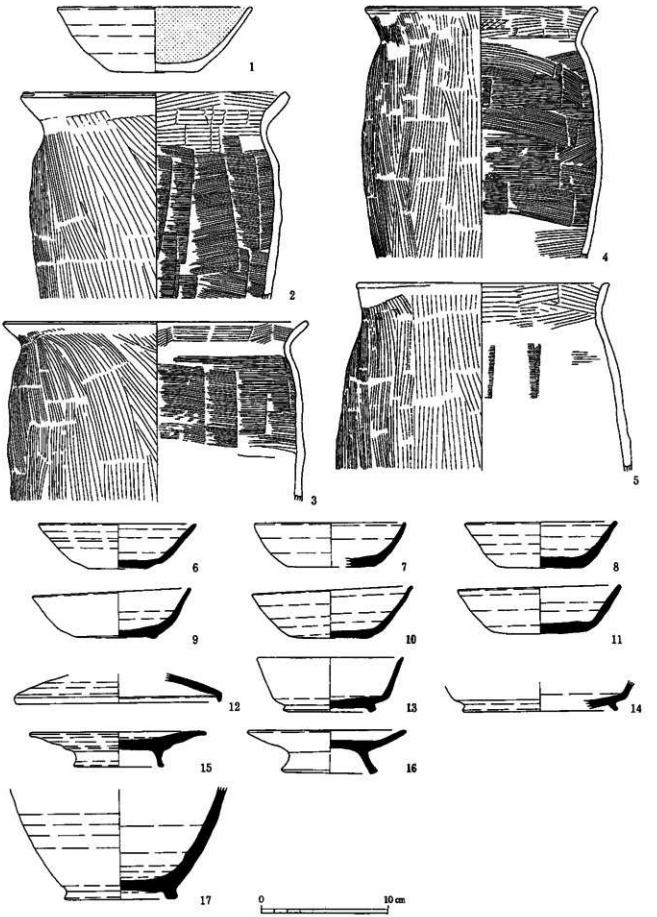
第22図　SB55



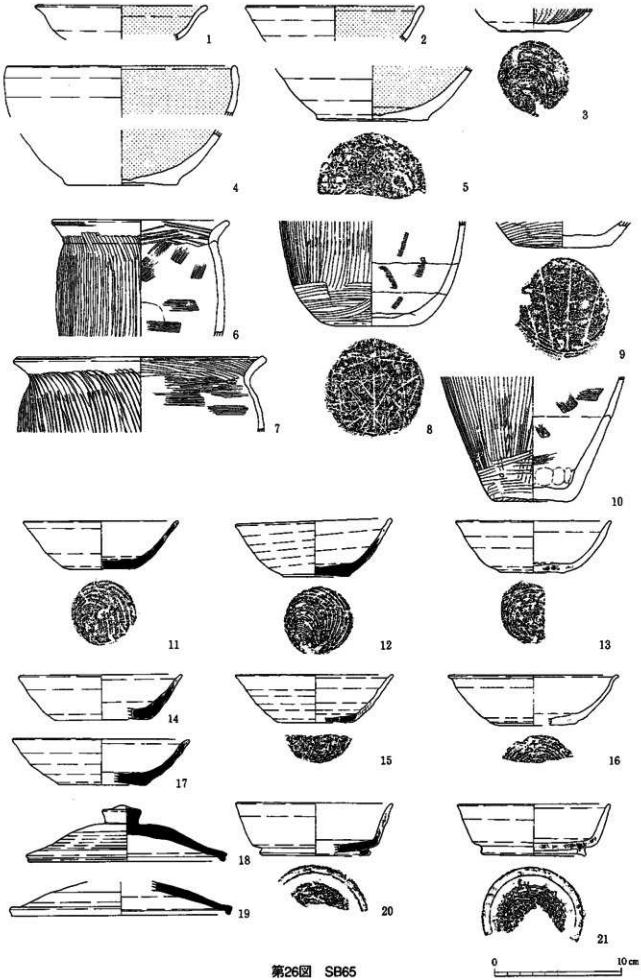
第23図　SB56



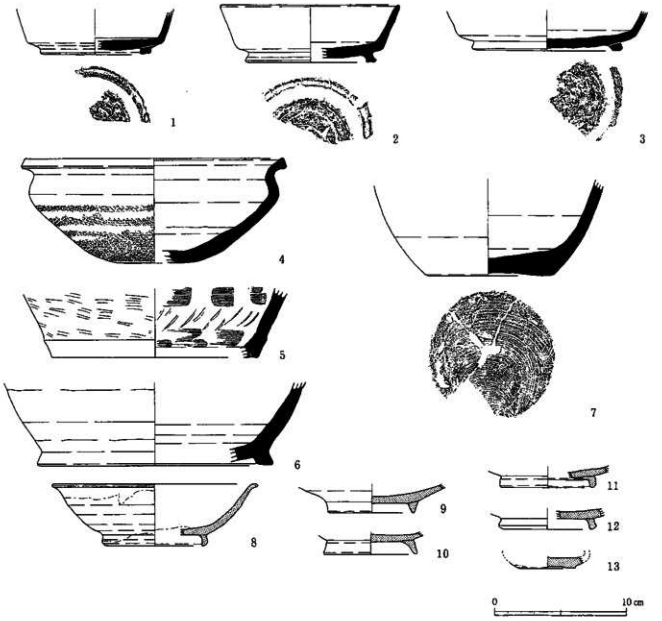
第24図　SB56（1～16）・SB64（17～24）



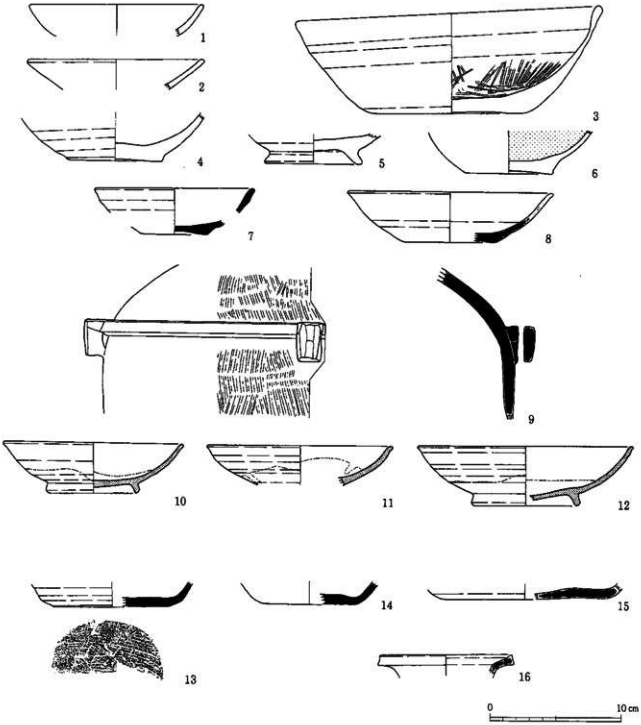
第25図　SB60



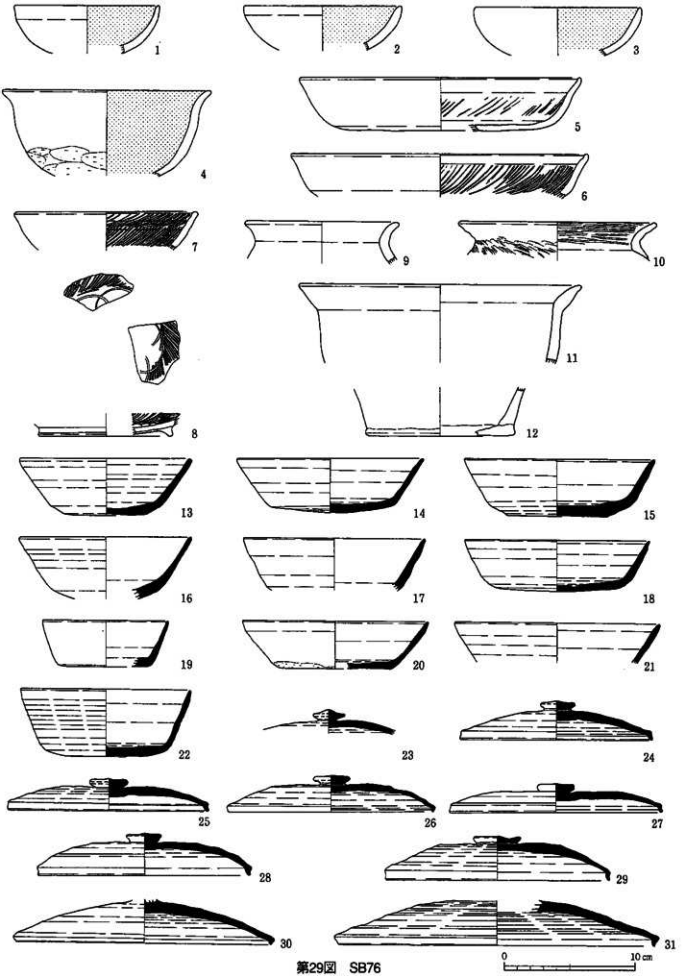
第26図　SB65



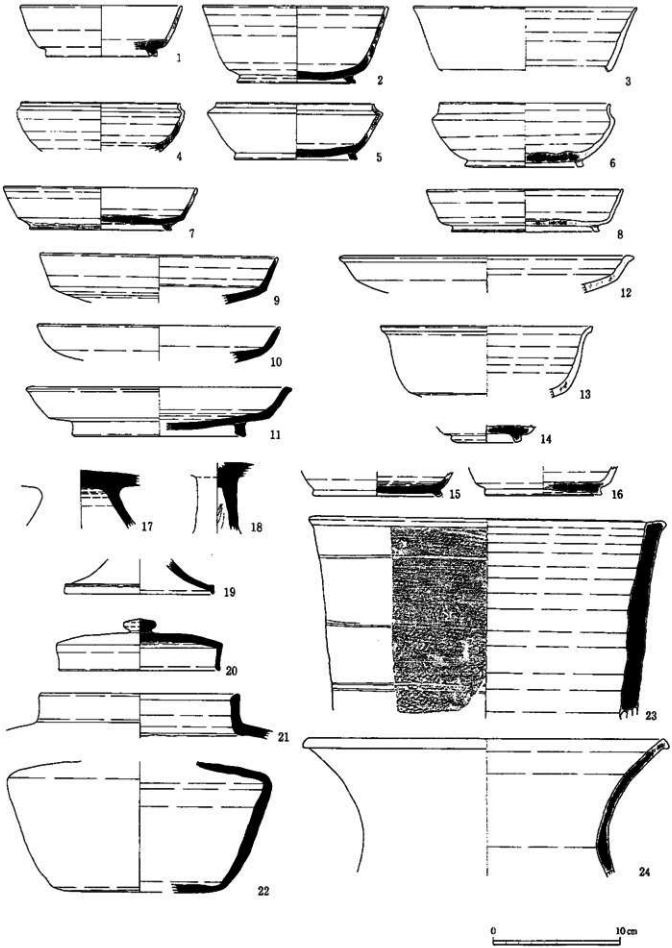
第27図　SB65



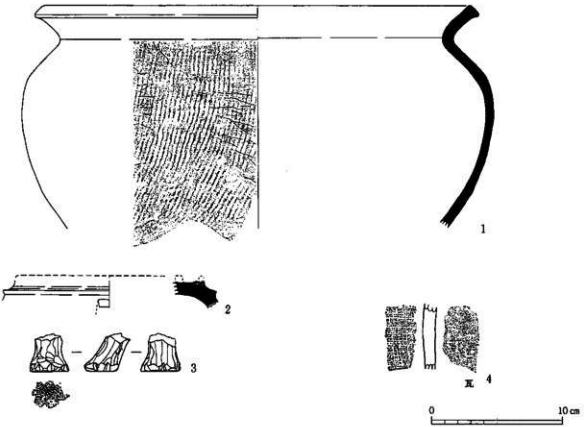
第28図　SB71（1～12）・SB72（13～16）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0
10cm

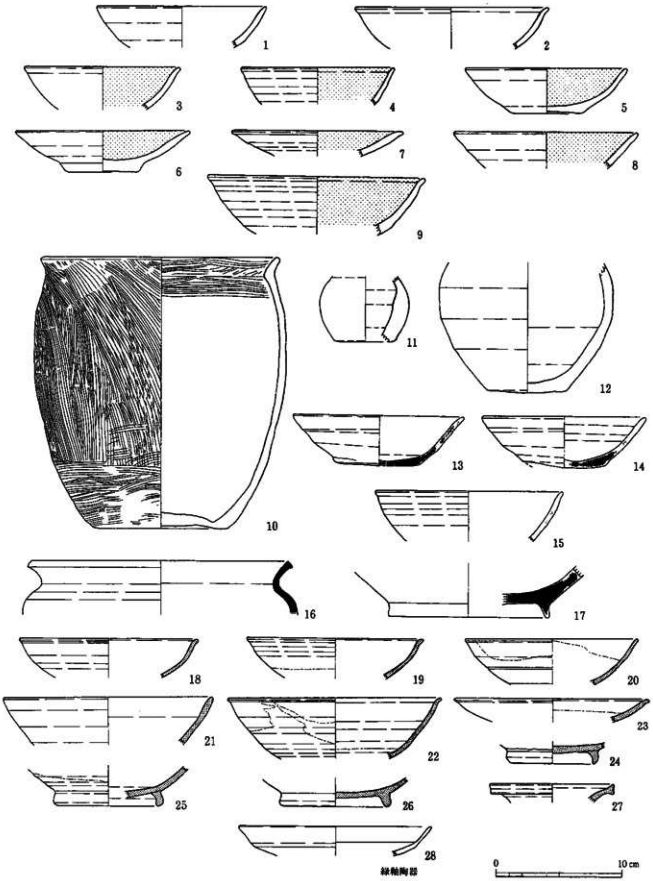
第29図　SB76



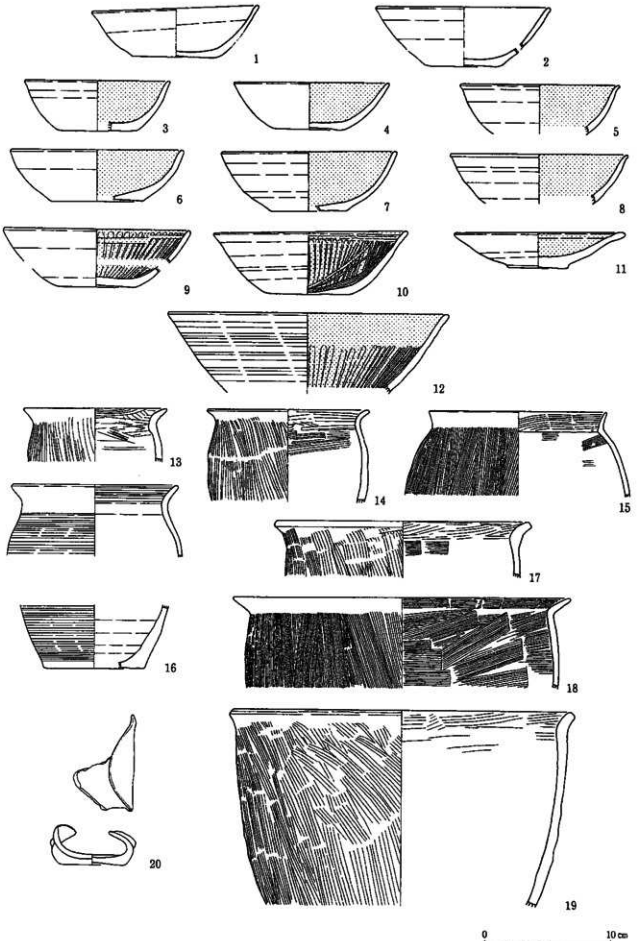
第30図　SB76



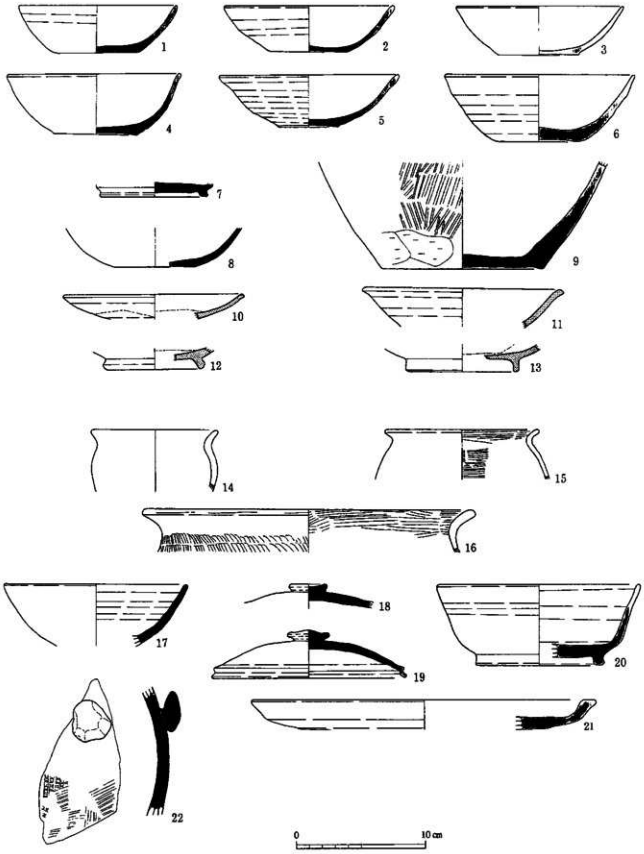
第31図　SB76


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
緑釉陶器
0
10 cm

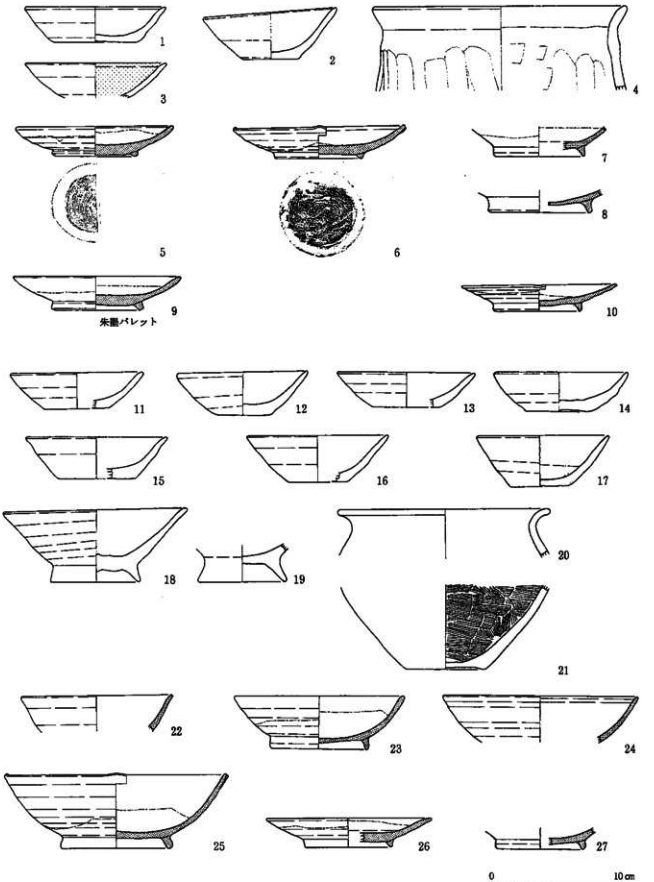
第32図　SB83



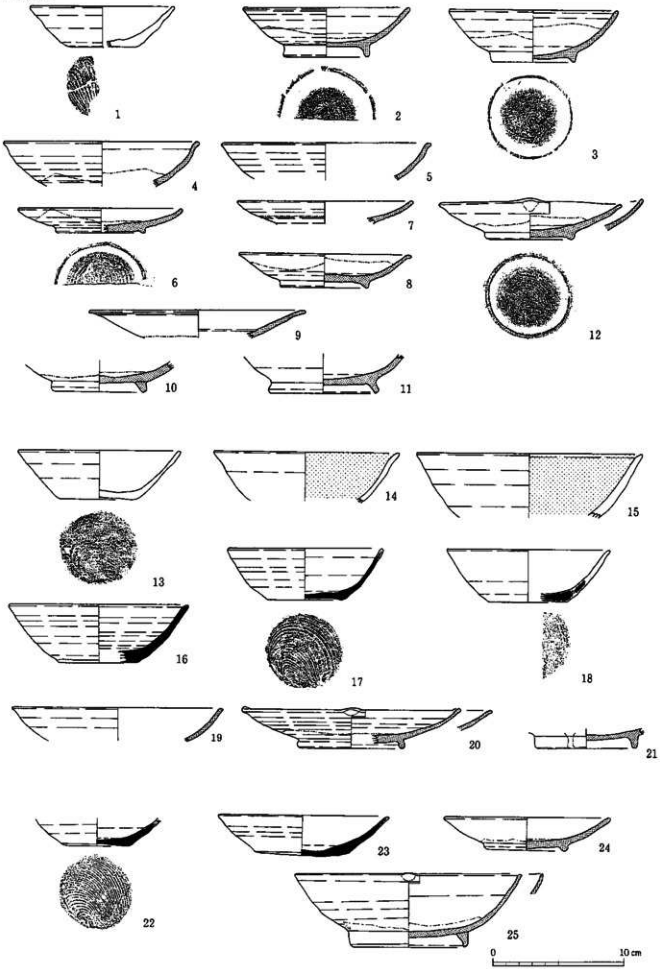
第33図　SB86



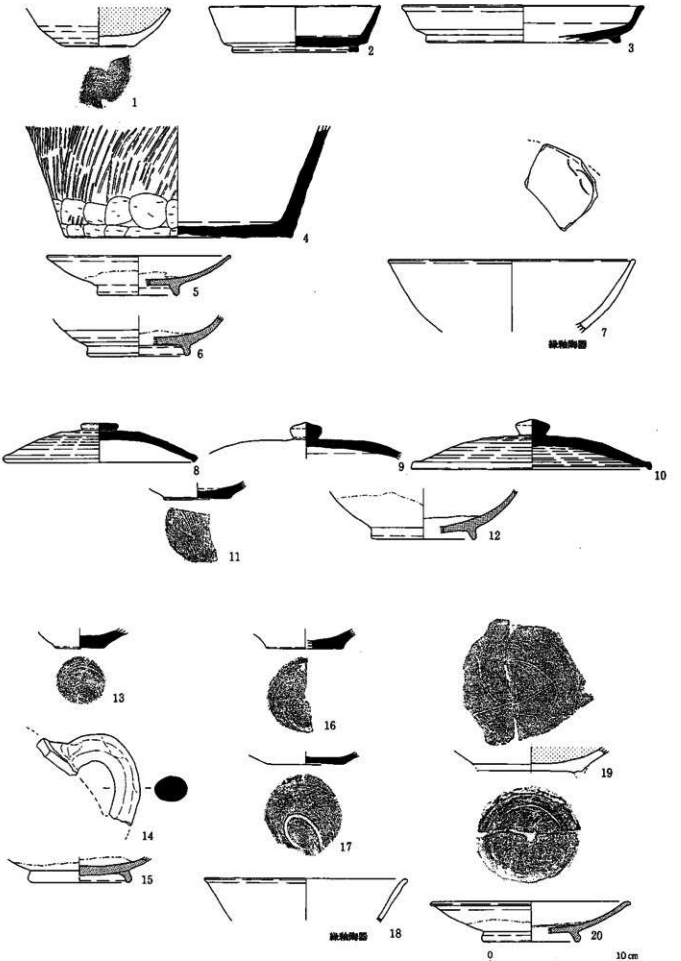
第34図　SB86（1～13）・SB87（14～22）



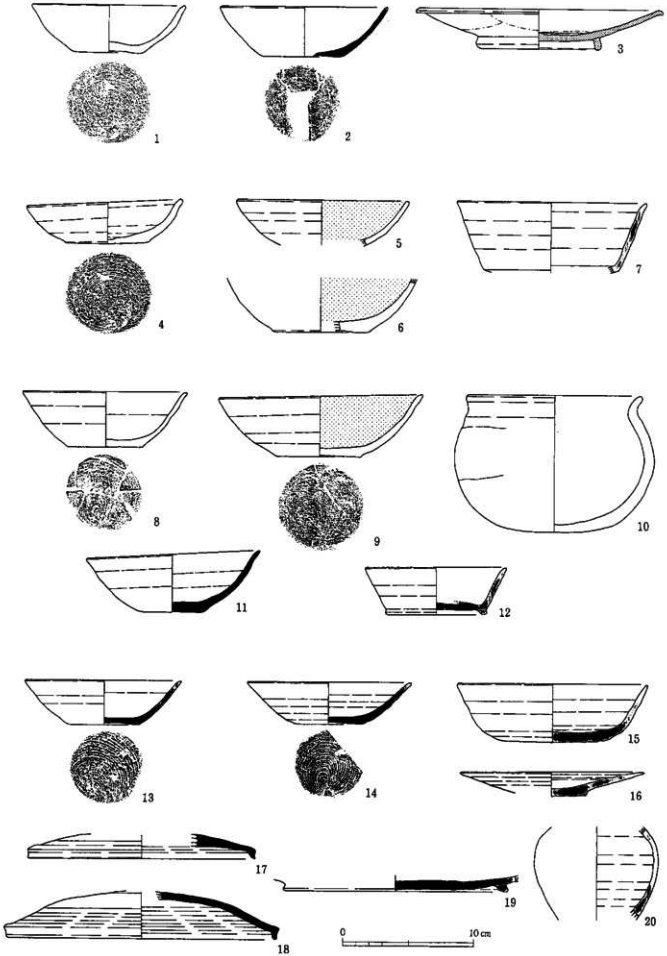
第35図　SB92（1～10）・SB100（11～27）



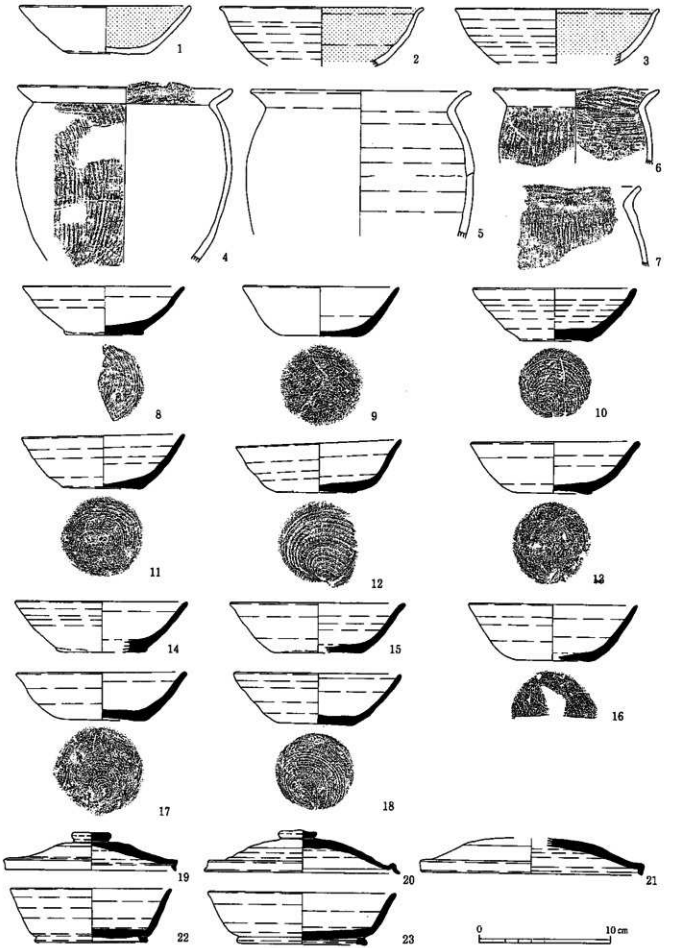
第36図　SB159（1～12）・SB164（13～21）・SB168（22～25）



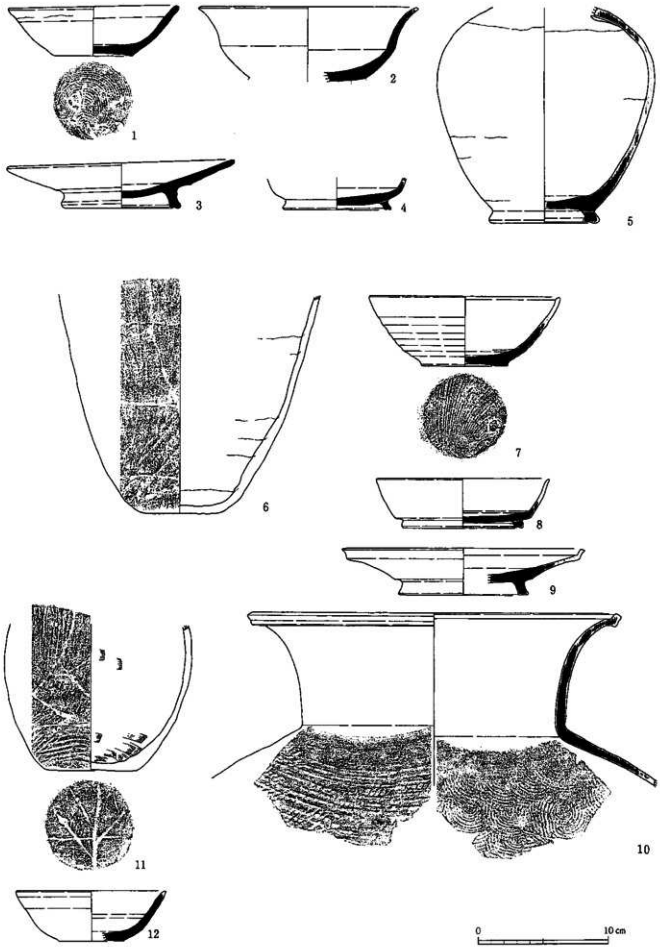
第37図　SB152（1～7）・SB155（8～12）・SB156（13～15）・SB157（16～18）・SB156・157（19・20）



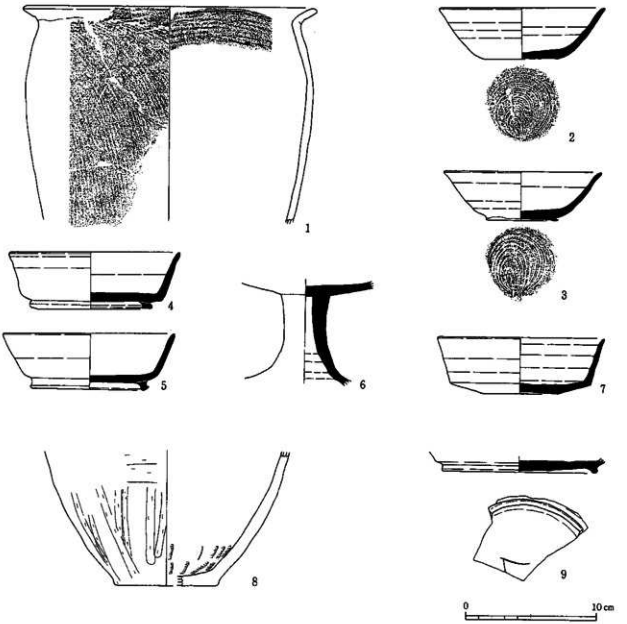
第38図　SB176（1～3）・SB177（4～7）・SB179（8～12）・SB188（13～20）



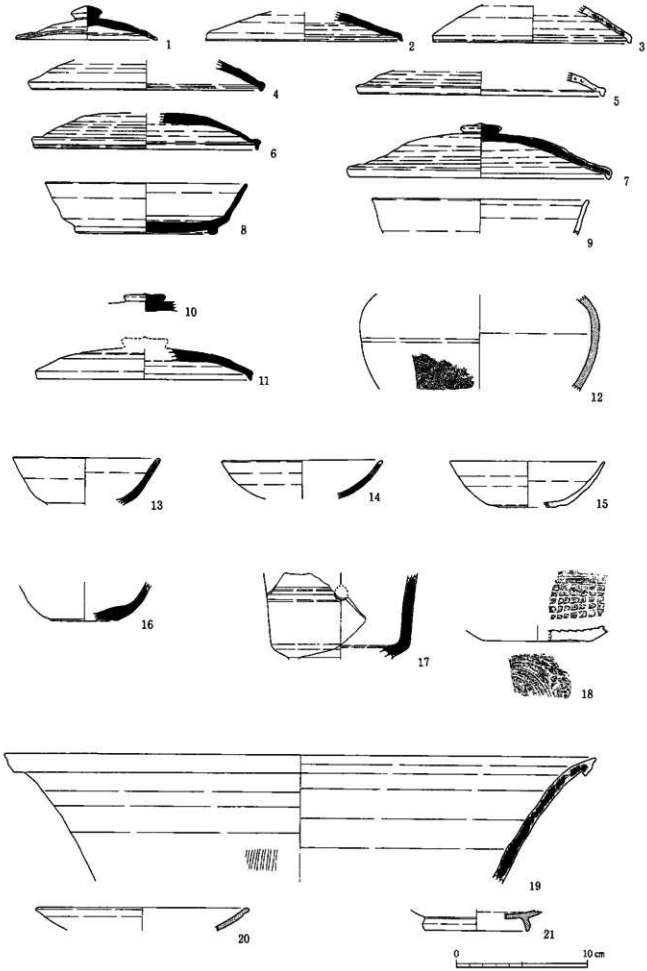
第39図　SB178



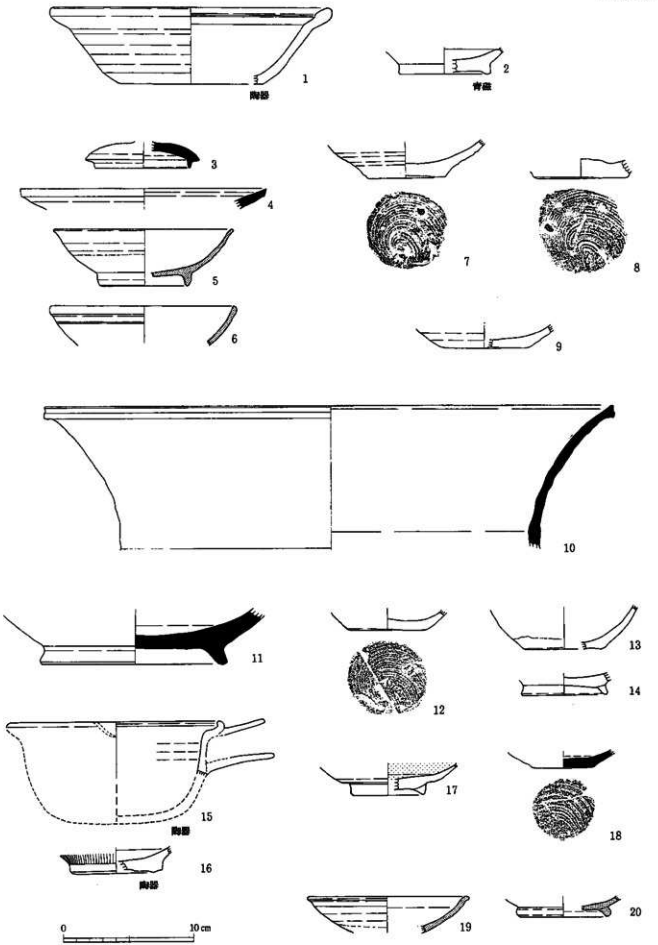
第40図　SB264（1～5）・SB265（6～10）・SB267（11・12）



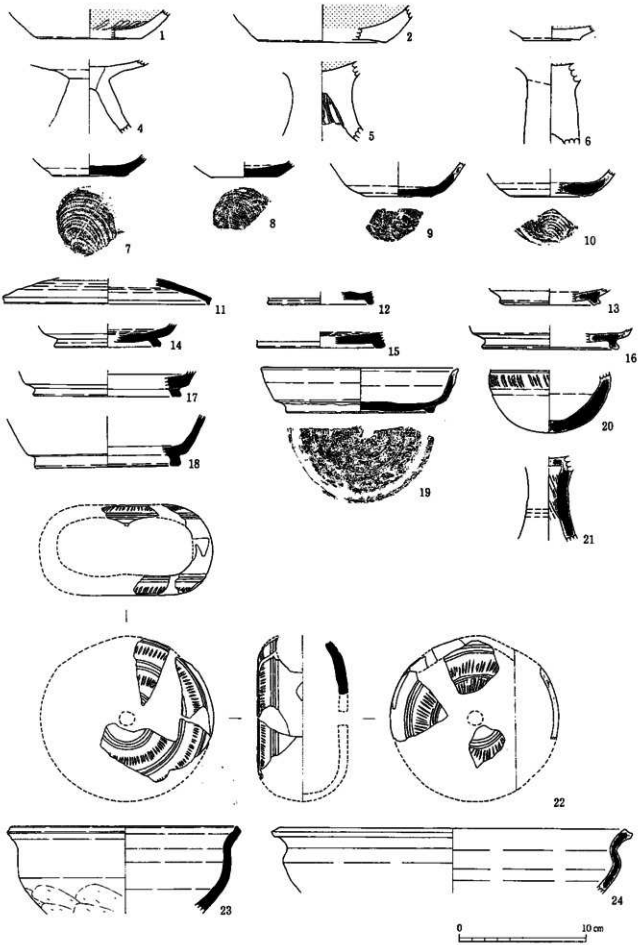
第41図　SB268・269（1～6）・SB269（7）・SB301（8・9）



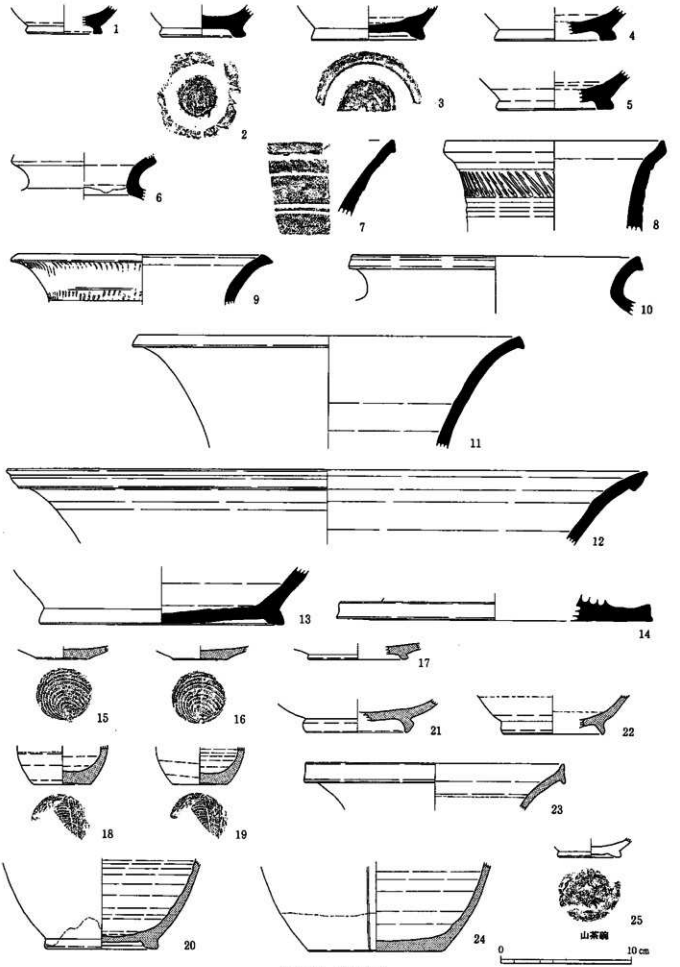
第42図　ST07(1～9)・ST09(10・11)・ST10(12)・SK02(13～15)・SK06(16)・SK09(17・18)・SK10(19～21)



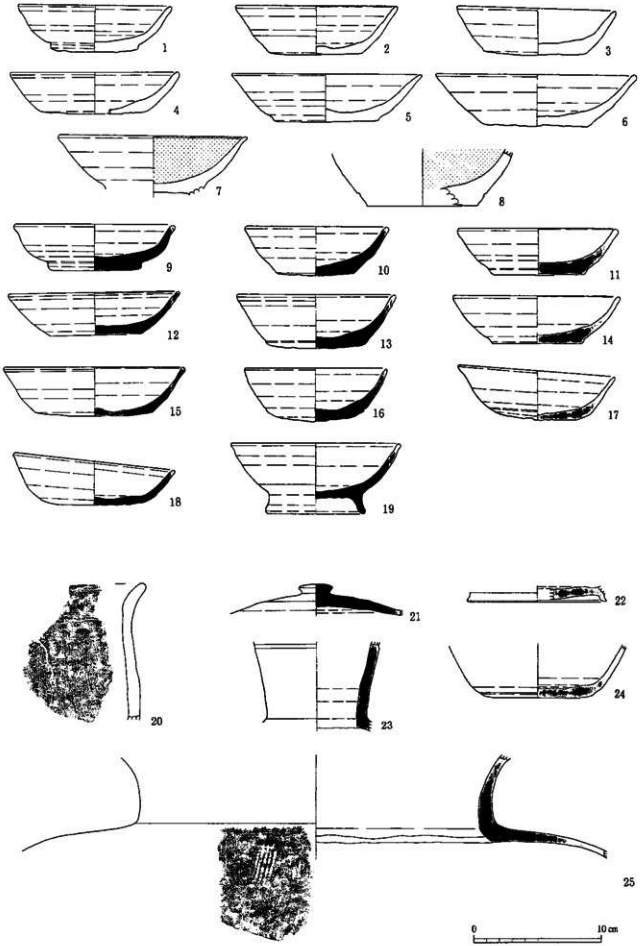
第43図　SK12（1・2）・SK13（3～6）・SK21（7・8）・SK22（9）・SI05（11）・SI17（10）
SI31（12）・SI32（13・14）・小竪穴01（15・16）・小竪穴03（17・18）・火葬墓01（19・20）



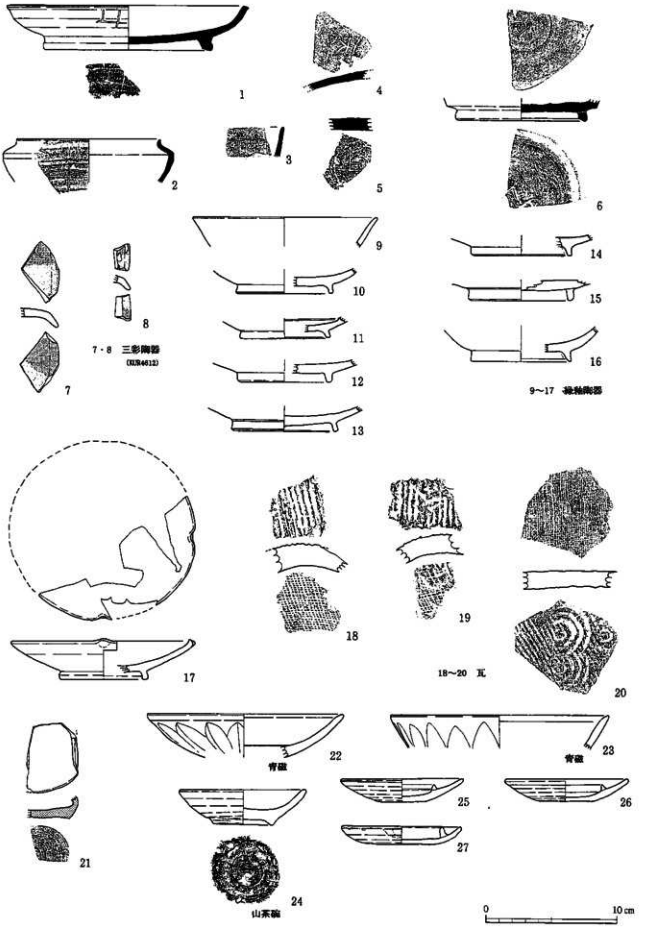
第44図　道路址01



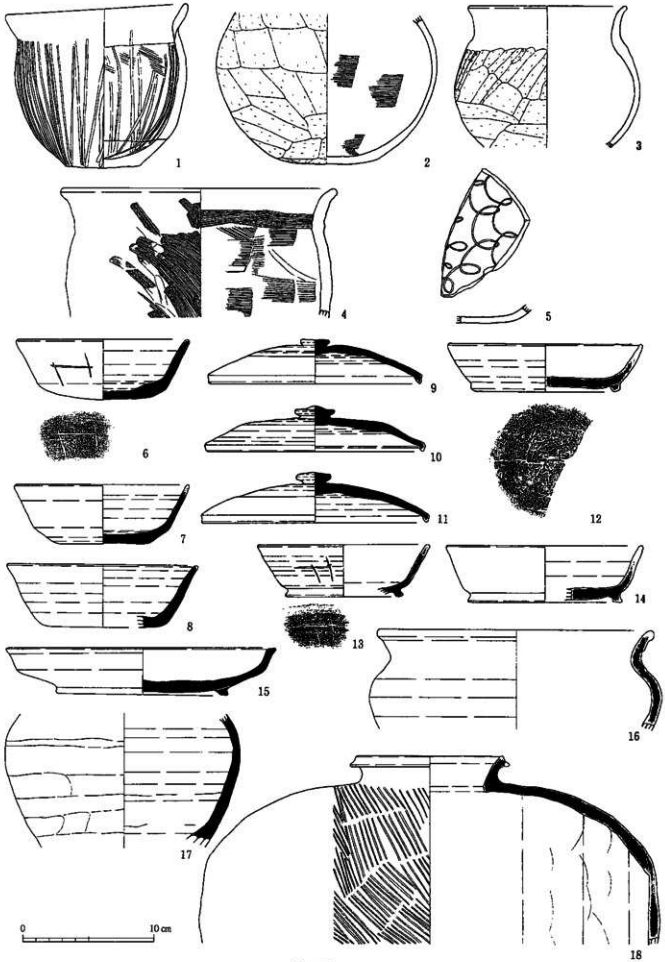
第45図　道路址01



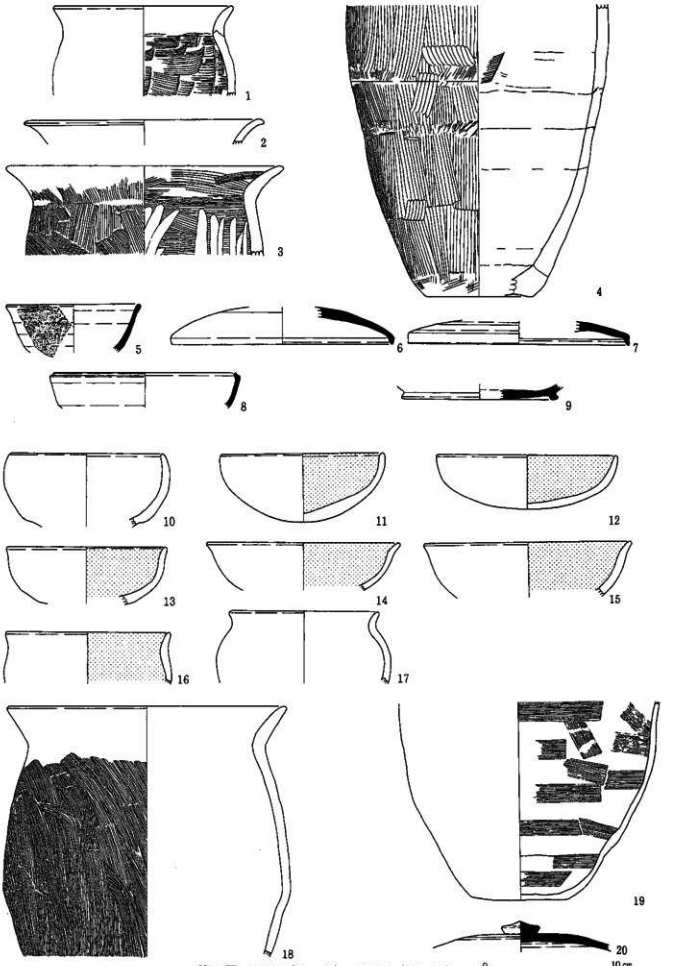
第46図　祭祀址02（1～19）・工房址01（20～25）


1
2
3
4
5
6
7
8
7・8 三彩陶器
(KUN4012)
9
10
11
12
13
14
15
16
9～17 緑釉陶器
17
18
19
18～20 瓦
20
21
22
青磁
23
青磁
24
山茶碗
25
26
27
0
10 cm

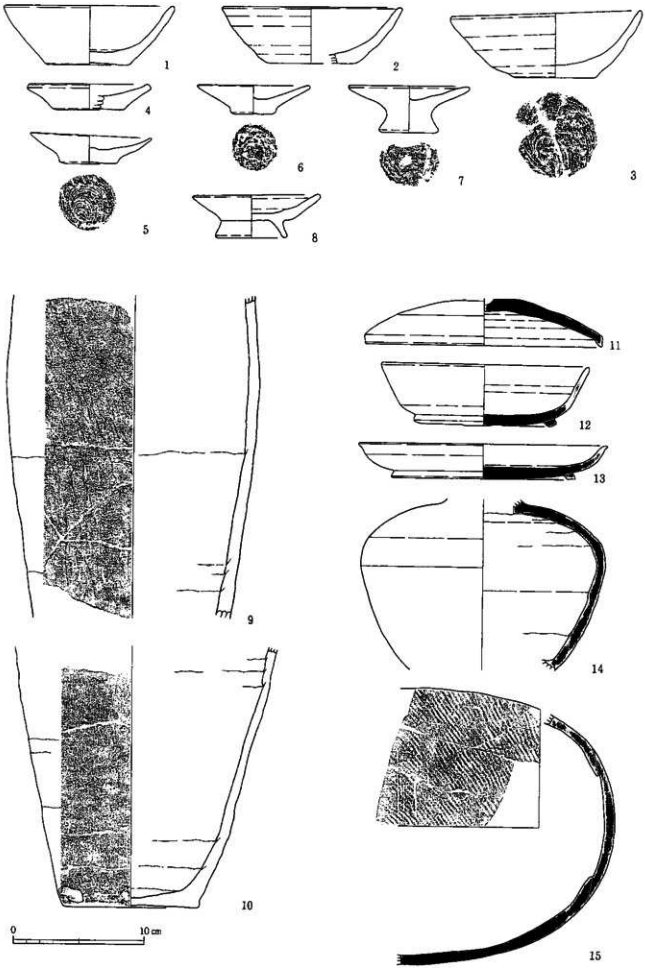
第47図　遺構外



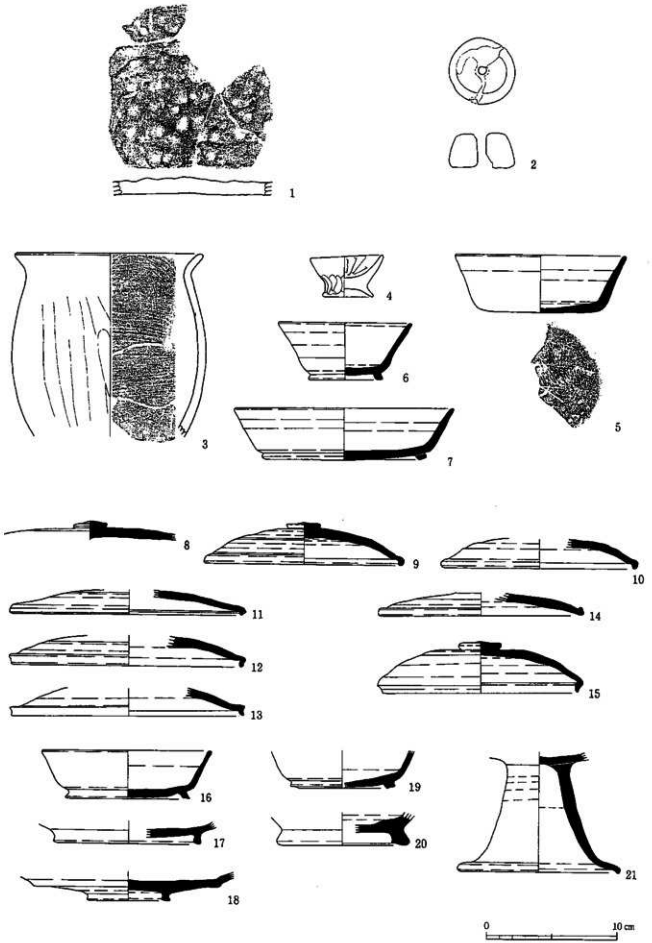
第48図　SB03



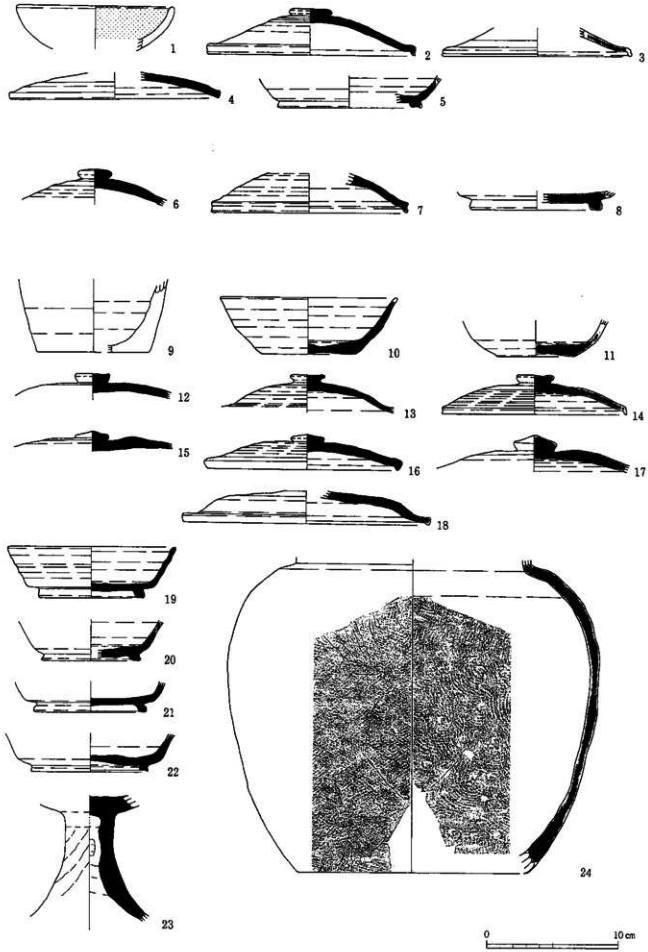
第49図　SB11（1～9）・SB31（10～20）



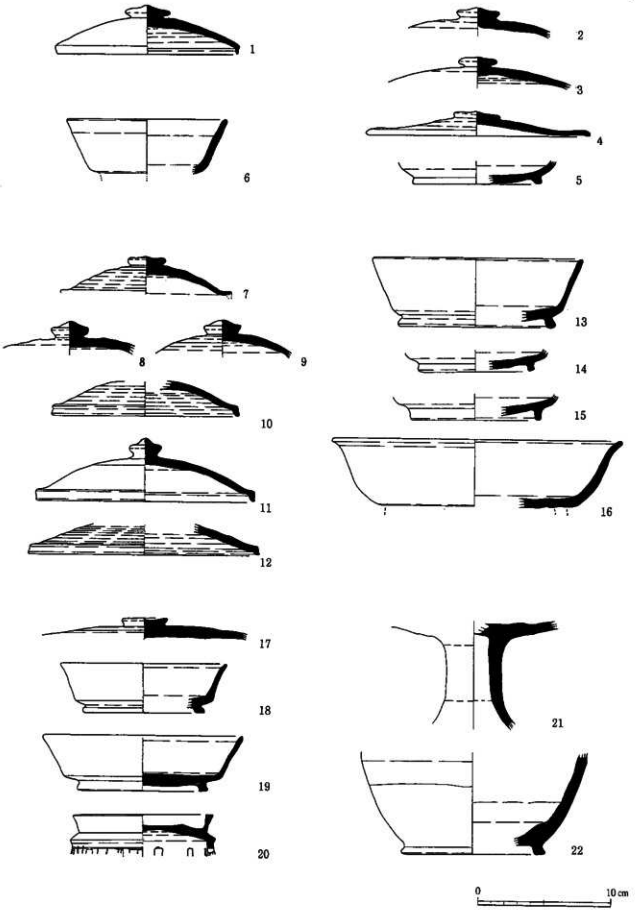
第50図　SB39（1～8）・SB75（9～15）



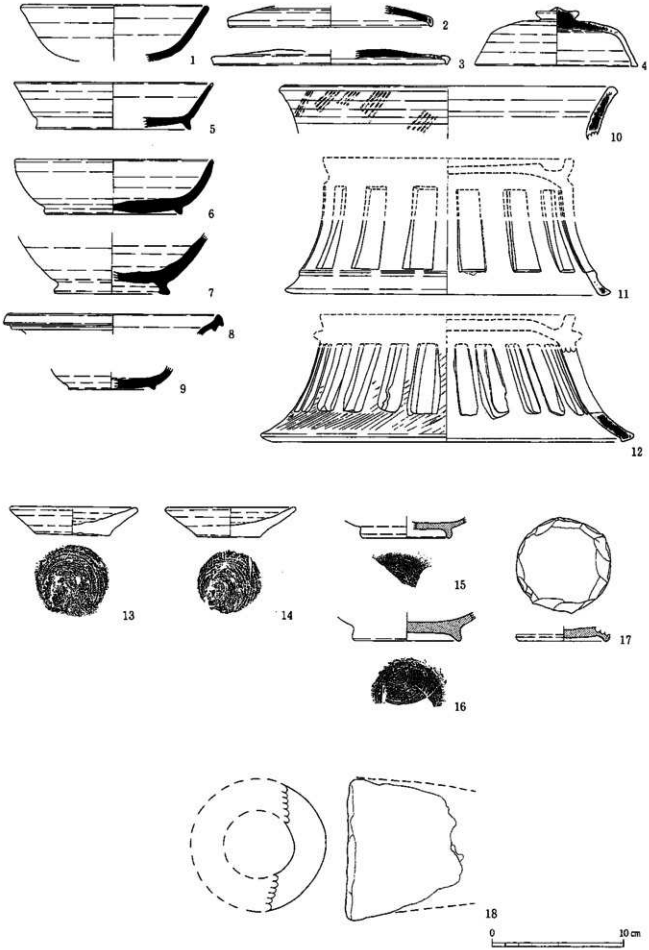
第51図　SB75（1・2）・SB77（3～7）・SB89（8～21）



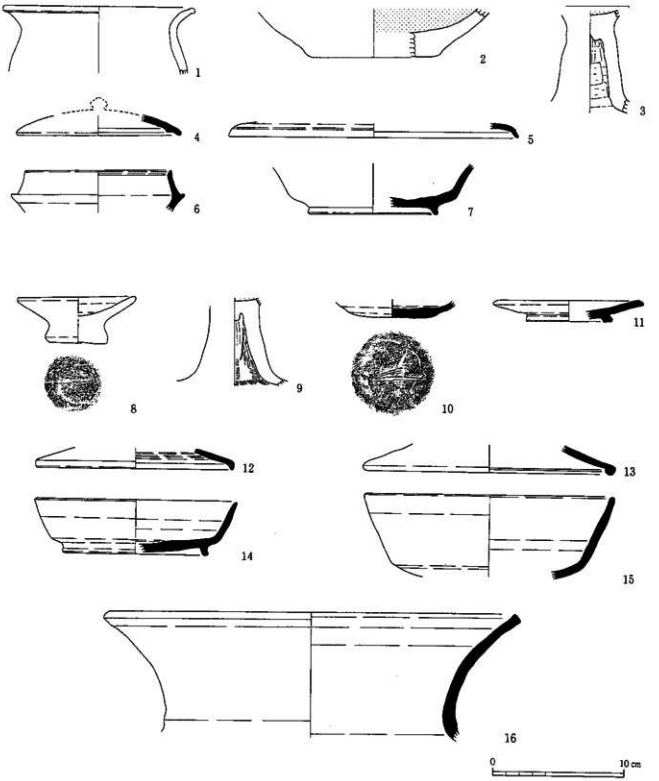
第52図　SB92（1～5）・SB93（6～8）・SB94（9～24）



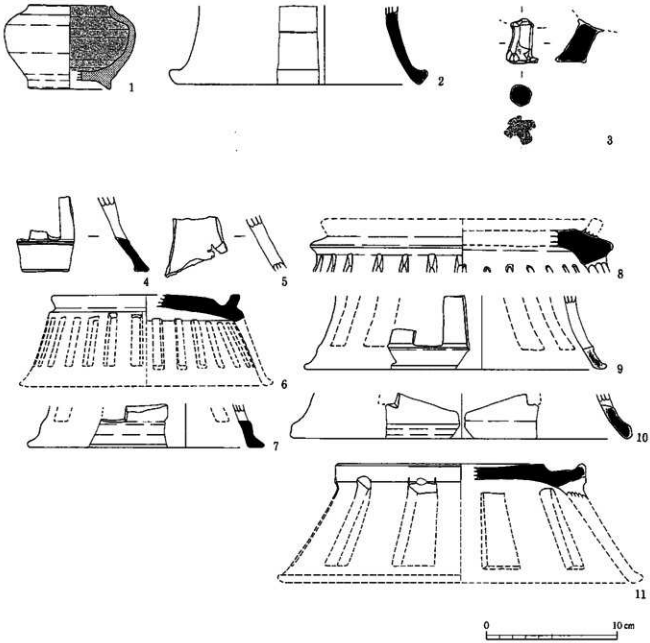
第53図　ST15（1）・ST16（2～5）・ST18（6）・ST32（7～16）・SK13（17～20）・小型穴03（21・22）



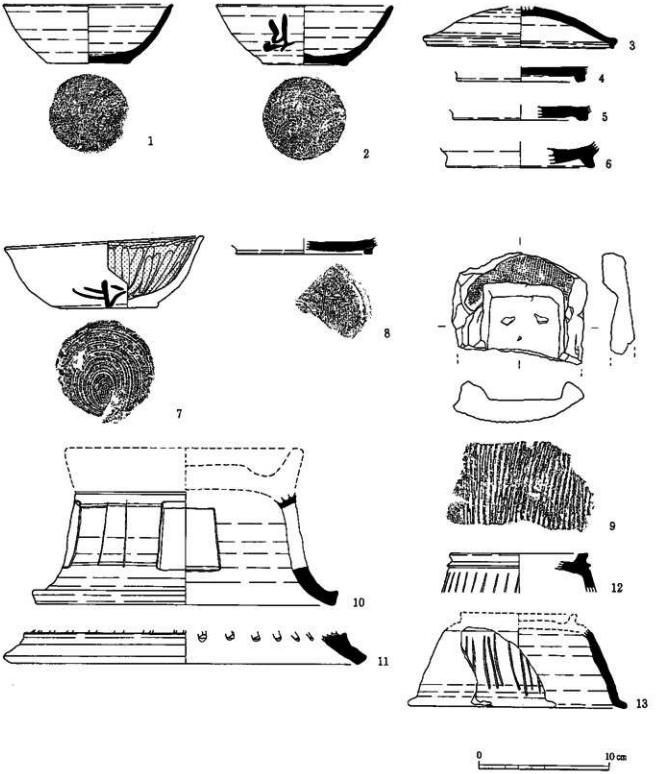
第54図　SB05（1～12）・SB24（13～17）・ST04（18）



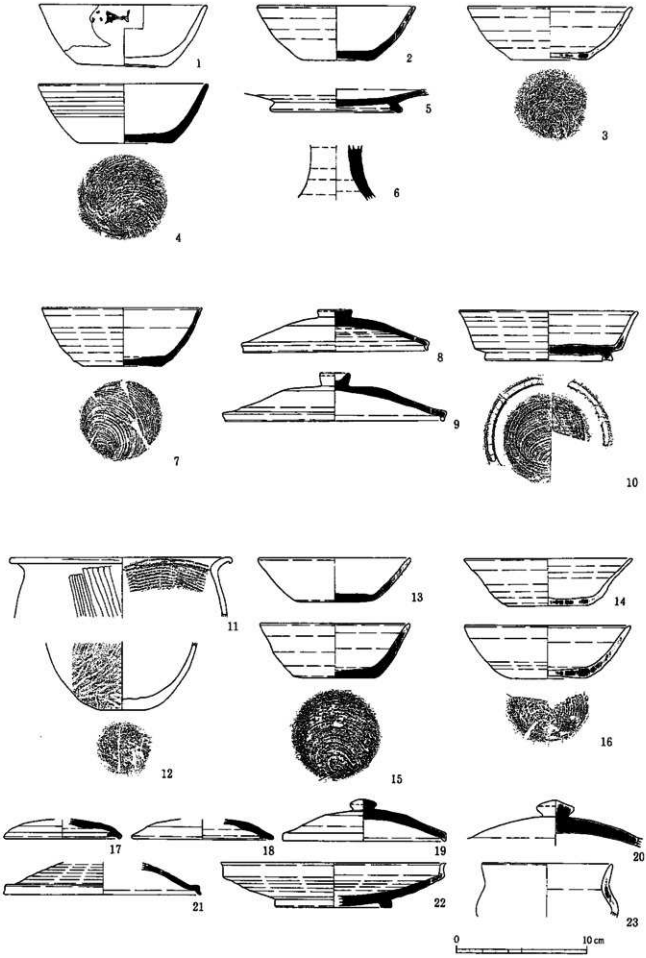
第55図　SD03（1～7）・SD04（8～16）



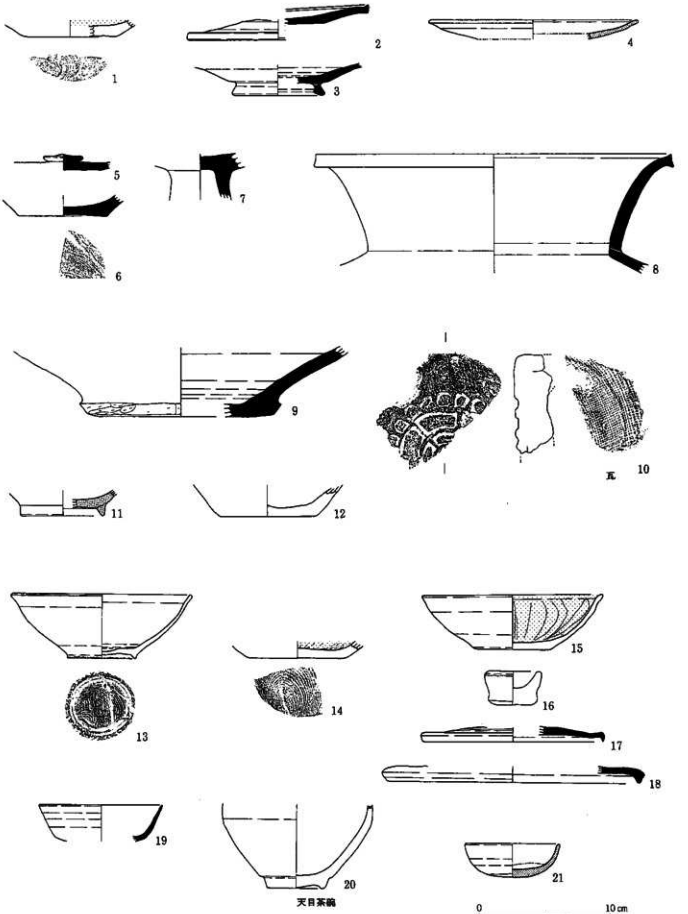
第56図　遺構外（恒川B－1～3・阿弥陀垣外－4～11）



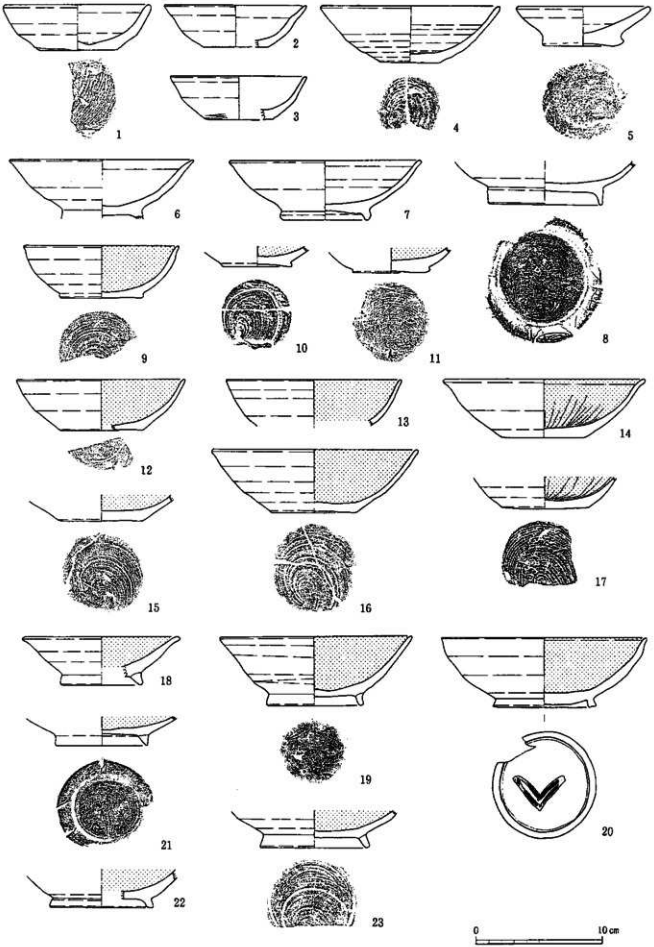
第57図　SB40（1～6）・遺構外（7～13）



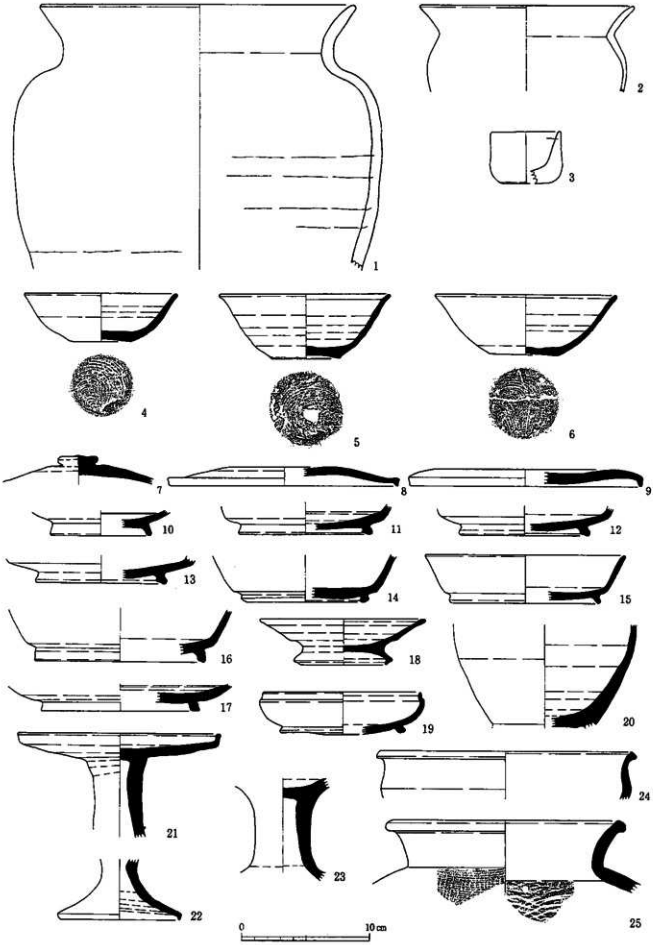
第58図　SB04（1～6）・SB12（7～10）・SB15（11～23）



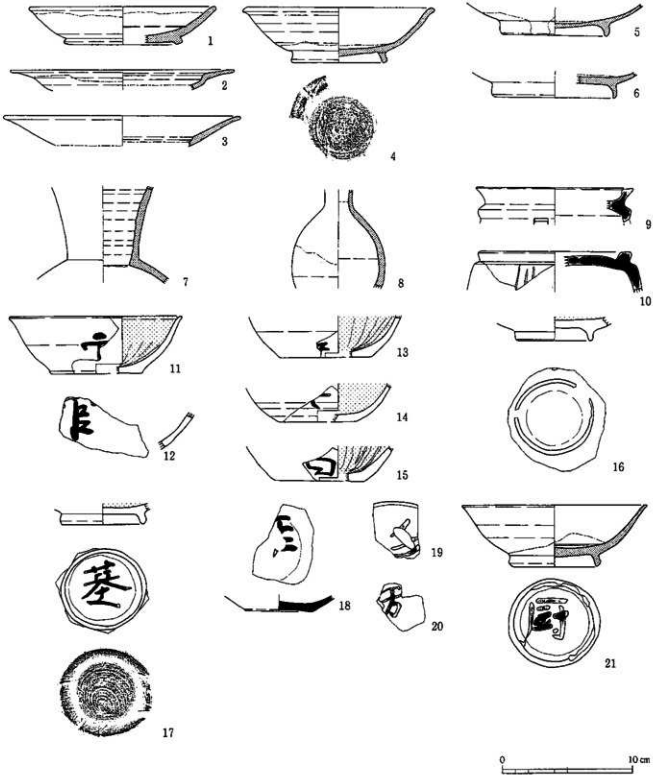
第59図　SB22（1～4）・SB24（5～8）・SB36（9）・SB45（10）・SB57（11）・SB58（12）
SK04（13）・SK40（14）・SK44（15～18）・ST13（19・20）・集石土坑（21）



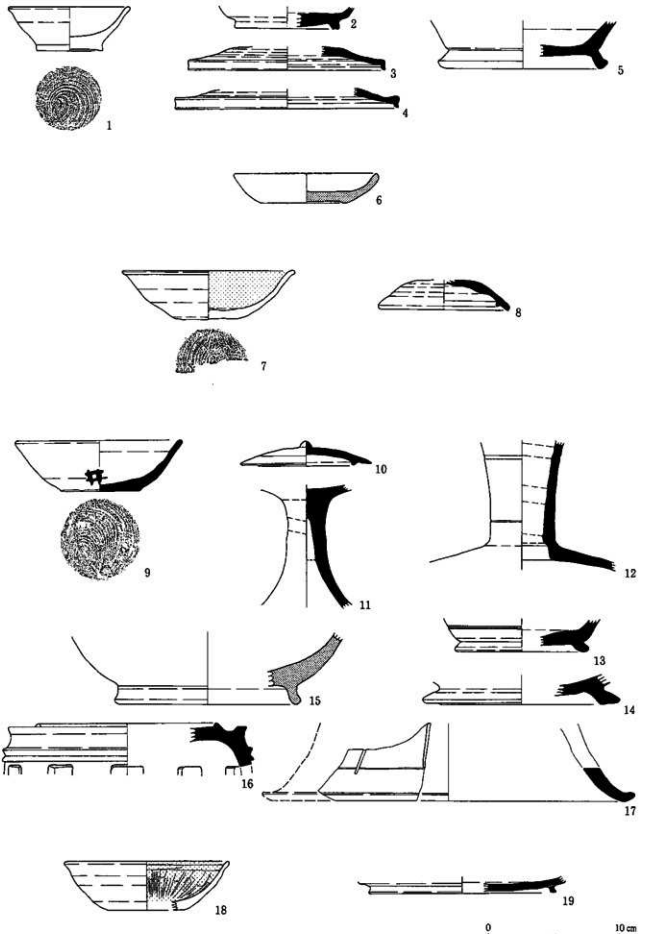
第60図　SD10



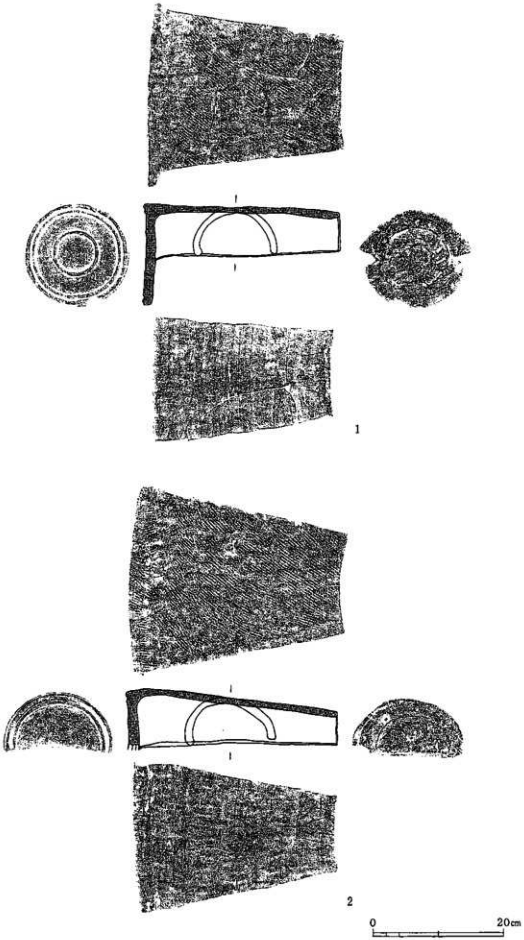
第61図　SD10



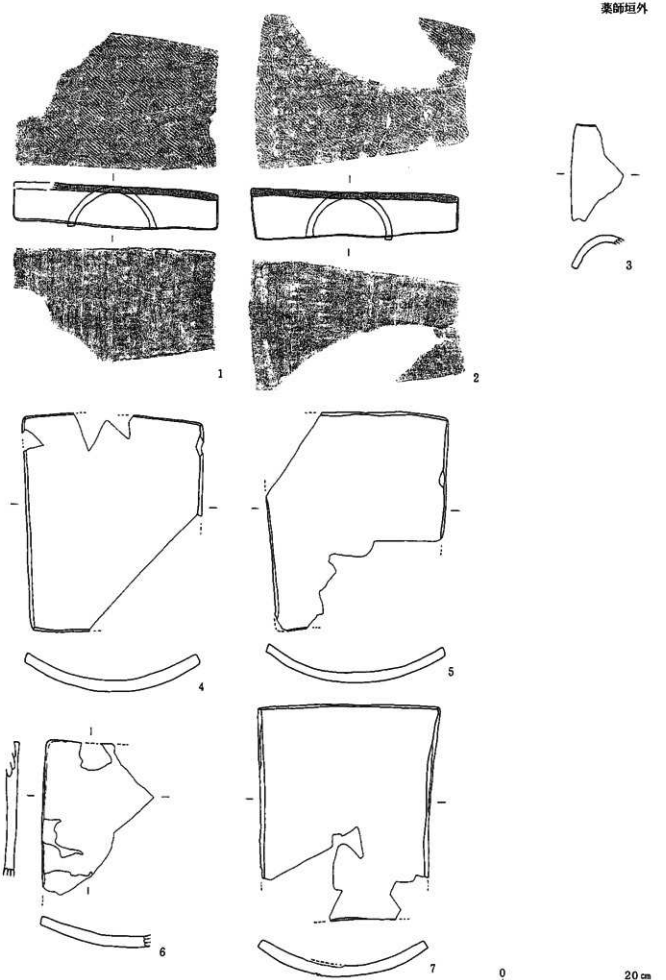
第62図　SD10



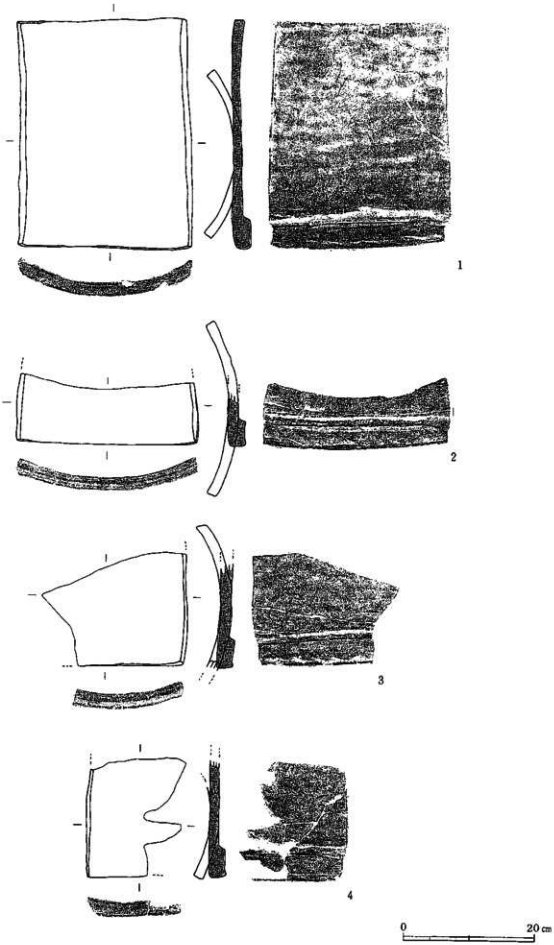
第63図　SD11（1～5）・SD12（6）・SD33（7・8）・SD34（9～17）・SD36（18）・SD40（19）



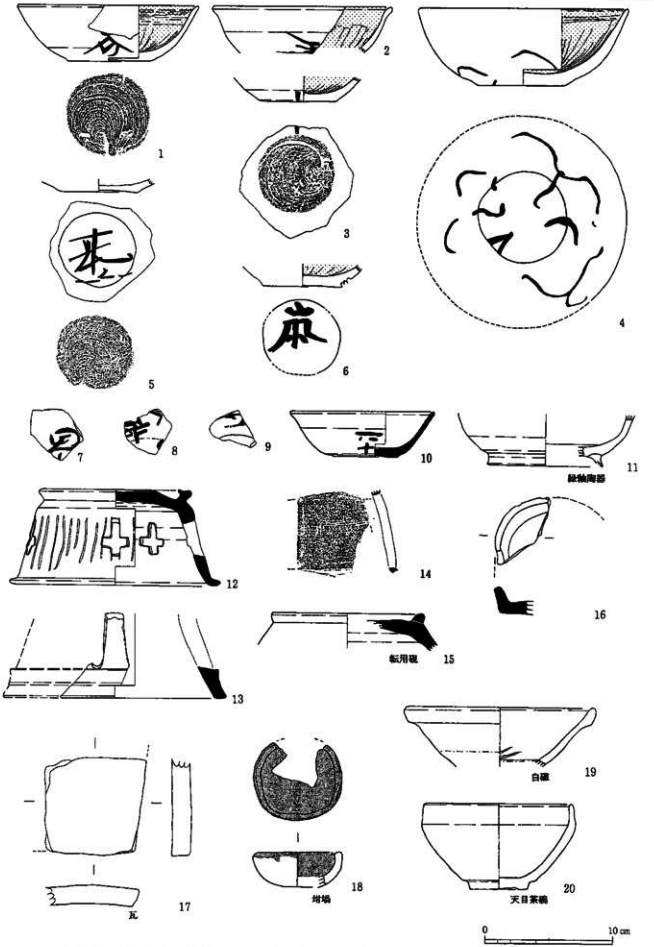
第64図　SD16



第65図　SD16



第66図　SD16



第67図　YKS4753−1（1～9・13）・YKS4687（10・12）・YKS4754（11・14・19）
YKS4746（15・16・20）・YKS4674−1（17）・YKS3450−1（18）

遺物写真図版

（田中倉垣外・恒川Ａ・恒川Ｂ・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍）

SB02

SB03

SB24

SB25

SB10

SB38

SB43

SB51

SB54

SB44

SB55

SB60

SB65

SB71

SB56

SB76

SB83

SB86

SB92

SB100

SB159

SB168

SB176

SB178

SB179

SB264

SB268・269

SB268・269

SB10　カマド

SB10　カマド

SB76　硯

SB02　刻書

SB03　墨書

SB03　墨書

SB03

SB39

SB75

SB77

SB94

SB03　刻書

SK13　硯

遺構外　硯

SB05

SB24

SB05 規

遺構外 規

転用硯（左：表面　右：裏面）

遺構外　硯

SB04

SB15

遺構外

SD10　硯

SD34　硯

遺構外　硯

SD16　軒丸瓦

同裏

SB45　瓦当（左：瓦当面　右：瓦当裏面）

SD16　丸瓦

SD16　平瓦

同裏

SD16　平瓦

同裏

SD10　墨書

遺構外　墨書

SD10

遺構外

SD10

遺構外

SD10

遺構外

遺構外

報告書抄録

ふりがな	ごんがいせきぐん（たなかくらがいと・ごんがえい・ごんがびい・あみだがいと・あらやしき・やくしがいとちせき
書名	恒川遺跡群（田中倉垣外・恒川A・恒川B・阿弥陀垣外・新屋敷・薬師垣外地籍）
副書名	遺物編その1（古代・中世）
巻次	
シリーズ名	
編著者名	伊藤尚志・澁谷恵美子
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-8501　長野県飯田市大久保町2534番地　TEL.0265-22-4511
発行年月日	西暦2005年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	調査期間	開発面積	調査原因
恒川遺跡群 田中倉垣外 恒川A 恒川B 阿弥陀垣外 新屋敷 薬師垣外	飯田市座光寺	20205	北緯35°31′48″ 東経137°51′59″	昭和57年度 ～ 平成13年度	範囲確認調査 緊急調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
恒川遺跡群	官衙址 集落址	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世	縄文時代土器・石器 弥生時代土器・石器 古墳時代土師器・須恵器 奈良時代土師器・須恵器 平安時代土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器 硯・石製品・鉄製品 木製品	・縄文時代から中世に亘り継続する集落址 ・古代伊那郡衙址 ・郡衙に関連する集落址

恒川遺跡群
— 遺物編その1（古代・中世）—

2005年3月　発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
長野県飯田市教育委員会
印　　刷　飯田共同印刷株式会社